

かわ だ し やかた あと
川 田 氏 館 跡

—川田保育園地点—

いわ さき い せき
岩 崎 遺 跡

—綿内小学校プール・体育館地点—

2 0 0 1 ・ 3

長 野 市 教 育 委 員 会

序

長野市域には1300余の遺跡が周知されています。なかでも千曲川の両岸には自然堤防が発達し、帯状に遺構密集度の高い弥生時代以降の遺跡が複合して形成される特色があります。長野市若穂川田・綿内地域においても自然堤防と後背湿地が複雑に形成され、近年各種の大型開発事業が進展して、川田条里遺跡・高野遺跡・榎田遺跡のような大規模遺跡が次々と調査され、若穂地域の古代の姿が次々と明らかになってきました。

今回ここに報告いたします調査地は川田氏館跡の東側に位置する僅かな範囲であり、岩崎遺跡においても綿内小学校のプール・体育館改築地が調査対象となり、ともに遺跡の一部を明らかにしたにすぎません。しかし、調査の成果をみますに前記した大規模遺跡にみられない所見を得ることができました。川田保育園地点では中世・戦国時代の遺構の存在が初めて明らかとなり、堀状遺構や貼床を伴う掘立柱建物跡などが確認されています。綿内小学校地点が人々の生活の場として利用されるようになるのは奈良時代以降であること、そして13世紀代まで生活の痕跡を残していることなどが新たに判明しました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財第98集」として報告いたします。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として関係各方面に広くご活用いただければこの上ない喜びであります。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご支援をいただいた関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

長野市教育委員会

教育長 久保 健

例 言

- I 本書は、長野市（保健福祉部児童福祉課）が施工する川田保育園改築および長野市教育委員会（総務課）が担当する綿内小学校プール・体育館改築に伴う緊急発掘調査報告書である。
- II 発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施した。
- III 本書は、調査により検出された遺構・遺物を中心に基本資料を提示することに重点をおいた。
- IV 遺構の測量は、平面直角座標第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、コーデックシステムを援用するため㈱写真測図研究所へ委託した。
- V 遺構分布図に遺構略号をもちいた。竪穴住居跡（SB）・掘立柱建物跡（ST）・井戸跡（SE）・土坑（SK）・溝跡（SD）・堀跡（SF）・不明遺構（SZ）である。
- VI 調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

[川田氏館跡（川田保育園）]

- 1 調査地は、長野市若穂川田字古屋敷1937番地他に所在する。
- 2 発掘調査は、平成11年度に実施し、保護対象面積861㎡のうち攪乱地をのぞく680㎡を調査した。
- 3 土器・陶磁器類についての分析・編年等は、原明芳氏に依頼し、玉稿を賜った。
- 4 遺構図は、全体図を1：200、建物跡柱穴列・堀跡を1：80、土坑を1：40、溝跡を1：125の縮尺で提示した。
- 5 遺物図は、土器・陶磁器類・大形製品等を1：4、小形製品を1：2で提示した。
- 6 遺物写真の番号は、実測図遺物番号に対応する。
- 7 遺跡の略号は、「KWC」と称する。

[岩崎遺跡（綿内小学校）]

- 1 調査地は、長野市若穂綿内字岩崎6656番地（プール地点）・6662－1番地他（体育館地点）に所在する。
- 2 発掘調査は、プール地点では平成6年度に実施し、調査面積が100㎡で、体育館地点では平成12年度に実施し、調査面積が1050㎡である。
- 3 中世土器・陶磁器類についての分析・編年等は、原明芳氏からご教示いただいた。
- 4 遺構図は、全体図を1：200、竪穴住居跡・井戸跡・土坑・溝跡を1：80の縮尺で提示した。
- 5 遺物図は、土器・陶磁器類・大形製品等を1：4、小形製品を1：2で提示した。
- 6 遺跡の略号は、プール地点が「IWP」、体育館地点が「IWT」と称する。

川 田 氏 館 跡

—川田保育園地点—

目 次

I	調査の経過	1
1	調査の事務経過	1
2	調査日誌	1
3	調査の体制	3
II	調査地周辺の環境	4
1	地理的環境	4
2	歴史的環境	7
3	川田氏館跡と川田条里遺跡	11
III	調査	13
1	試掘調査	13
2	1次面の遺構	13
(1)	遺構の分布	13
(2)	溝跡	14
(3)	堀跡	16
(4)	柱穴群・柱穴列	18
(5)	土坑	19
3	2次面の遺構	22
(1)	遺構の分布	22
(2)	貼床状遺構	24
(3)	焼土貼床状遺構	26
(4)	柱穴群・柱穴列・配石列	26
(5)	土坑	30
4	遺物	32
(1)	土器	32
(2)	陶器・磁器	34
(3)	土製品	34
(4)	金属製品	37
(5)	鹿角製品	37
(6)	石製品	37
IV	結語	40

挿 図 目 次

図 1	調査区概要図	2
図 2	調査地地形図	5
図 3	長野市防災基本図形分類図	6
図 4	中世関係遺跡分布図	8
図 5	霜台城跡(転載図)	9
図 6	加増山城跡 (転載図)	10
図 7	古城山城跡 (転載図)	10
図 8	調査地周辺の字界図	12
図 9	1 次面遺構分布図	14
図 1 0	1 次面堀跡 (北より)	16
図 1 1	堀跡・柱穴列・溝列実測図	17
図 1 2	1 次面 1 号建物跡実測図	18
図 1 3	1 次面 5 号土坑実測図	19
図 1 4	1 次面 1 号～ 4 号・ 6 号～ 11 号土坑実測図	20
図 1 5	2 次面遺構分布図	22
図 1 6	2 次面貼床状遺構	24
図 1 7	2 次面 3 号・ 4 号建物跡実測図	25
図 1 8	2 次面焼土貼床状遺構	26
図 1 9	2 次面 5 号(左)・ 2 号(右)建物跡実測図	27
図 2 0	2 次面 6 号～ 10 号建物跡実測図	28
図 2 1	2 次面 7 号・ 12 号～ 24 号土坑実測図	30
図 2 2	2 次面 25 号・ 26 号土坑実測図	31
図 2 3	遺構・検出面出土土器実測図	35
図 2 4	遺構・検出面出土遺物実測図	36
図 2 5	古銭拓影	37
図 2 6	石製品実測図	37

I 調査の経過

1 調査の事務経過

川田保育園改築に伴う発掘調査の実施に至る経過を関係書類から日を追って記述する。

平成7年10月6日付 「平成8年度以降の建設・土木工事計画について（照会）」

10月16日受付 児童福祉課「川田保育園建設 10年度設計・11年度建設施工、事業面積900㎡」の回答。

11月20日付 「平成8年度以降の建設・土木工事に係る埋蔵文化財保護について（通知）」で、川田小学校周辺は川田氏館跡・川田古屋敷遺跡の名称で周知の埋蔵文化財包蔵地であり、包蔵状況を確認するため試掘調査が必要と回答。

平成10年4月14日付 「開発行為に伴う埋蔵文化財確認調査について（依頼）」受理。

5月19日 試掘調査実施。

5月21日付 川田氏館跡推定範囲内にあり、埋蔵文化財保護措置が必要である旨を記した「埋蔵文化財試掘・確認調査報告書」を児童福祉課長・長野県教育委員会教育長宛提出。

6月16日 基礎杭耐圧試験掘削に立会。

平成11年6月22日付 長野市長塚田佐より文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」受理。24日付発掘調査を実施し記録保存をはかる必要がある旨を記して長野県教育委員会教育長宛進達。

6月24日付 長野県教育委員会教育長宛「発掘調査範囲について（申請）」提出。

7月5日付 長野県教育委員会教育長より「発掘調査範囲の決定について（通知）」・「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」受理。

7月13日付 文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告について」提出。

7月12日付 (株)川瀬工務店代表取締役川瀬信夫と「重機等賃貸借契約書」締結。

7月15日付 (株)写真測図研究所代表取締役杉本幸治と遺構測量等「業務委託契約書」締結。

7月12日～8月9日 発掘調査実施（稼働20日）。

8月12日付 長野中央警察署長宛「埋蔵文化財の発見について（通知）」、児童福祉課長・長野県教育委員会教育長宛「発掘調査終了届（通知）」提出。

2 調査日誌

7月12日 調査機器材搬入。A・D区から表土除去作業開始。重機・ダンプ各2台。

7月13日 表土除去作業継続。前日来の降雨のため排水作業。重機・ダンプ各2台。

7月14日 表土除去作業継続。排水作業後A・C・D区遺構検出作業。重機・ダンプ各2台。

7月15日 A区から調査開始。

7月16日 C区の調査開始。1・2号土坑。

7月19日 D区の調査開始。2～5号溝跡。B・E区遺構検出作業後、調査開始。1・6号溝跡、3～6号土坑。

7月21日 B・E区調査継続。遺構測量。

7月22日 F・G区遺構検出作業後、調査開始。遺構図結線。

7月23日 F・G区調査継続。

7月26日 A～F区清掃調査後、写真撮影。6号溝跡・堀跡。

7月27日 堀跡調査継続。F・G区遺構測量。

7月28日 遺構図結線後、清掃調査、写真撮影。1次面調査終了。

7月29日 遺物洗浄作業。重機による2次面露呈作業開始。

7月30日 2次面露呈作業継続。A・B・D区遺構検出作業後、調査開始。貼床状遺構。

8月2日 貼床状遺構調査継続。C区遺構検出作業後、調査開始。

8月3日 E・F・G区遺構検出作業後、調査開始。焼土貼床状遺構・7号土坑。

8月4日 焼土貼床状遺構調査継続。F区東側・G区柱穴群。

8月5日 2次面清掃調査後、写真撮影。遺物洗浄作業。

8月6日 遺物洗浄作業。遺構測量。

8月9日 遺物洗浄作業。遺構図結線。調査器機材撤収し、現地における調査完了。

8月10日・11日 埋め戻し作業。重機・ダンプ延各4台。

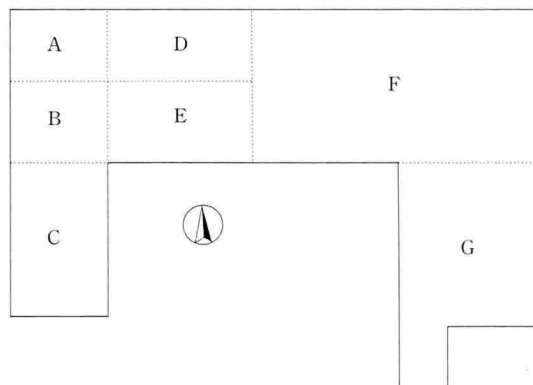


図1 調査区概要図



I-1 7月15日



I-2 7月26日



I-3 8月4日



I-4 8月6日

3 調査の体制

調査主体者 長野市教育委員会教育長 久保 健
教育次長 今井克義
教育次長副任 塚田昌稔
総括管理者 埋蔵文化財センター所長 中島昌之 (H10)
礒野久夫
庶務係 庶務係長 北村実寛 (経理・契約事務)
職員 青木厚子 (経理庶務)
調査係 所長補佐兼調査係長 矢口忠良 (主任調査員、報告書編集、遺構写真、遺物実測)
主査 千野 浩 (調査事務、遺物写真)
飯島哲也 (試掘調査)
主事 風間栄一
小林和子
専門主事 荒木 宏 (注記)
専門員 山田美弥子 (遺構整図)
中殿章子・西沢真弓・小野由美子・堀内健次・藤田隆之・宮川明美・清水竜太・小林まゆ佳 (H10)・北村広充 (H12)
特別調査員 長野県教育委員会文化財生涯学習課指導主事 原 明芳 (遺物分析・編年、III章4節遺物執筆)
調査作業員 池田賢二・一色茂喜・内山善徳・小宮山武男・関崎文子・橋爪孝二・村松正子
整理調査員 矢口栄子 (遺構実測)・武藤信子 (遺構実測)・青木善子 (遺構図・遺物図浄書)

以上の方々の他に、建設担当の保健福祉部児童福祉課係長仁科良勇・建設部建築課係長柳沢盟各氏、工事請負会社の(株)川瀬工務店現場代理人天童美紀氏には発掘調査の実施にさいし何かとご支援をいただいた。記して感謝申し上げます。



I - 5 発掘調査従事者

II 調査地周辺の環境

1 地理的環境

長野市域の千曲川左岸は南部で犀川、北部で裾花川・浅川による広大な扇状地を形成している。川中島扇状地・裾花川扇状地・浅川扇状地と呼称されている。特に犀川によってもたらされた莫大な土砂堆積物は旧千曲川の流路及び右岸の地形に大きな影響をあたえている。一方、左岸と対照的に右岸は火山性の山々がそびえ立ち、その支脈が千曲川方向に突出し、支脈間は小さく狭い湾入地形と山間部は勾配が急な扇状地を形成している特色がある。また、左岸よりも自然堤防と後背湿地が発達している点も原始・古代の遺跡の展開をみる上でみのがせない（3図）。

調査地周辺の地形を瞥見すると、東に保基谷岳（1529.1m）を主峰に北側に熊窪山（1253.7m）・太郎山（996.9m）が連なり、南に堀切山（1157.4m）・奇妙山（1099.5m）・大星山（652.0m）そして支脈袖林山（544.1m）に囲まれた典型的な谷地形である。この中を保基谷岳を水源とする保科川、堀切山からの赤野田川の二つの河川によって南東から北西方向に複合扇状地が形成され、保科扇状地と呼ばれている。山懐の深い保科川の方が集水能力が高いぶん堆積力が強く、赤野田川を南の山裾付近まで追い込んでいる（4図）。この扇状地の堆積土は周囲の山地の崖錐からもたらされたもので、小角礫を多量に含んでおり、『長野県町村誌』 保科村の地味について「其色黒又赤黒雜り、眞土野土或は赤白砂交り質美悪相半す。（略）水利不便早に苦しむ。」とある。ちなみにこの扇状地のほとんどが旧保科村に属する。

旧川田村に属する扇状地端部から千曲川にかけて地形が一変する。千曲川の影響を強く受けており、犀川の堆積力が最も強かった時期に千曲川は関崎原から袖林山山麓を経て保科扇状地先端部まで湾入していたものと考えられ、川田条里遺跡を残す広い後背湿地と町川田・牛島地籍に自然堤防を形成する。後背湿地には扇状地先端部



II-1 調査地の周辺の航空写真（平成2年6月撮影、㈱ジャステック）

の伏流水による湧水と赤野田川が注ぎ込んでいるが、「水利便ならず。盛夏早魃の憂多く、又洪水の難あり。」と記する。赤野田川の水量と牛島地籍にみられる輪中集落を物語る記述と考えられる。

〔参考・引用文献〕

『長野県町村誌』 長野県 昭和10年

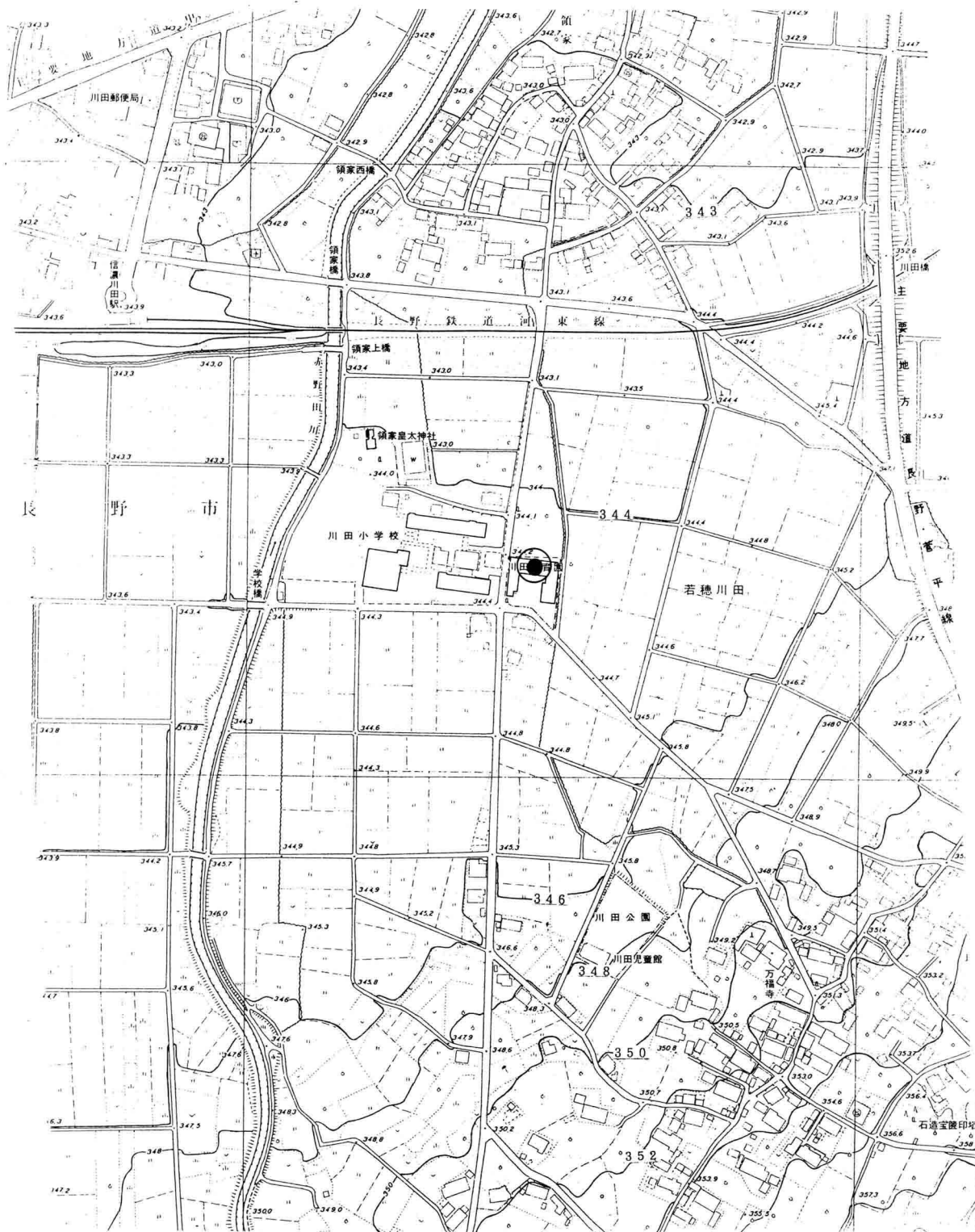
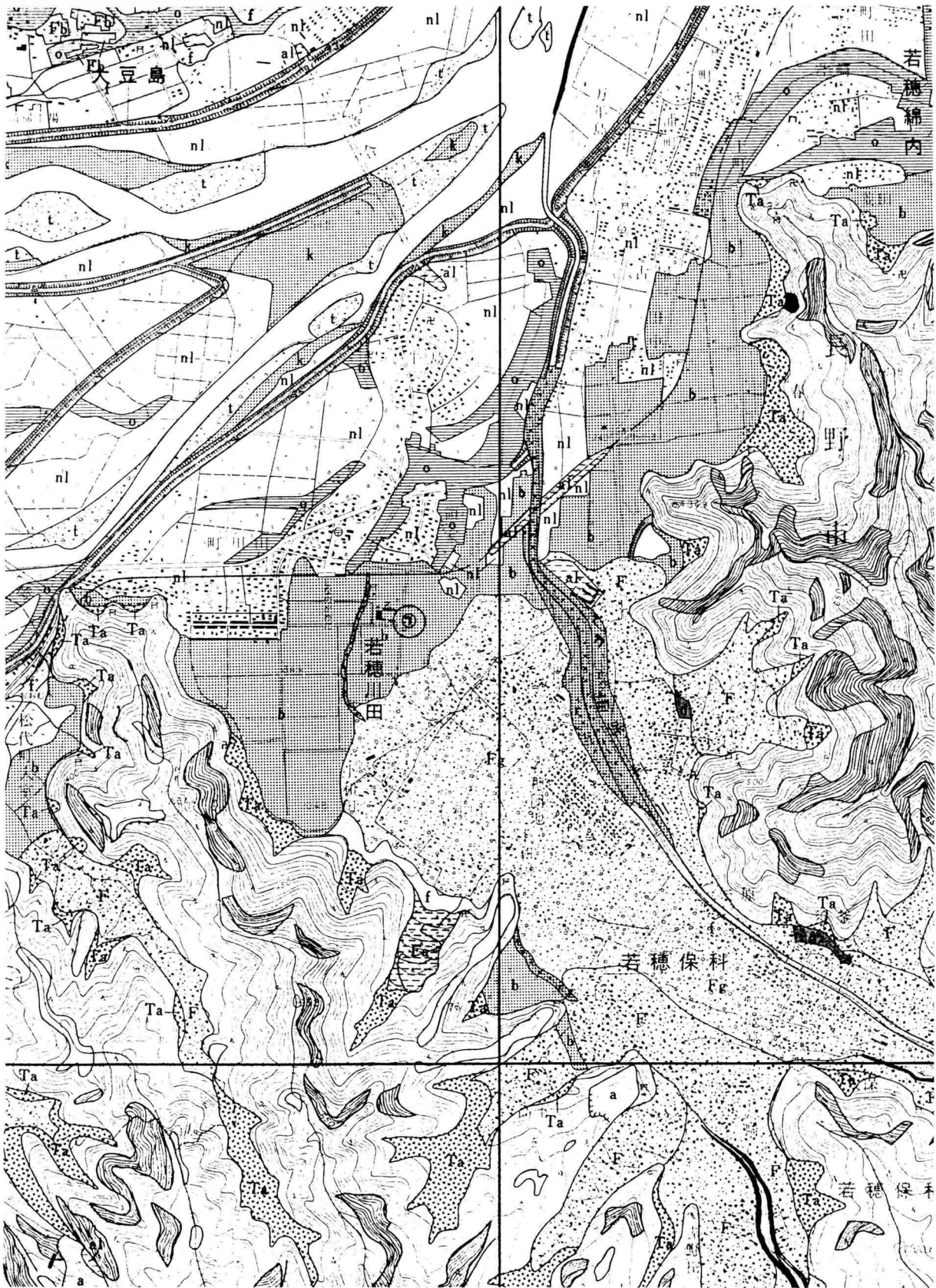


図2 調査地地形図 (●調査地、1:5,000)



nl 自然堤防 b 後背湿地 o 旧河道 Fg 緩扇状地 Ta 崖錐

図3 長野市防災基本図地形分類図 (1:25,000)

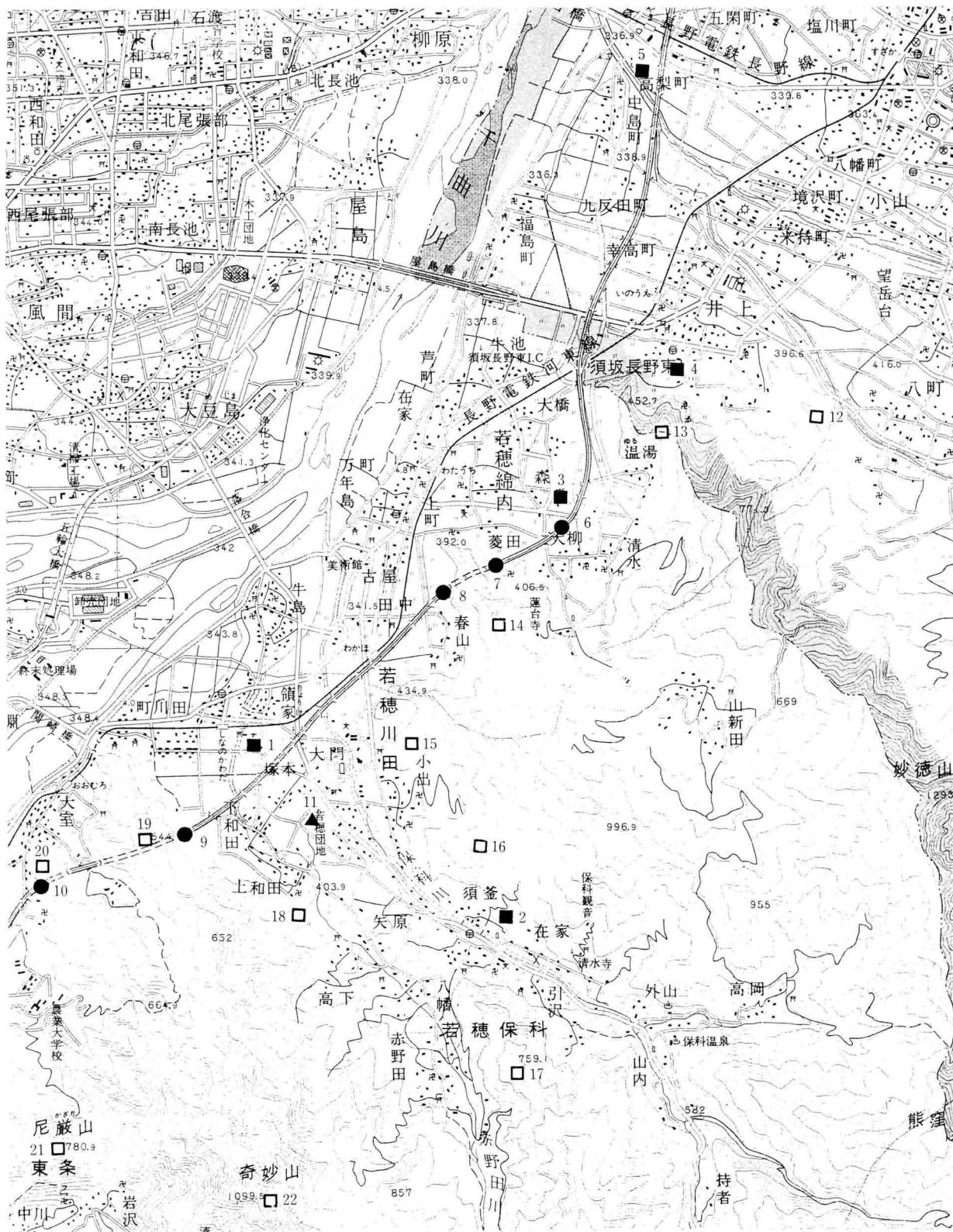
2 歴史的環境

保科扇状地・川田沖積地は古代から一貫して歴史的事象を共有している。承平年間（935年頃）に編纂された『和名類聚抄』に高井郡4郷の郷名中に穂科の記載があり、川田条里遺構がある沖積面の生産力を背景にした旧保科村・旧川田村がその中心地域であったことは間違いなからう。平安時代末期から南北朝時代には伊勢神社外宮領の御厨が設立され、南北朝時代まで存続している。『吾妻鑑』文治2年（1186）「乃貢未済の庄々」の中に保科御厨があり、『神鳳抄』建久4年（1193）の項に長田御厨一名保科と記載され、延元4年（1339）「神領給人引付」（神宮文庫）に長田御厨がみられ、明德3年（1392）「高梨朝高言上状」（高梨文庫）に高井郡保科御厨うち善哉郷云々とあり、これ以後御厨記載の文献資料から姿を消し、御厨領内に江部氏の私領存在することを示し、戦国時代には消滅してしまった。ちなみに善哉郷は上和田地籍に比定されている。

さて、近郷の情勢をみると、木曾義仲の武士団の中に須坂市を本貫とみられる高梨忠直・井上光盛がおり、12世紀末頃には高梨氏・井上氏は高井郡の千曲川右岸に勢力基盤を確立していた。保科氏がみえるのは治承4年（1180）の市原の戦いで越後平氏城氏に付いた保科権八が初見で、元暦元年（1184）の井上光盛の暗殺と家臣保科太郎の後家人に取立てられた記事が見える。次いで建保元年（1213）の泉親平謀略事件、承久3年（1221）の承久の乱で保科次郎が登場し、その後は北条氏の武士として保科御厨保科弥三郎が登場する建武2年（1335）の中先代の乱まで待たねばならぬが、敗軍の将である。永享12年（1440）の結城合戦『結城陣番帳』に28番寺尾氏等と共に保科殿、が記載されている。一方、川田氏の初見は建治元年（1275）京都六条八幡宮造営の名簿に河田次郎跡とあり、建治元年以前に後家人として河田次郎が存在していた。保科氏の名前はない。康正2年（1456）の『諏訪御符礼之古書』花会の条に川田・保科両人とあり、寛正7年（1466）の同書では宮頭川田、保科左馬助長光、同桑井長経がみえるものの文明19年（1487）には郷名のみになる。中世的小国人武士団の衰退を意味するものであろう。明応・永正年間（1491～1504）に村上顕国氏の支配する所となり、天文22年（1553）川田津島守、武田軍に敗れ村上義清に従い越後へ敗走するという。以上、古代末から戦国時代初期まで保科氏と川田氏の動向をみてきた。保科・川田両郷は地域空間では同一の事象を追うことができ、鎌倉時代初期には井上氏の配下であり、その後、後家人として独立するものの、村上氏の侵攻まで依然として井上氏の影響下にあった。

山城跡・館跡等史跡を瞥見する（4図）。保科川右岸の扇状地中央付近を俯瞰する太郎山の標高800mの支脈に霜台城跡がある。延徳年間（1489～92）に保科正利が築城と伝えられている。保科扇状地が奥まった堀切山の標高760mの支脈に加増山城跡があるが築造時期・城主は不明である。奇妙山系蓮平から扇状地に突出する標高400mの尾根上に三段の段郭・土居を残す和田東山城跡と称する遺構があるが、これまた全て不明である。山麓に「堀の内」の字名がある。保科字須釜に保科氏館跡の比定地がある。永正10年（1513）村上頼衡の乱により字高下にあった広徳寺焼失・居館延焼し、保科正人が伊那高遠に敗走といい、広徳寺を居館跡に天文2年（1533）再建したと伝えられる。弟左近将監館跡が字町滝崎にあったというのが定かでない。以上が旧保科村所在である。

旧川田村では町川田南背後の古城山（554m）山頂に天文年間（1532～55）に武田氏が構築した砦跡と伝承する古城山城跡がある。川田城とも呼ばれ川田津島守の居城とも考えられている。小出集落の北裏に位置し、扇状地に突出する標高500mの尾根上に前山城跡（小出城跡）がある。霜台城跡が保科氏の本城とするならば前山城跡は出城とも考えられている。また一説に小出氏との関係を求める考えもある。この城跡から北方向へ峰続きに城ノ峰山頂（635m）に春山城跡がある。旧綿内村に属す。この地域で唯一歴史事象が残されている山城で、応永2年（1369）9月10日関東管領・信濃守護上杉朝房守護代小山氏一族藤井下野入道代官上塔の左近蔵人が翌年2月10日まで籠城し、反守護軍（村上軍）と戦ったことが判明している。もともとこの城は井上氏の居城と考えられ、井上氏は守護派に属していたことになる。また、南北朝時代にはこの山城は機能していたことになる。春



- 1 川田氏館跡 2 保科氏館跡 3 小柳井上氏館跡 4 井上氏館跡 5 高梨氏館跡 6 榎田遺跡
- 7 北前山遺跡 8 北之脇遺跡 9 川田条里遺跡 10 小滝遺跡 11 王子塚宝篋印塔 12 竹の城跡
- 13 城の峯山城跡 14 春山城跡 15 前山城跡 16 霜台城跡 17 加増山城跡 18 和田東山城跡
- 19 古城山城跡 20 霞城跡 21 尼巖城跡 22 奇妙山狼煙台跡

図4 中世関係遺跡分布図

山城から前山城をへて霜台城は太郎山の支脈の尾根上に位置すること、上杉朝房は別称霜台と呼ばれていたことから推定すればこの3城は同じ頃築城の可能性がある。そして、保科・川田の空間に村上氏が布陣していたものと推測され、この頃から村上氏の影響下にあったものと考えられる。この他に塚本地籍に王子塚と呼ばれる小円丘があり、その上に南北朝時代後期に造立が推定される石造宝篋印塔（市指定文化財）がある。保科氏または川田氏関係の供養塔であろう。

以下『上高井郡山城居館址類集』から関係史跡を転載する。

〔霜台城址〕（5図）

1 名称 霜台城址と呼ぶ。2 位置 保科村須釜および川田村小出の境界の突出せる山上にある。3 種類および構造 本丸、二ノ丸、三ノ丸共に稍ニ方形に近く、一人にて抱き上げ得る程度の石無数に積重ねたり、然かれども大部分はくづる。緩傾斜地には幾多の曲馬場を構築しあり。左右の側面は絶壁に近く急斜面にして容易に登り得ず。4 展望 本丸に立ちて北方を見れば、脚下に千曲川の流れあり。西方より犀川の合するあり。左手に川田城を見下し、遙かに茶白山、小田切城、旭山城、城山（長野）、若槻城、もとどり山城等を望む。5 附近の地名 其他 城窪、保科側にありて城址に近し。弾正岩、畳八枚位は敷かれるかと思はる。敵見坂、眺望のきくところなり。6 城址に関する史実および伝説 延徳年中保科弾正忠正利の築く所なりと伝ふ。保科氏は清和天皇六世の孫井上婦部介頼季五世の孫忠長、始めて保科に居り因て保科氏を称す。忠長より六世を正利と伝ふ。其子政則村山顕国と戦ひて敗れ伊那郡へ走る。後転々遂に会津公の祖となる。弟保科左近将監は村上氏、武田氏、織田氏の臣森氏、上杉氏の緒氏に属し保科を領す（上高井郡誌による）。また此の辺より焼小麦、折刀、木片等種々出たりと伝えられる。 調査 成田豊 北島辰雄

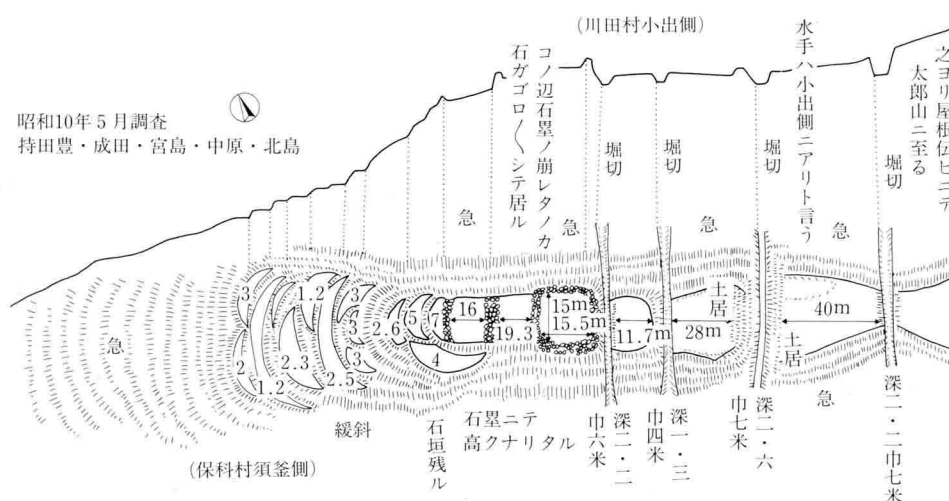


図5 霜台城跡（転載図）

〔加増山城址〕（6図）

1 名称 加増山城址とよんでいる。2 位置 保科村加増の西山上に在り。3 構造 東側—急傾斜にして、西側—緩傾なり。南、山内に通じ、北、若宮八幡社に下る。水ノ手、東南百米程下りたる所にある。4 展望 東を望めば馬背峠及仁禮口、菅平口を一望の中に収むを得、西及北を眺むれば善光寺を隔て、遙か西山の諸城址を一望の中に望を得。5 城主・事跡 不詳。 調査 北島辰雄・成田豊

[川田村居館址]

川田津島守 ○三百貫 川田地頭 川田津島守 ○川田津島守 越後へ走り、上杉氏の幕下となれり、城址—川田村字赤野田澤の東にあり、東西百三十八間、南北百六十四間、現在耕地と変せり。—以上上高井歴史— 川田氏の越後へ走りてより後の「文録定納員数目録」中より川田姓を拾ふ。福島須田相模守抱、同心二十九人四百八十九石五斗 川田玄蕃三十三人五百十八石三斗六升二合 川田喜三郎 七人百十五石四斗五升江州の衆本姓清原 川田九右エ門 与力在番九十七石二斗五升江州浪人 川田新次郎、川田権兵衛 十四石五斗信州仁禮衆川田次郎左衛門 居館址 現在はずっかり耕地で、土居、堀址らしきものなく居館址と見当つくべきものなし。古屋敷は領家部落の故地。枳形は方約六十間四面。神社は領家部落の神社なり。 調査 持田豊

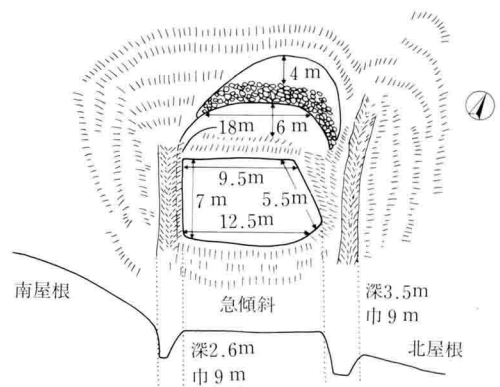


図6 加増山城跡（転載図）

[川田村古城山城址] (7図)

川田對馬居城と傳ふ。 調査 持田豊・田幸久蔵

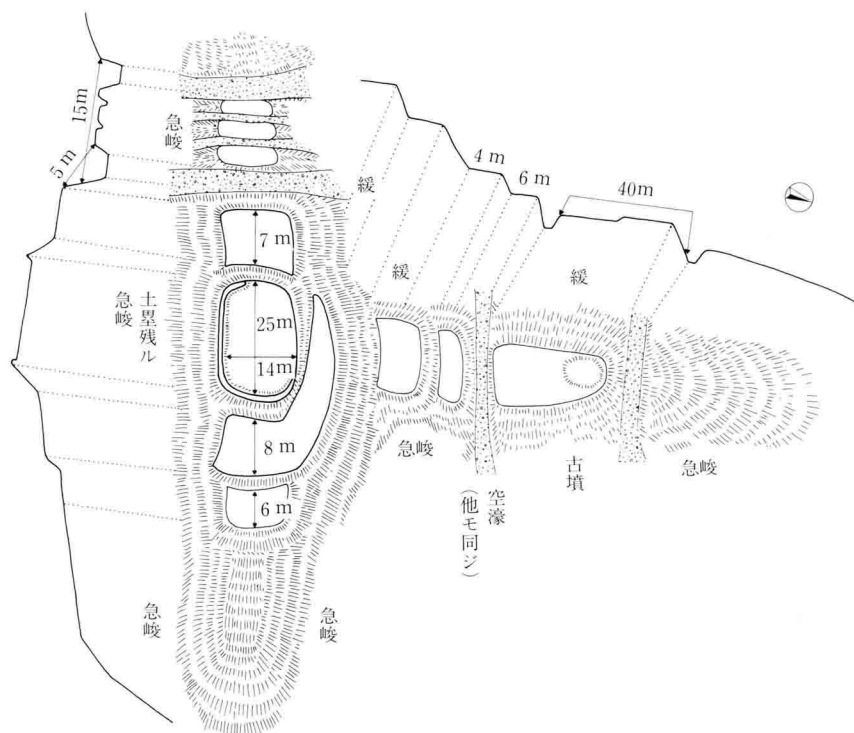


図7 古城山城跡（転載図）

〔参考・引用文献〕

『上高井郡山城居館址類集』上高井教育会 昭和13年

『長野県の中世城館跡—分布調査報告書—』長野県教育委員会 昭和58年

『長野県史通史編2』第2巻中世1 長野県史刊行会 昭和61年

『長野県史通史編3』第3巻中世2 長野県史刊行会 昭和62年

『長野市誌』第2巻歴史編原始・古代・中世 長野市 平成11年

『長野市誌』第8巻旧市町村史編旧上水内郡・旧上高井郡 長野市 平成9年

『長野市の文化財』長野市教育委員会 平成3年

3 川田氏館跡と川田条里遺跡

川田小学校周辺は字古屋敷と呼ばれている（8図）。東に柳原・塚本北、西に町下・町東の字名があるのに対し、北に領家、南に古城・古城玉ノ井と城館跡に関係ありそうな字名がある。町が付く字名は近世の川田宿にもとづくものであろう。『長野県町村誌』の川田村古跡の項に「古城跡 村の南赤野田澤の東にあり。東西138間、南北164間、今耕地になる。往古空濠ありて内堀、外堀という地名あり。何人の城跡なるや詳ならず。或伝ふ、河田某之に居ると、確乎ならず。」とある。この記事を検証してみよう。町村誌が編集された明治10年代には川田氏館跡の名称が使われていない。また、大正3年発行の『上高井郡誌』では川田古城址と称されており、「川田村馬守之に居る」と記載されている。赤野田川の東には南から古城玉ノ井・古城・古屋敷・領家と続き、どの字名に中心的集落または館が存在していたか不明である。東西138間は約248m、南北164間は約295mに換算でき、前記の字名をすべて含んであまりあり、沖積面から扇状地先端部まで囲い込む広大なものになり、居館跡の範囲とは考えられない。そのため町村誌の筆者は古城跡の名称を選定したのであろう。空濠の表記は沖積地内では地形的に無理があり、内堀・外堀も中世的館跡ではみられない構造である。

上信越自動車道建設に伴う発掘調査が実施され、調査地は川田沖積地をほぼ縦貫している。字返町・古城玉ノ井・古城・轟・塚本北・領家東の地籍にあたる（8図）。調査ではA～E地区に大別し、A区は古城山山麓から赤野田川、B区は主要地方道長野菅平線まで、C区は保科川まで、D区は県道小出綿内停車場線までを便宜的に設定している。遺跡名を川田条里遺跡と称し、弥生時代から中・近世に至まで水田遺構を中心に検出している。この中で川田氏館跡等と関係するとみられる遺構・遺物を抽出してみる。A区の山麓で中世末（16世紀後半～末）の礎石建物跡4棟・土坑・石垣・石列等が検出されているが、沖積面への展開をみせない。山城直下の日照の悪い北山麓に位置し、短期的な存続と考えられており、軍事的性格をにおわせる遺構群である。水田遺構をみると、B区では若干の内耳土器と溝跡が確認されているものの明確な水田面は検出されない。C区では無数の足跡が残る水田面と主要水路・3条の脇水路が確認されている。遺物は青磁碗・鉄滓・中世陶磁器・櫛が出土しており、上層からは龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・白磁皿・山茶碗こね鉢・珠洲焼すり鉢・瀬戸美濃鉄釉碗・唐津皿等11世紀末～18世紀初頭の陶磁器類が出土している。D区では明確な水田区画は確認されていないが、プラントオパール分析の結果3000個/gと高い数値を示し、水田面の存在は確実である。しかし、調査区全体に平安時代以前の水田区画が比較的明瞭であるのに対し、中世では不明の部分が多い。また、前記した中世的字名付近の調査であるにもかかわらず、館跡または集落に関与する遺物・遺構が確認されないこと、C区の遺物は保科川下流域であることに注意する必要がある。

〔参考・引用文献〕

『長野県市町村誌』長野県 昭和10年

『上高井郡誌』上高井郡教育会 大正3年

『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10 川田条里遺跡』(勸長野県埋蔵文化財センター他 平成12年

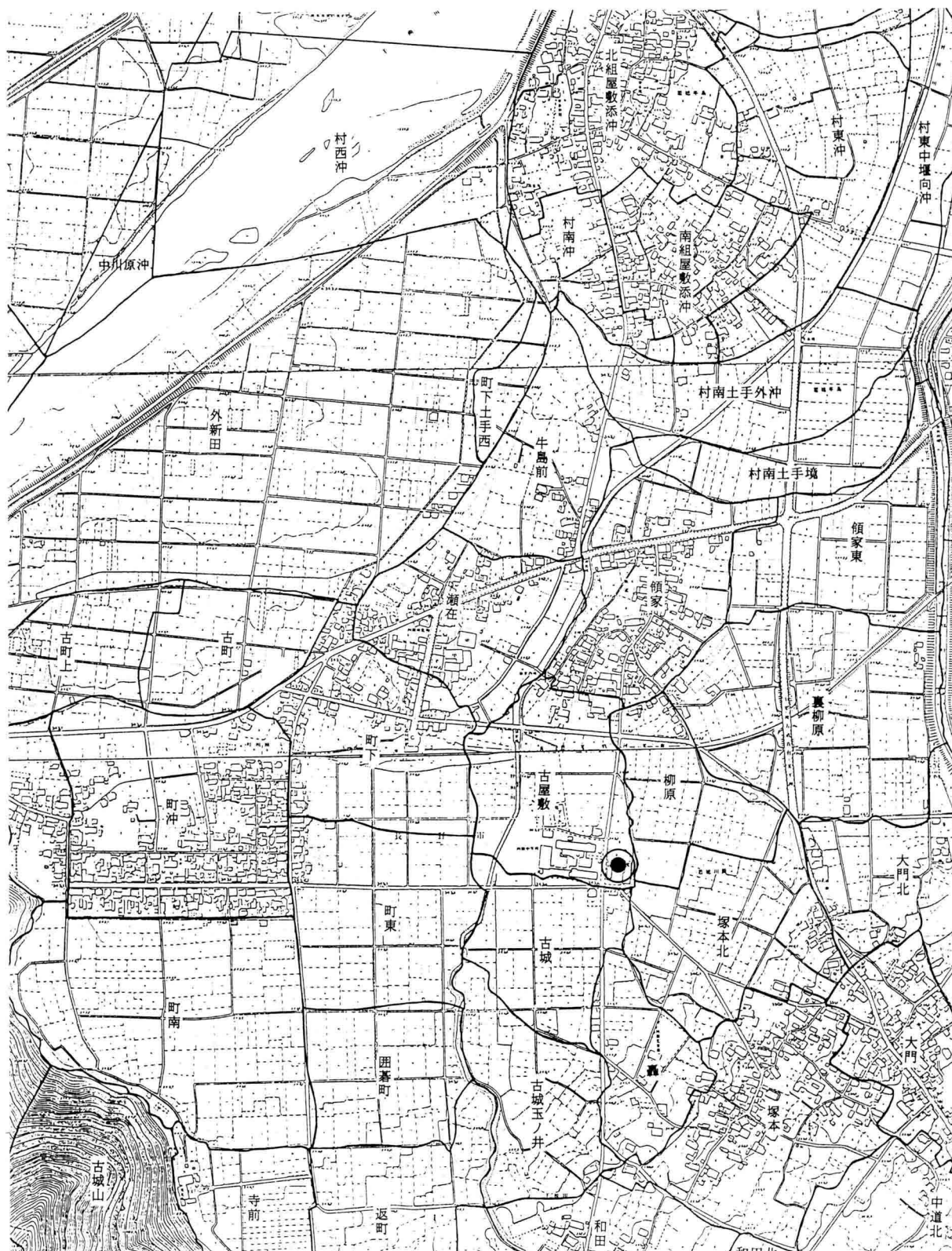


図8 調査地周辺の字界図 (1:10,000)

Ⅲ 調 査

長野市防災地図（3図）によると調査地は、広大な後背湿地の中にある。今では圃場整備により平坦化してしまい高低差はほとんど認められないが、調査地および川田小学校の北側に標高334mの等高線が走っていることに注意される。また、保育園地の東側に隣接して堰が穿たれ、小学校西側に赤野田川が北流している点を重視すれば、字古屋敷のうち少なくとも東側半分ほどの小学校と保育園の敷地は微高地を呈していたのではなかろうかと推測できる。後背湿地の中の微高地となれば防禦面から中世館の存立に有利な立地といえる。しかし、『長野県史遺跡地名表』には平安時代の須恵器をもって古屋敷遺跡として周知されている。中世的遺物採取の記載はない。

こうした事情から試掘調査を実施し、遺構の存在・内容・深さを確認することにした。

1 試掘調査

調査は平成10年5月19日に実施され次の所見を得た。試掘坑からの観察によれば遺物包含層2面と炭化物を多量に含む整地層1面を検出し、黄瀬戸と思われる陶磁器片が出土した。遺物包含層については土器片等の混入は少ないものの、炭化物・焼土が著しく、また炭化物が層状に堆積する整地面らしき遺構面は良好に残存している。以上の結果から開発予定地は中世の遺構群の範囲内と推定されるとし、発掘調査の必要を関係各課に通知した。その後基礎建築工法の確定の必要から掘削を伴う地盤耐圧試験が行われることになり、6月16日立会調査をすることにした。調査範囲は中型重機の規模でやや大きいものであり、遺構の破壊を懸念したが1次面から数個の柱穴が確認されたにすぎず、2次面の整地層と基盤層間から湧水が著しく遺構の検出は困難であったが、柱穴・柱根各1個確認したにすぎない。遺構群の圏外に近いところに位置するものと推定される。ちなみに現在の地表面は東に傾斜するが、調査地の中央付近の土層序は上層から10cmが盛土整地面、50cmで1次遺構面の暗黄褐色粘質土に至り湧水を伴う。20cm程の炭化物を含む灰褐色砂質土の間層を挟み、深さ70cmで2次遺構面の明黄灰色粘質土層になる。

2 1次面の遺構

(1) 遺構の分布（9図）

調査の進行と検出面および柱穴より出土する遺物を整理する都合上A～G区に分けた。A区・B区・D区・E区およびF区の西南部・G区西側に柱穴等の遺構が密集するのに対し、C区は散在的な分布状態をしめし、F区およびG区の堀跡の東側では遺構は確認されない。A区・B区・D区・E区に東西・南北方向に掘られた溝跡があり、その方向性から遺構群を区画しているものと考えられる。即ち、不連続ながら東西方向に走りE区東端付近で南に直角に屈折する1号溝跡によって区画されたB区・C区・E区が一画を形成し、さらにE区西で南北の短い溝跡により小区画される。1号溝跡と2号・3号溝跡で（長）方形に区画されたA区・D区西、3号・4号溝跡と1号溝跡東および東西方向の6号溝跡と直交するものと推定されるF区、6号溝跡から南に展開が予想されるG区に大別されよう。調査地内のG区南端は旧川田村役場跡にあたり、この建設時に掘削攪乱を受け、確認土層は青灰色のグライ土化し、基礎杭が残存する。

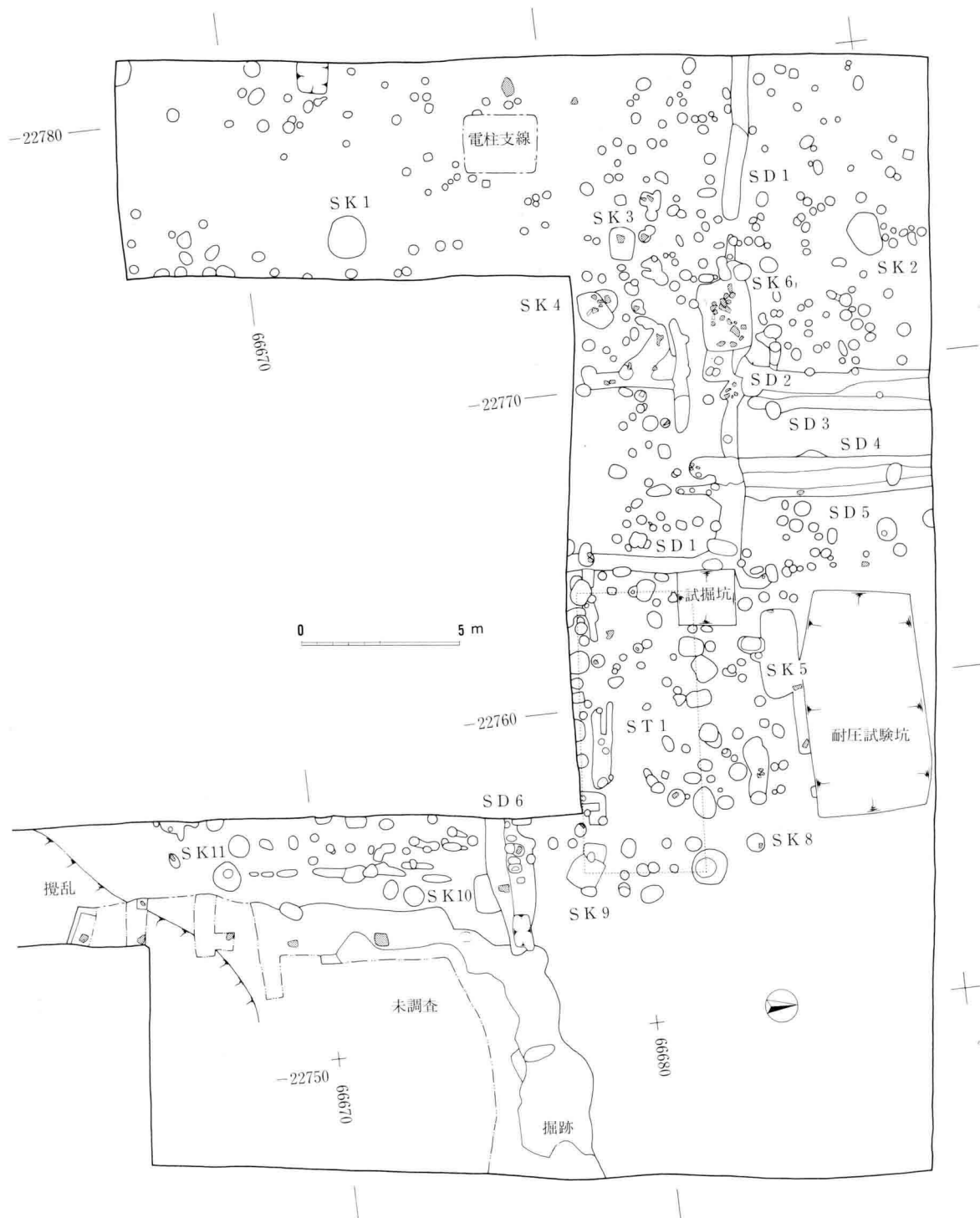


図9 1次面遺構分布図 (1:200、ST=建物跡・SK=土坑・SD=溝跡)

(2) 溝跡 (10図)

1号溝跡 6号土坑をはさんで不連続に東西方向に延び、調査地西端から16.3m付近で南へ直角に屈折し、G区の6号溝跡と直交するものと思われる。幅50～80cm、深さ15～30cmの規模である。南北溝は6号溝跡と交差後、C区に溝跡が認められないことから更に延長されている可能性もある。

2号～5号溝跡 D区にあり、共に南北方向の溝で1号溝跡に直交する。間隔から2条1対の可能性があり、溝間には数個の柱穴様小穴が存在するにすぎない。確認した長さは約6m、外縁の2号溝跡と5号溝跡の間隔規



Ⅲ-1 1次面遺構（東より）



Ⅲ-2 1次面遺構（西より）

模は最大4mである。2号溝跡は幅20～60cm・深さ20～25cm、3号溝跡は幅35～40cm・深さ20cm、4号溝跡は幅30～50cm・深さ15～20cm、5号溝跡は幅30～40cm・深さ10～12cmの規模である。

6号溝跡 G区の北端に位置し、東西に掘られ、東端は堀跡に接続する。確認した長さは5.5m程であるが、1号溝跡の南北溝と直交する可能性が高い。幅60～90cm・深さ15～30cmの規模である。

(3) 堀跡 (11図)

G区の東側に掘り込まれ、対辺の立上がりは不明であるが、堀跡と推定される遺構で、上面の形態は北側が東に屈曲するL形を呈する。南端は攪乱が始まっていて明確には判らなかったが調査範囲内で僅かの傾斜をもって終結する可能性も残す。掘り込みは緩傾斜をもってなされ、調査遺構の北半分程は更に段掘りされ内湾状を呈する。確認した規模は南北15m・東西8.5mを測り、段掘りは南北に5m程である。検出面から段掘り底面までの深さは最大で55cmである。覆土は上層に青灰色を呈するグライ土層で、下層に暗黄褐色土層の堆積が認められ、上層と下層は不整合面である。下層土は堀周辺に構築されていた土居の崩落土の可能性があり、また上層は遺構が埋りきらずに水を湛えていた状況での堆積土と考えられる。掘り込みから1～1.5mの緩斜面先端付近に外縁に並行して礎石様配石が認められた。配石は一辺30～50cmの偏平な角礫が用いられ、南北に6個がほぼ直線状に並ぶ。全長12.4mを測るが間隔は一樣ではなく、北から2.9m・2.9m・2.0m・2.8m・1.8mの数値になる。堀の礎石とも考えられるが控柱の痕跡は明確ではない。

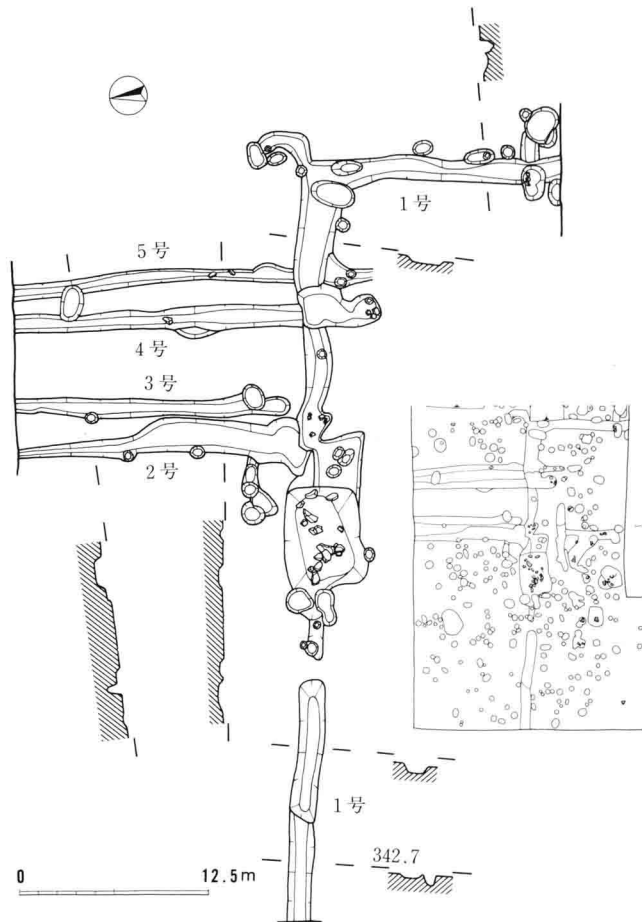


図10 1次面1号～5号溝跡実測図 (1:125)



III-3 1次面堀跡 (北より)

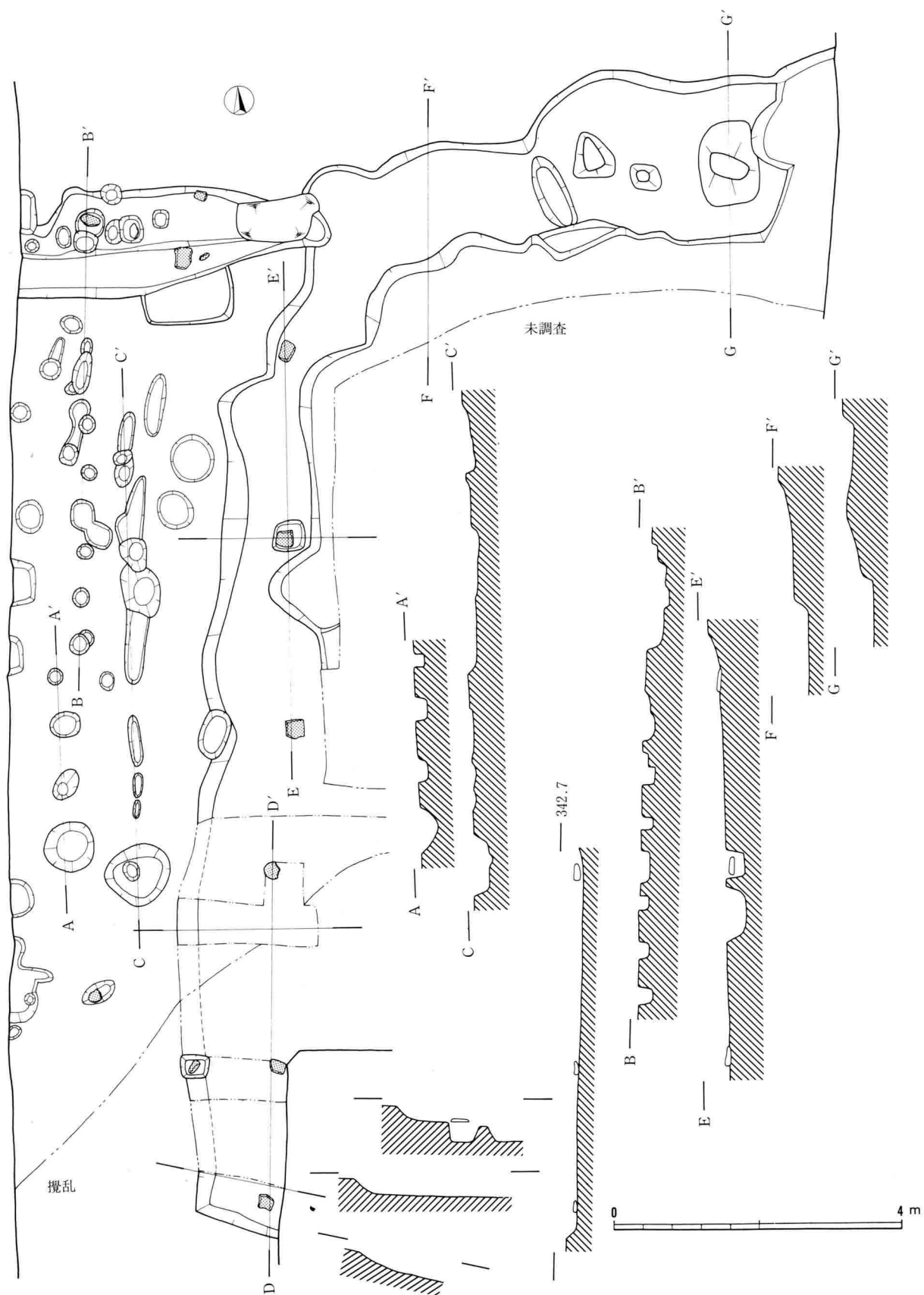


図11 堀跡・柱穴列・溝列実測図 (1 : 80、二点鎖線=調査範囲・攪乱)



III-4 1次面堀跡（南より）

(4) 柱穴群・柱穴列（9図）

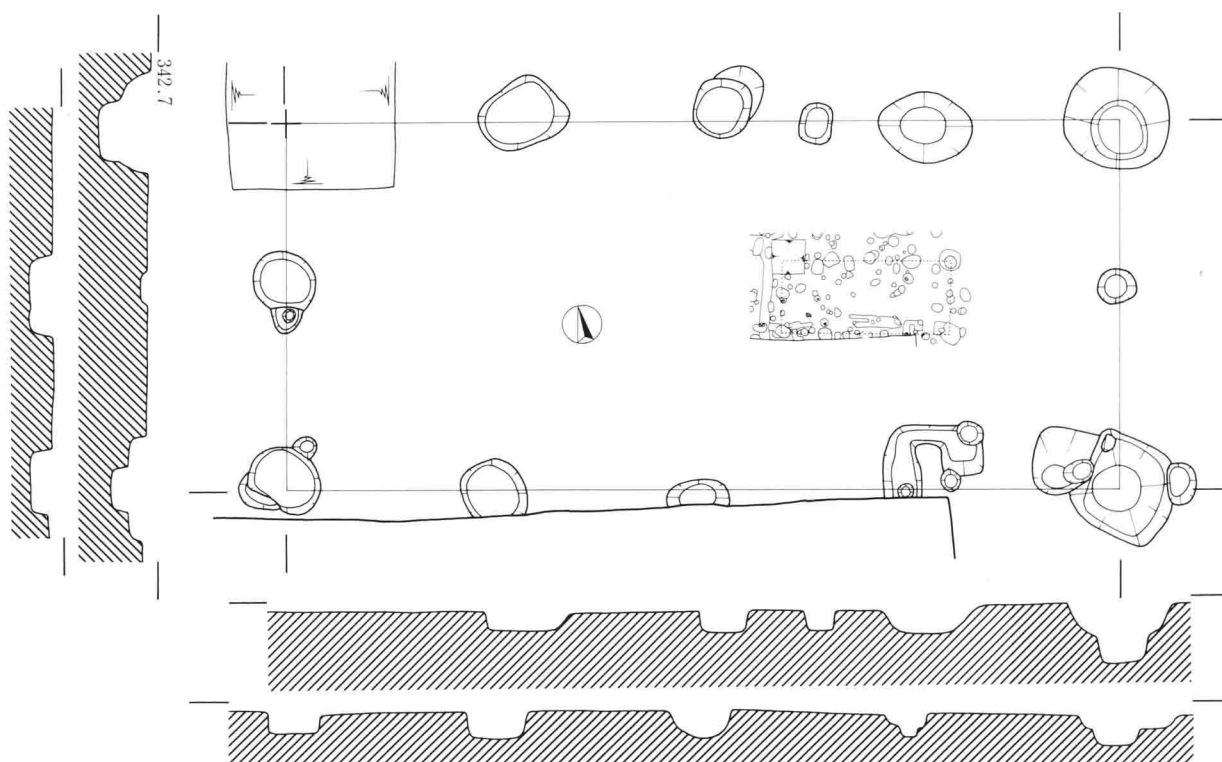


図12 1次面1号建物跡実測図（1：80）

柱穴と推定する小穴はF区東側とG区の堀跡内外に粗密の差があるものの各所に散在する。しかし長軸・短軸共に配置間数が等しく長方形配列になる柱穴列を抽出することは困難であるが、あえて掘立柱建物跡が予想される配列を提示する。前述したとおり溝跡が小区画を規定するものと考えれば、建物跡も溝方向に添って長軸が東西または南北に構築されているものと想定する。A区の区画には数多くの柱穴が散在するが建物跡と認定する柱穴列はみいだせない。1間×1間または1間×2間の小規模な納屋的小屋の存在が予想される。B区もA区同様1号溝跡よりに柱穴が密集するが間数の多い建物跡配列は確認されない。ただ、この区は複数の土坑が検出されており、土坑を覆う形態の2間×2間規模の作業小屋の構築が推定される。C区の柱穴の分布は散在的で、長方形配列になる柱穴列はない。D区では5号溝跡東側に柱穴群を確認したが、小屋組配列にならず建物が存在しても1間×1間の規模のものであろう。E区東の小区画では柱穴列が認められるものの長方形配列にはならない。F区にも多数の柱穴が確認されているが、この中から1棟の建物跡を抽出する。

1号建物跡(12図) 土坑状の大形柱穴からなるもので、梁間2間×桁行4間の規模と推定され、溝跡による規制によって構築されている。長軸は東西方向で、外側柱穴芯々間が9.0m規模になり、1間当たり2.25m程の数値になる。短軸の芯々間は4.0mの規模で、1間当たり2.0mである。当初からの空間利用・規制を考慮すれば、建物跡内外に散在する柱穴群は1号建物跡の廃絶後の遺構と考えられる。G区からは堀跡および石列遺構または土居に関与すると思われる浅く不連続な溝状遺構、柱穴間が狭い柱穴列が検出されている。建物跡は認められないが、調査区西側に土坑状の柱穴と推定される落込みがあり、未調査地に存在の可能性が高い。

(5) 土坑 (9 図)

1号土坑(14図) C区の中央付近にあり、不整円形を呈し、最大径1.30m・深さ14cmの規模である。底面は丸味を帯び、中央に焼土が認められ、灰状に粒子化した炭化物で埋る。

2号土坑(14図) A区の中央付近にあり、不整卵形を呈し、長軸1.36m・対軸最大幅1.12m・深さ14cmの規模である。底面は鍋底状で、黒褐色砂質土が覆い、炭化物の混入は少ない。

3号土坑(14図) B区の中央付近にあり、丸味を帯びた隅丸長方形を呈し、長軸1.04m・対軸最大幅0.85m・深さ20cmの規模である。底面は鍋底状で、覆土は黒褐色砂質土であるが、下層には厚さ5cm程の灰状に粒子化した炭化物が認められる。底面に焼土の痕跡はない。炭化物層から完形の土器・古銭が出土している。

4号土坑(14図) E区の西に位置し、不整楕円形を呈し、長軸1.35m・対軸最大幅0.96m・深さ16cmの規模である。底面は平底で、覆土は黒褐色砂質土であるが、下層には厚さ1cm程の灰状に粒子化

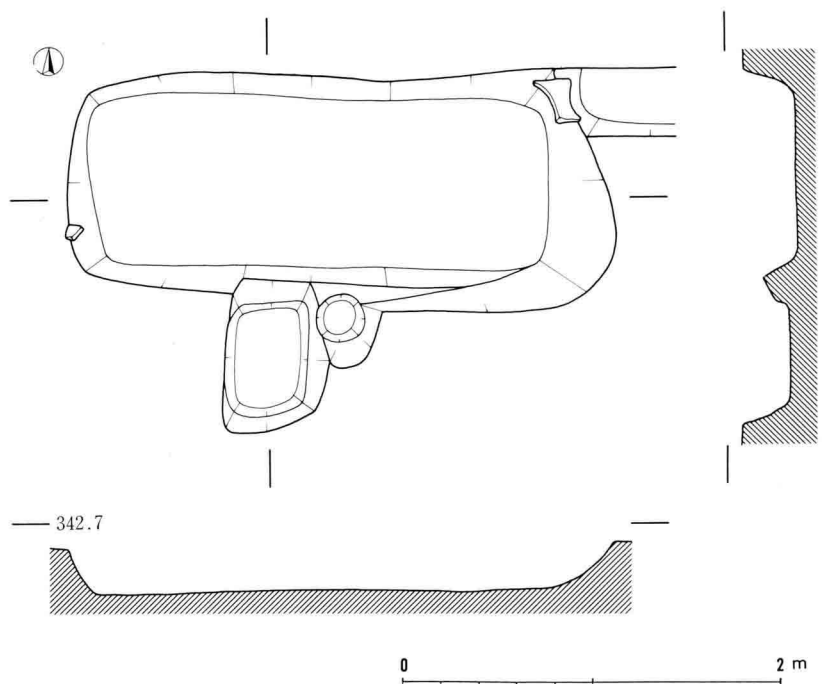


図13 1次面5号土坑実測図(1:40)

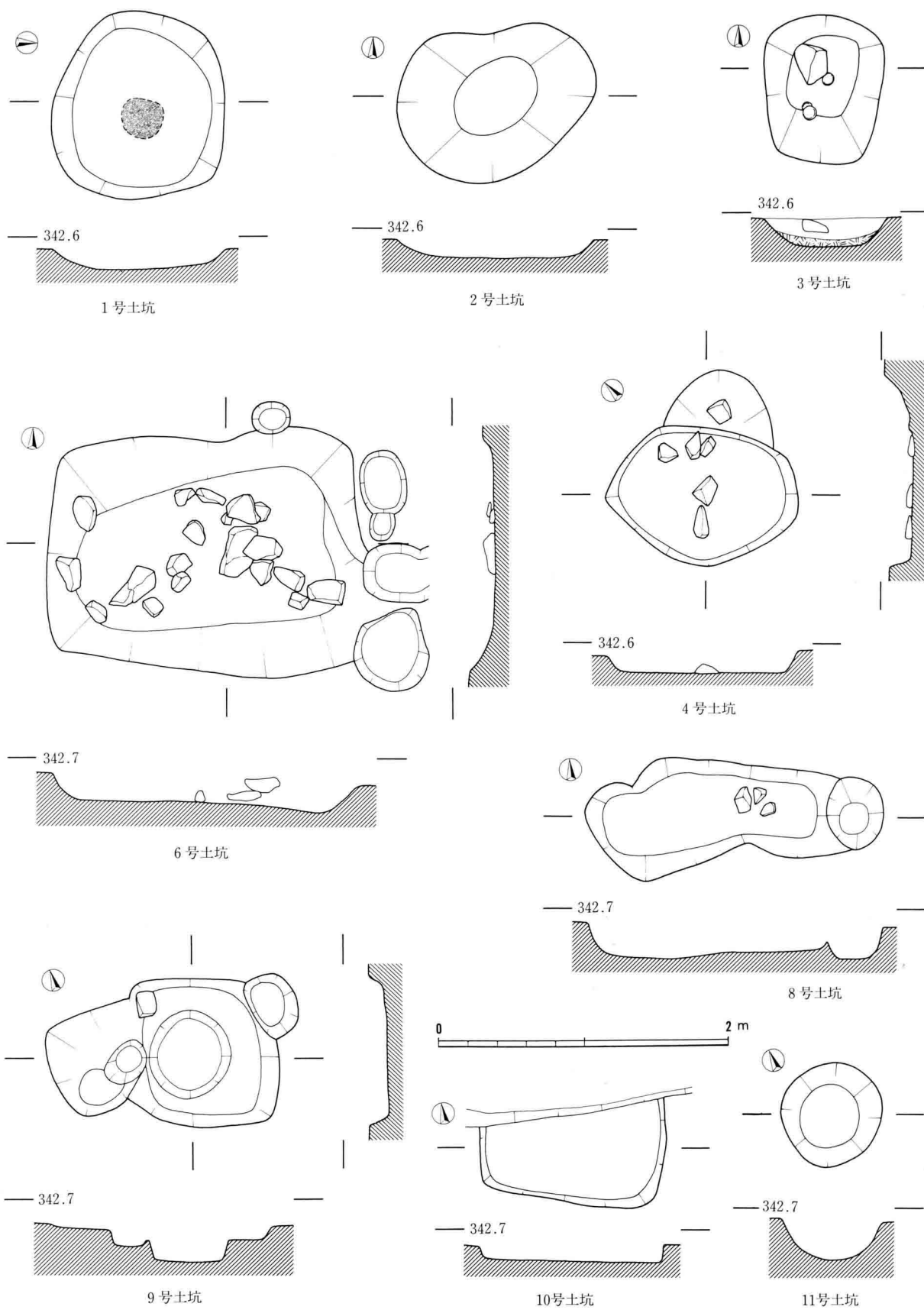


图14 1次面1号~4号·6号~11号土坑实测图(1:40)

した炭化物が認められる。底面に焼土の痕跡はなく、偏平角礫が散在する。

5号土坑(13図) F区の中央西に位置し、隅丸長方形を呈する。長軸の方向は東西にあり、2.89mを測り、短軸が1.17m・深さ26cmの規模である。底面は平坦で、覆土は黒褐色砂質土である。

6号土坑(14図) 1号溝跡の軸線上に位置する。形態は不整隅丸長方形を呈し、長軸の方向は東西を指す。長軸2.10m・短軸最大幅1.73m・深さ20~27cmの規模で、底面は平坦である。覆土は黒褐色砂質土であるが、下層には厚さ1cm程の灰状に粒子化した炭化物が認められる。底面に焼土の痕跡はないが、円礫・角礫が散在しており何らかの石組遺構の存在を思わせる。

8号土坑(14図) F区の中央東に位置し、不整楕円形を呈する溝状の遺構である。長軸の方向は東西にあり、東端で柱穴と重複する。柱穴を含む長軸は2.07mを測り、対軸の最大幅は0.85mで、深さが19~25cmの規模である。底面はやや丸味を帯び、覆土は黒褐色砂質土である。

9号土坑(14図) F区の東端に位置し、1号建物跡の柱穴を内包する。形態は不整方形を呈し、一辺が1m内外で、深さ15cmの規模である。底面は平底で、覆土は黒褐色砂質土である。

10号土坑(14図) G区の6号溝跡と重複するが前後関係は不明である。形態は隅丸長方形を呈するものと思われる。長軸の方向は東西にあり、1.30m・深さ13cmの規模である。底面は平坦で、覆土は黒褐色砂質土である。

11号土坑(14図) G区の柱穴列の南端にある。形態は円形を呈し、直径0.72m・深さ27cmの規模である。底面は丸底で、覆土は黒褐色砂質土である。



III-5 1次面1号土坑



III-6 1次面3号土坑



III-7 1次面4号(手前)・6号(奥)土坑



III-8 1次面6号土坑(東より)

3 2次面の遺構

(1) 遺構の分布 (15図)

1次面から約20cm、表土から70cm程下層の黄灰色粘質土層を遺構確認面とする。B区・C区北・E区西に土坑を伴う貼床状遺構、F区西側の一面に焼土等を突き固めた状態の遺構が確認され焼土貼床状遺構と称し、共に覆屋を想定する。前者を3号・4号建物跡、後者を5号建物跡とする。A区に柱穴群があり、中から1間×4間の

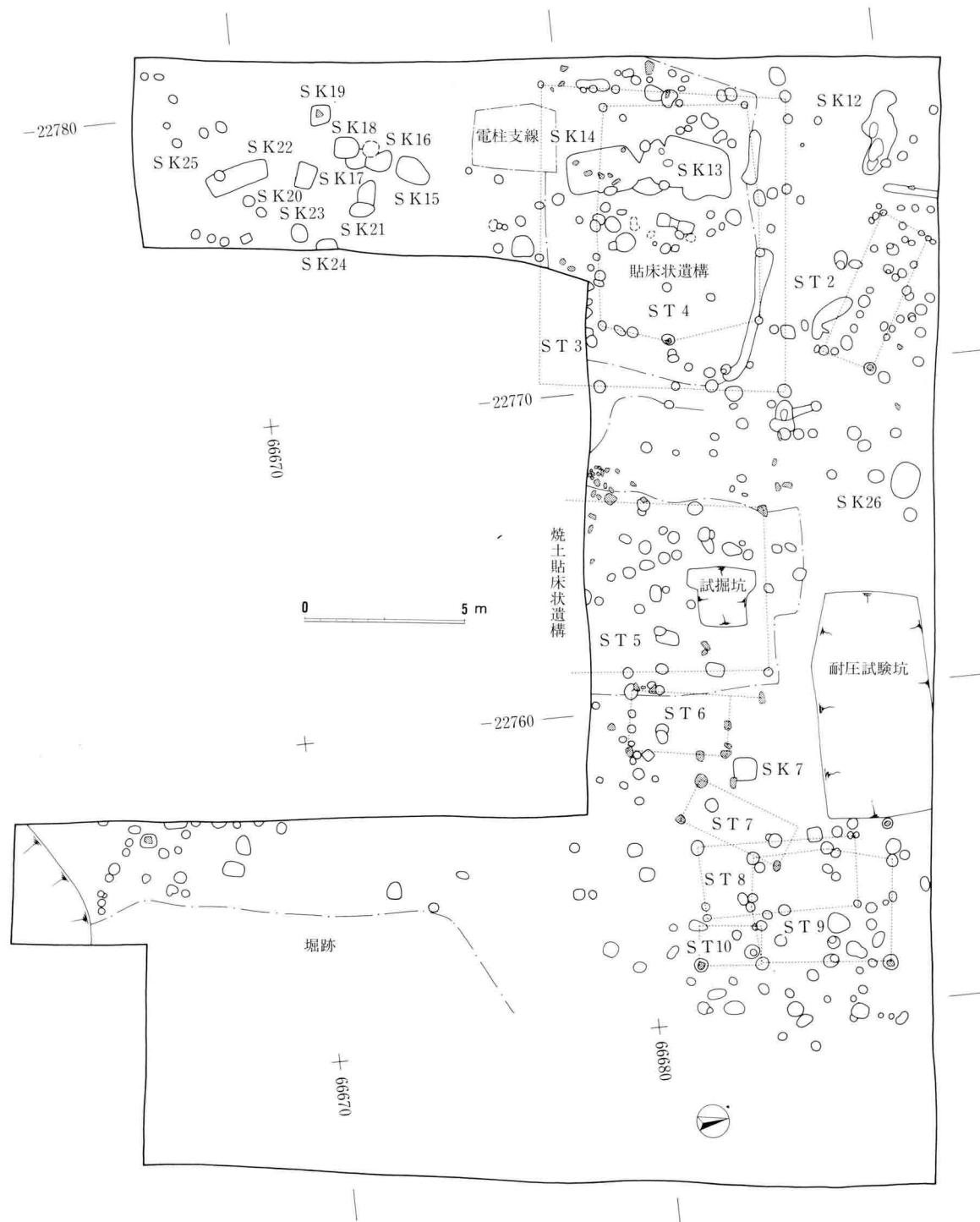


図15 2次面遺構分布図 (1:200、ST=建物跡・SK=土坑)

建物跡を抽出し、2号建物跡と呼ぶ。C区には浅い掘り込みで、焼土と炭化物を伴う土坑群が集中する。F区では焼土貼床状遺構の東に礎石建物跡（6号・7号）が予想され、更に東側に3棟の建物跡（8号～10号）を推定する。G区は柱穴群が南側に偏在するが建物跡としての柱穴列は認められない。調査地南端付近から南は旧川田村役場の建設時に攪乱を受けている。



III-9 2次面遺構（東より）



III-10 2次面遺構（西より）

(2) 貼床状遺構 (16図)

貼床は外部からの異質の土砂を持ち込んで形成されるのではなく、上部を覆う黒褐色土・焼土等を巻き込んで堅緻に造られており、黒味を帯びる。こうしたことから床面は突き固められたか踏み固められた状況を示しているが、平坦ではない。貼床状床面の範囲は北・南の限界線が東西方向にあるのに対し、東・西のそれは西方向に屈折し不整な長方形態を呈する。南北間6.7m・北限界線9.3m程の規模になる。床面の状況から複数の遺構から構成されるものではなく、同時期で同じ性格を有する一連の遺構で間違いないものと推定する。覆屋の建物跡を推定するに貼床部のほぼ全域を覆う3号建物跡とこれに内在する4号建物跡を抽出する。

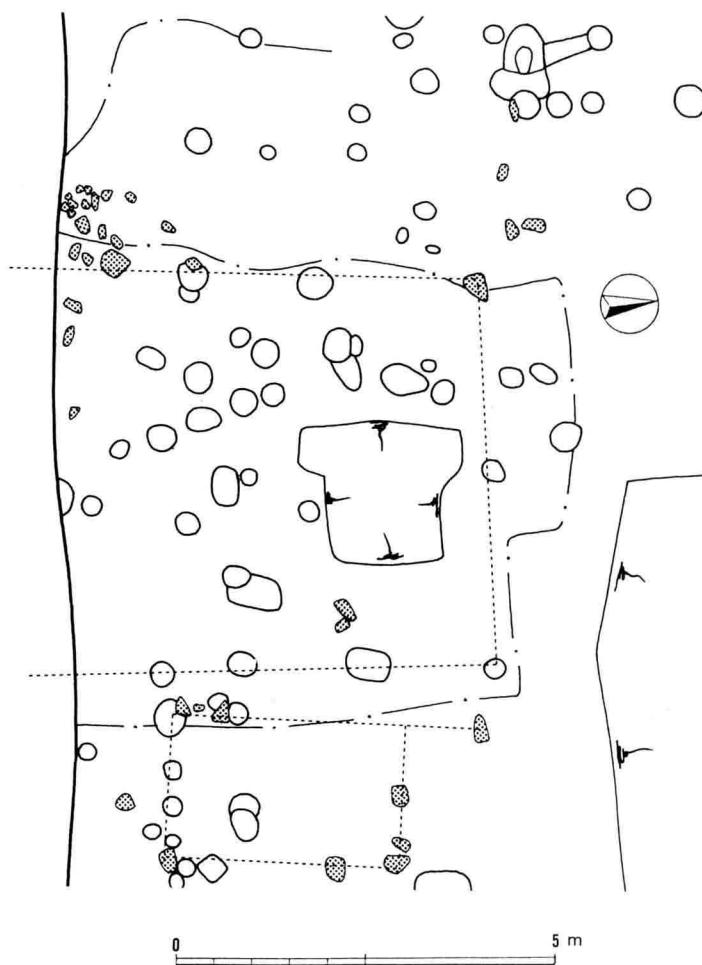


図16 2次面貼床状遺構 (1:100、一点鎖線内)

3号建物跡 (17図) 貼床状遺



III-11 2次面貼床状遺構、13号・14号土坑、柱穴群 (西より)

構を意識して4間×4間の小屋組を想定するが、南北方向の柱穴が不揃いで欠落しているものもあり、また東西柱穴列との柱間の規模にも相違がある。東西9.2m・南北7.6mの規模を推定する。西側の南北方向の柱間は1.7~1.9m測るのに対し、東西方向では1.9m~2.85mとばらつきがみられ、4号建物跡外縁の補助的な遺構の可能性が考えられる。

4号建物跡(17図) 貼床部の北側3分の2にかかる梁間3間×桁行4間の東西方向が長い柱穴列を抽出する。ただし、柱穴間が一定の数値にならず、北柱穴列中2間目の柱穴を欠くことが気掛かりである。東柱穴列は6.0mを測り、柱穴間は1.8m~2.0mである。北柱穴列は9.3mで、柱穴間は2.0m~3.0mである。西側に不整長方

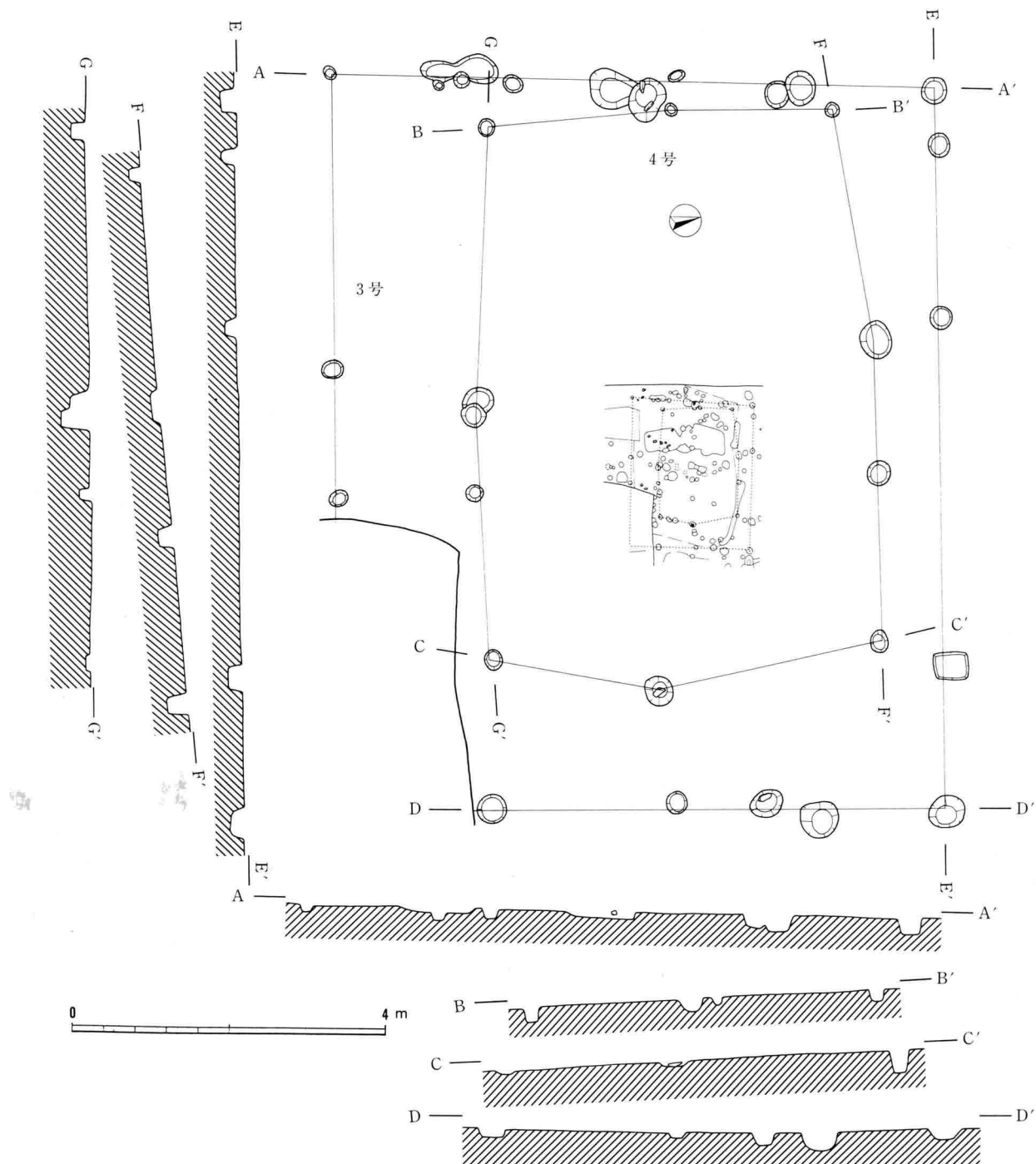


図17 2次面3号・4号建物跡実測図(1:80)

形を呈する2基の土坑（13号・14号）があり、これを中心として柱穴がとりまいてる点に注目すれば、間仕切のための柱穴群とも考えられる。

（3）焼土貼床状遺構（18図）

この遺構の特色は焼土粒を貼床に多量に包含して堅緻な床面を形成していることにある。焼土と黒色土の広がりはこの遺構を中心に東西両側に展開するが、堅緻な面にならない。焼土貼床状遺構と認定している部分は、何らかの意図のもとに多量の焼土を敷ならす等の整地後に突き固められたものか、または床面として踏み固められた結果として堅緻になったものと推定される。前者は柱穴の回りまで堅緻であること、後者は後述の建物跡付近内で貼床範囲がおさまっていることによる推定である。貼床は東西約6m、南北7+αmの規模になり、南北に長い長方形を呈するものと思われる。遺構上面の覆土は焼土・炭化物を多く含む黒褐色砂質土である。

5号建物跡（19図）貼床部のほぼ全域を覆うような2間×3間以上の規模のものと推定する。西側の柱穴列は貼床形態に対していくぶん西南に傾き、柱穴と礎石の組合わせである。確定している梁部は5.0mの規模で、柱間は2.5mである。桁行の全長は不明であるが柱間は2m前後と思われる。

（4）柱穴群・柱穴列・配石列

A区の柱穴群より1棟分の柱穴列（2号建物跡）、F区東端の柱穴群より3棟の建物跡（8号～10号）と焼土貼床状遺構の東に近接

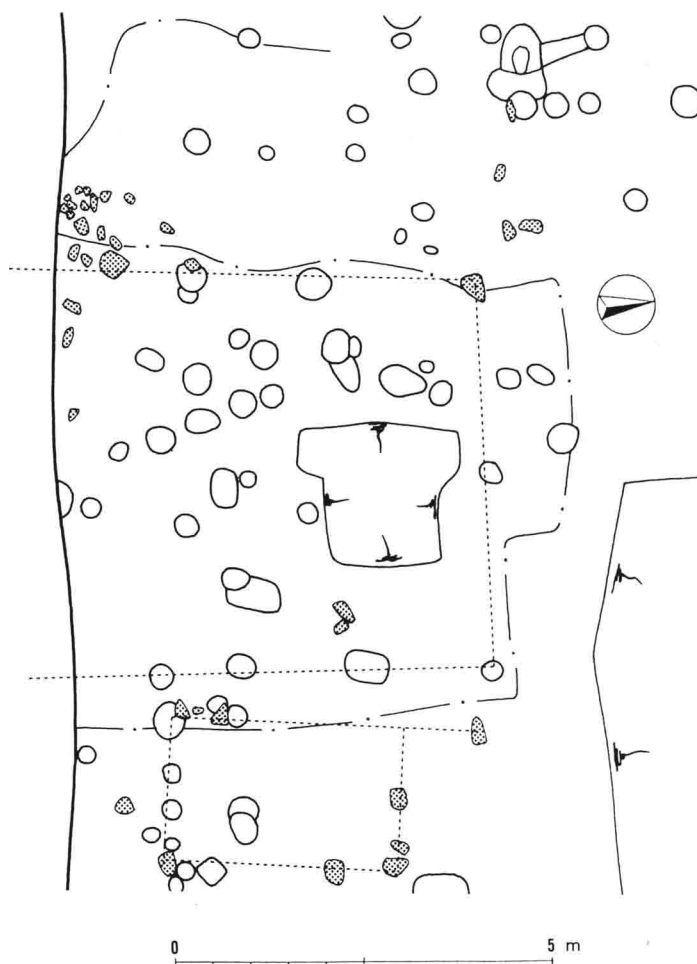
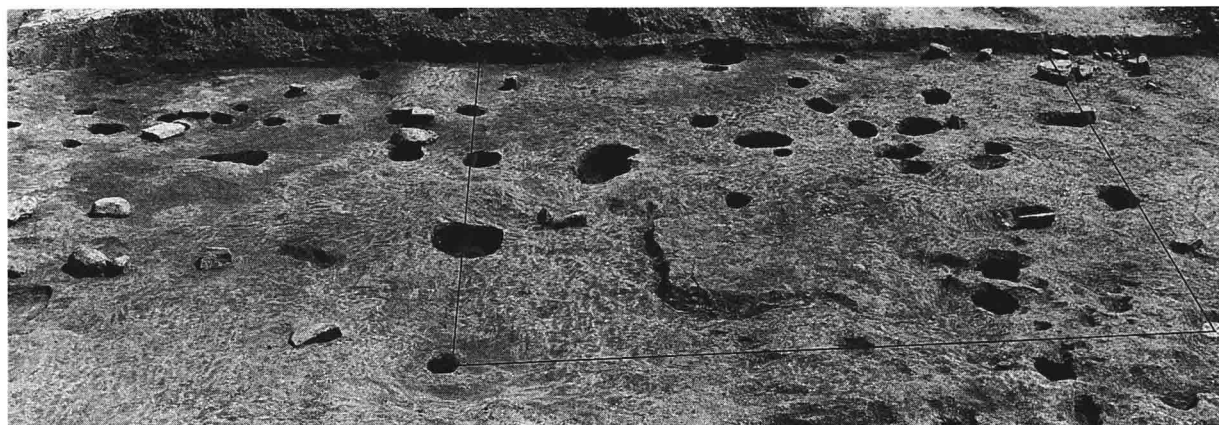


図18 2次面焼土貼床状遺構（1：100、一点鎖線内）



III-12 2次面貼床状遺構（北より）

して平石による礎石と推定される配石列（6号・7号）を抽出する。

2号建物跡（19図） 1間×3間と推定される細長い遺構である。長軸方向はN60°Wを指し、貼床状遺構とは斜めの関係にある。短軸1.8m・長軸4.6mの規模で、長軸の柱間は1.2m～1.6mを測る。長軸4間の可能性もあるが柱間が2mを超えてしまい無理であろう。用途としては納屋的なものが考えられる。

6号建物跡（20図） 焼土貼床状遺構の東に接し、礎石状配石を主体とする遺構で、5号建物跡の長軸方向よ

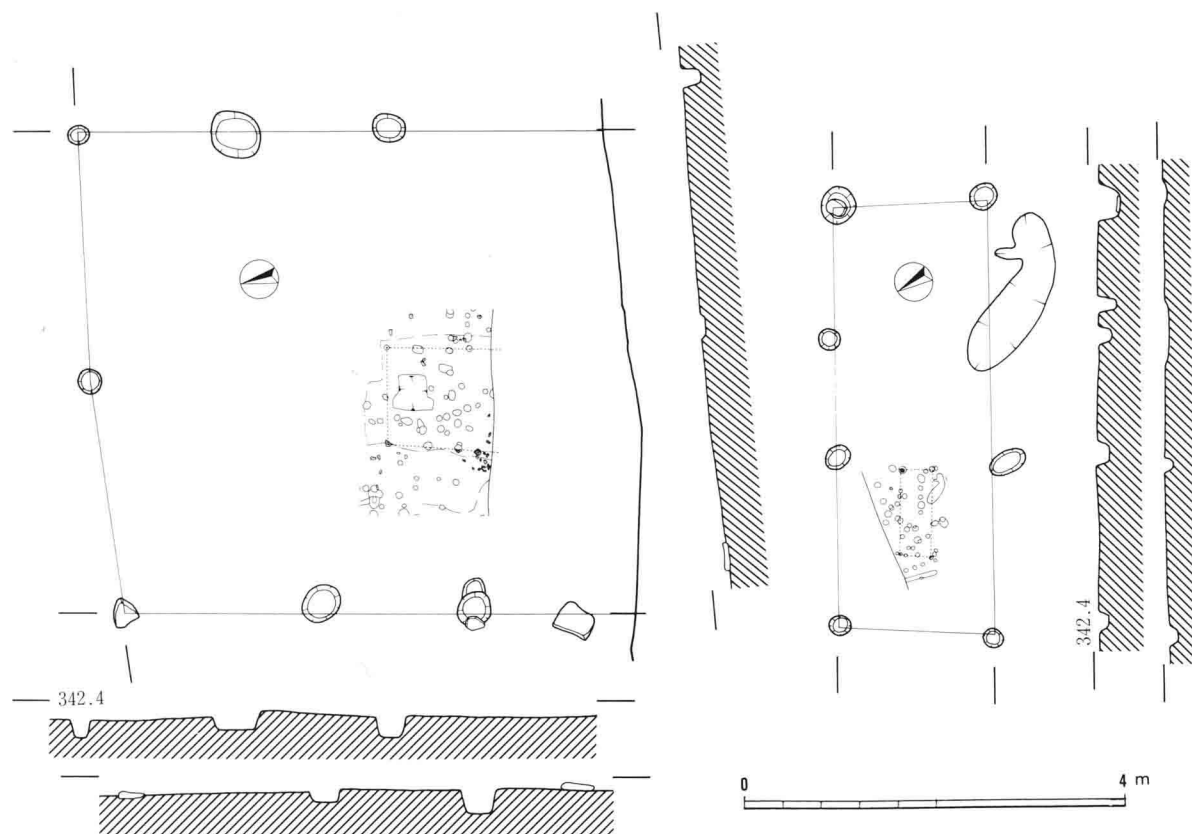


図19 2次面5号（左）・2号（右）建物跡実測図（1：80）



III-13 2次面A区柱穴群

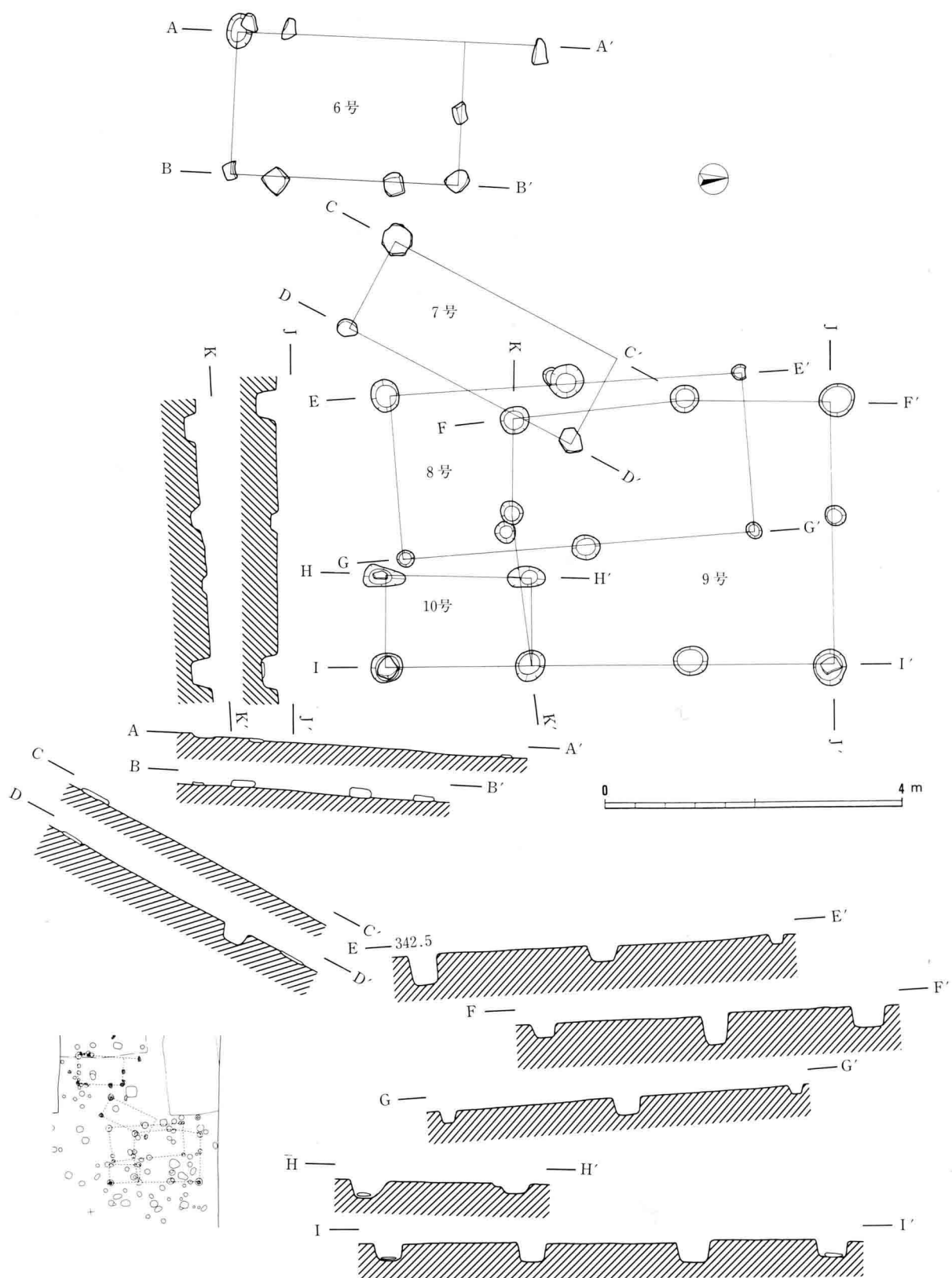


图20 2次面6号~10号建物跡実測図(1:80)

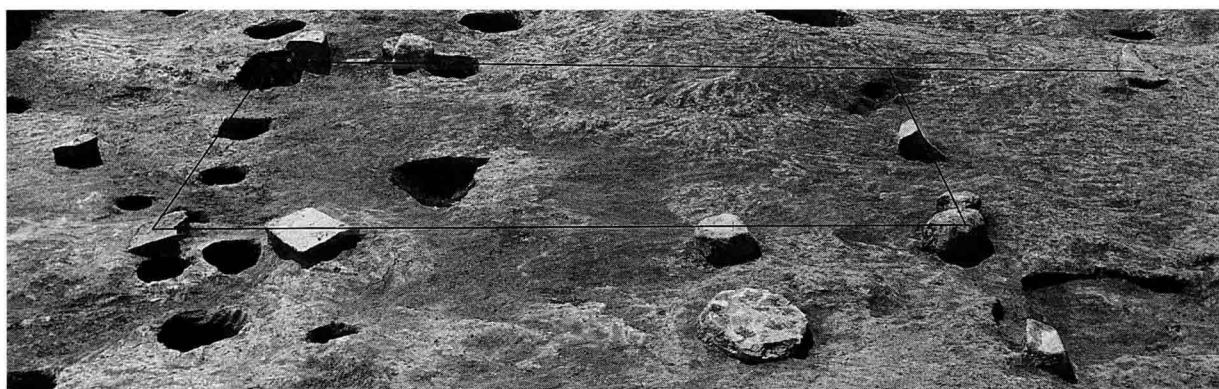
りも若干東に方向軸が振れる。長軸西側の隅石と連結する列石が欠落しているものと考え、東西2間×南北3間の規模を予想する。東西は1.95mの規模で、柱間が1m前後になる。南北は3.1mを測り、隅石と列石間0.7m～0.8m・列石間1.6m程になる。1間×1間の本体に南と北に付属施設のついた建物が考えられる。

7号建物跡(20図) 配石の位置関係からあえて建物跡として抽出した。検出した状況では南西の隅石を欠き、南北に長い1間×1間の長方形を呈する遺構であるが、長軸中間に配石されていた可能性もあり、そうであれば1間×2間の建物跡になる。長軸3.4m・短軸1.3mの規模で、長軸方向はN33°Eを指す。南西隅石は外縁を打ち落とし直径40cm程の円形を呈す。

8号建物跡(20図) 7号・9号建物跡と重複するが、前後関係は不明である。長軸が南北を指す1間×2間の小規模建物跡を推定する。規模は長軸4.7m・東西軸2.2mを測る。

9号建物跡(20図) F区東の柱穴群内から抽出した柱穴列で、7号・8号建物跡と重複関係にある。2間×2間の建物が想定され、東西4.1m・南北3.5m程の規模になる。南と西の軸線は直線にならず若干外にはみだし、柱間の距離も南北2.0～2.2m・東西1.5～2.0mと一定でない。北東隅柱穴に平石を埋め込んでいる。

10号建物跡(20図) 1間×1間の遺構で、9号建物跡と同様に柱穴内礎石に注目し、建物跡として抽出した。南北2.0m・東西1.2mの規模である。



III-14 2次面6号建物(東より)



III-15 2次面8号～10号建物跡(北より)

(5) 土坑 (15図)

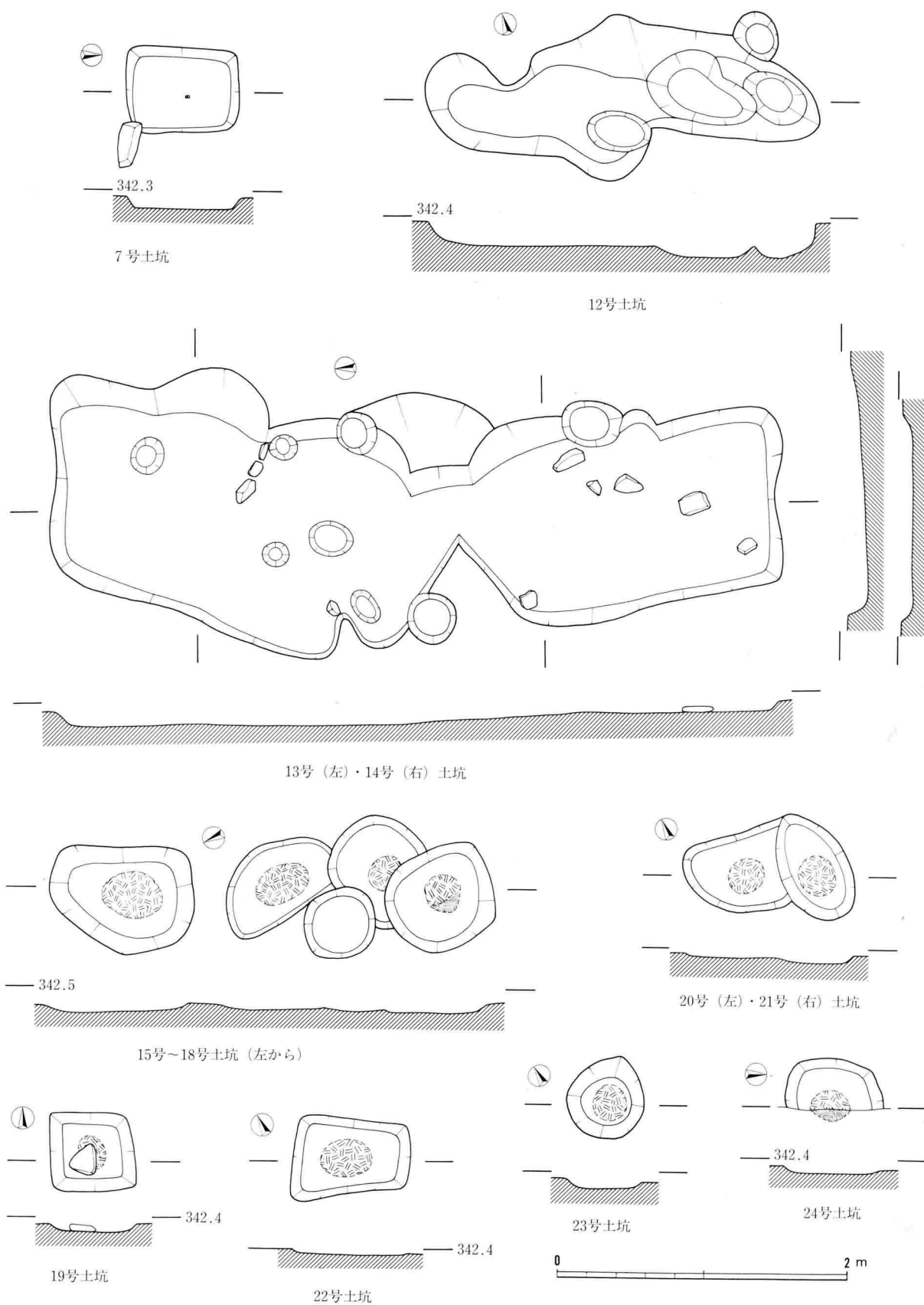


図21 2次面7号・12号~24号土坑実測図 (1:40)

7号土坑(21図) F区の6号建物跡北に隣接して単独検出遺構である。形態は長方形を呈し、長軸方向はほぼ南北である。長軸0.8m・短軸0.6m・深さ10cmの規模である。底面は平坦で軟弱である。遺構上層および周辺は15cm程の焼土・炭化物・灰の混合層があり、土坑内も同様な土質で埋っていた。土坑および上部で燃焼行為が行われていたことをしめしているものの、底面からは焼土の痕跡は認められない。またこの遺構の特色は土器皿の出土が多い点にもある。

12号土坑(21図) A区の西側に位置し、不整形で溝状を呈する。内部に柱穴様の小穴が3個あり、近隣の柱穴の在り方から本遺構に伴うものであろう。長軸の方向はN65°Wを指し、2.7mを測る。幅は一定でなく中央付近の最大値は1.15mで、溝状底面の深さは18cmである。

13号土坑(21図) 貼床状遺構内の西側に位置し、接続する14号土坑と共に推定建物跡の東西軸と直交する。形態は不整長方形を呈し、主軸方向は他の関係する遺構から南北とみてよいだろう。規模は長軸2.8mを最大値に、短軸1.3mが最小値になり、深さ13cmを測る。底面は若干の凹凸があるものの堅緻である。覆土は炭化物粒を多量に含む黒褐色砂質土である。

14号土坑(21図) 形態・主軸方向・底面・覆土の状況は13号土坑と同様である。規模は長軸2.2m・短軸1.25m・深さ8~10cmである。底面に焼土は残存しないが角礫が認められ、13号土坑と共に工作用施設と考えられる。

15号~24号土坑(21図) C区の中央付近に集中して確認されたもので、共に数cmから10cm内外の浅い掘り込みで、覆土には多量の炭化物粒を含み、底面に焼土を残す。形態は円形や不整楕円形のものが多く、19号・22号は方形を呈する。

25号土坑(22図) C区の南に位置する。形態は隅丸長方形で、長軸1.97m・短軸0.7m・深さ11cm程の規模になる。底面は平坦で軟弱で、覆土の炭化物の混入は多くない。

26号土坑(22図) D区の遺構で、楕円形を呈する。長軸1.1m・短軸0.8m・深さ11~14cmの規模になる。底面平坦かつ軟弱で、黒褐色砂質土が覆土である。

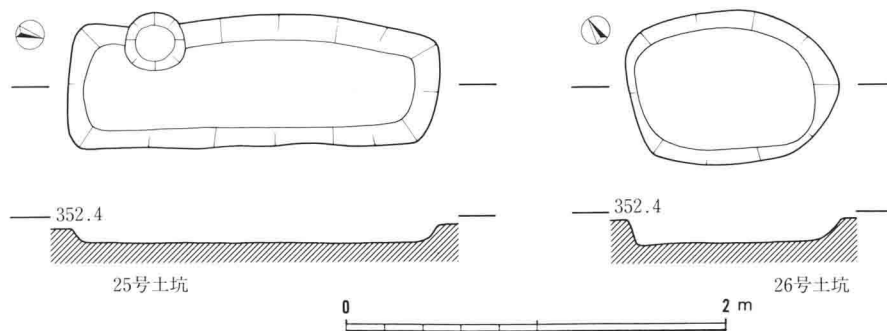


図22 2次面25号・26号土坑実測図(1:40)



III-16 2次面C区土坑群



III-17 2次面18号土坑

4 遺 物

出土遺物には、焼物・土製品・鉄製品・鹿角製品・石製品がある。

焼物には、土器皿、内耳鍋、瀬戸・美濃系陶器、貿易陶磁器等がある。その中で土器皿が最も多く、後で若干ふれることにするが、いずれもロクロ調整で糸切り痕を底部に残している。また、遺構からの土器皿が出土している場合もいくつかあるが、量的および器形の遺存度からみて、まとまって完形品が一括投棄された状態と考えられる7号土坑を除いて、意図的に埋納された可能性が少ないことを最初に断っておく。

(1) 土 器

3号土坑(23図1～6) 1次面の遺構で、出土遺物はいずれも土器皿である。4は口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として利用された可能性が高く、2には内面中央に油煙が付着する。1～3は薄手に仕上げられ、内面の見込み周囲にナデが強く入り、直線的に外反する形態が共通する。1・2の底部外面には糸切り痕の上に板状圧痕がみられる。

4号土坑(23図7) 1次面の遺構で、小型の土器皿が1個体出土している。

1次検出面(23図8～22) 土器皿(8～21)と内耳鍋(22)がある。21には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。内耳鍋は屈曲部に一条の強いヨコナデが入れられ、やや直立気味で、口縁が強く絞り込まれる。

6号溝跡(23図27)・堀跡(23～26) 共に1次面の遺構である。27の内耳鍋は二条の強いヨコナデが入れられ、口縁端部は緩やかに仕上げられ、やや外反気味である。24～26は内面見込み中央に強いナデが入れられているためややくぼみ、そのまま弧を描くように内湾しながら立ち上がる形態が共通する。なお、25は灰褐色を呈しており、須恵質の焼成である。

貼床状遺構(23図28～36) 2次面の遺構で、3号・4号建物跡を想定する。出土土器はいずれも土器皿であるが、形態に共通性は無い。

7号土坑(23図37～52) 覆土および周辺に焼土・炭化物・灰が多量に確認された長方形を呈する遺構である。出土遺物はいずれも土器皿である。完形品(37～40・42・44・46・47・52)が多く、使用後一括して意図的に埋められた可能性が高い。これらのうち小型品は口径の割に底径が大きいため、短く直線的に立ち上がる。色調は白褐色を呈し、焼成が軟質である点が共通する。

焼土貼床状遺構(24図53～65) 2次面の遺構で5号建物址を内包する。53～65は土器皿であるがいずれも破片で、形態に共通性は認められない。62は瓦質火鉢で、上部は窓になり、外面全体にスタンプ状の装飾が施される。65の内耳鍋は屈曲部に強いナデが一条入れられ、口縁は内湾気味に外反する。

[まとめ]

土器皿は比較的まとまった量が出土していると共に、3号土坑と7号土坑から出土した一括資料から若干の考察をしてみたい。

在地産の土器の流れをみると、平安時代に古代の系譜を引くロクロ調整の土師器坏(皿)が消滅する。それと入れ替わるように12世紀末までには東日本一帯に非ロクロ調整の京都系土器皿が登場するが長野県内でも例外ではない。14世紀代には非ロクロ調整が姿を消し、ロクロ調整の土器皿が再び作られるようになり、その後ほぼそれ一色になる。11世紀以降、法量は一貫して大小2法量になる特徴がある。12世紀のロクロから非ロクロ、13世紀から14世紀代の非ロクロからロクロへの転換状況ははっきりしない。

14世紀以降の善光寺平におけるロクロ調整の土器皿（かわらけ）は、高梨城跡出土品をもとに中島庄一氏が、また高速道路関連出土品をもとに市川隆之氏が研究を行っている。まず、本遺跡の大小2法量ある土器皿の形態は、完形品が少なくすべての出土品を対象として分類することは難しいが、いくつかの特徴的な形態を抽出することができる。

まず大法量についてみてみたい。

1・3・14・60は比較的薄く仕上げられ、内面見込み周囲にナデを強く入れ、直線的に外反する。外面からみると内側に反るように口縁に延びるため、底部と体部の境が明瞭である。大きさは口径9 cm後半から10 cm前半、器高2 cm前後、底径6 cm後半である（A類）。

11・24～26はやや厚手で、内面見込み中央が強くナデが入れられるためややくぼみ、そのまま弧を描くように内湾しながら立ち上がる。外面からみると底部と体部は極端に表現すれば弧を描くように連続している。大きさは口径9 cm後半から10 cm前半、器高2.5 cm前後、底径6 cm前後である（B類）。

36・52・63は口径の割に底径が小さく、45度程度の角度で弱く湾曲しながら直線的に外反する。比較的厚手に仕上げられる。大きさは口径10 cm以上、器高3～4 cm前後、底径6 cm前後である（C類）。法量の大きい順に並べるとC→B→Aになる。

次に小法量である。

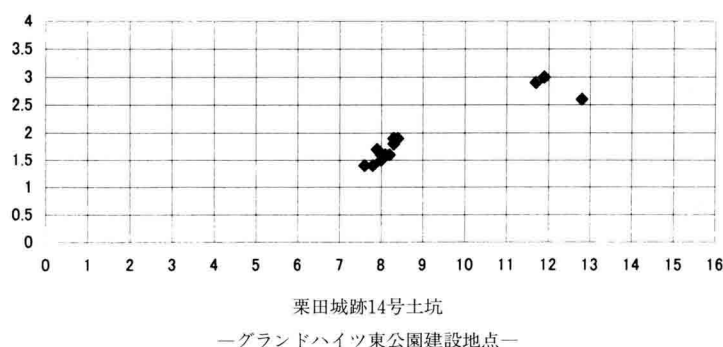
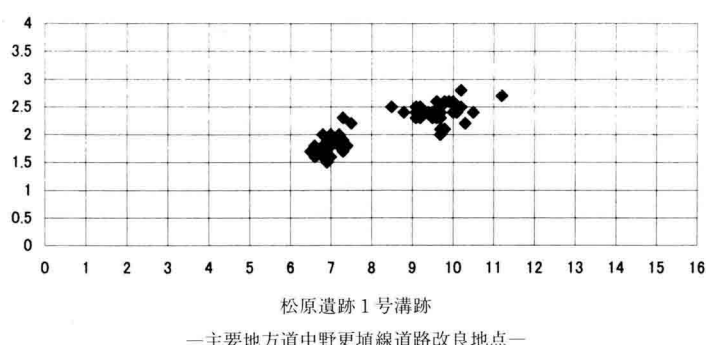
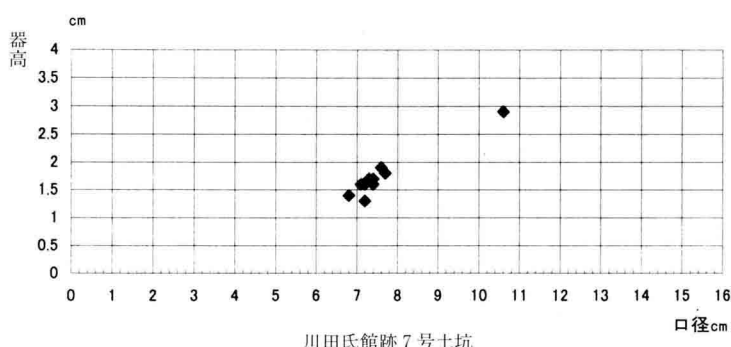
4・5・33・44は内湾気味に立ち上がる。外面には二段のヨコナデが顕著に施される。口径7 cm後半、器高2 cm前後、底径5 cm前後に集中する（a類）。

7・18は口径の割に底径が大きい。厚手で、体部が大きく弧を描いて立ち上がる形態である。口径6 cm代、器高1 cm代後半、底径4 cm代後半に集中する（b類）。

37～42、45～47は比較的底径が大きく、口径・器高数値が小さいため急角度で立ち上がる。内面は見込み周囲に強いナデを入れる形態（37）と見込み中央から緩やかに口縁へ弧を描いて立ち上がる形態（45）の二種に分けられる可能性がある。

口径7 cm前半、器高1 cm後半、底径4 cm後半～5 cm前半に集中する（c類）。法量の大きい順に並べるとa→c→bになる。

次に大小形態の組み合わせであるが、3号土坑はA+a、7号土坑はC+cとなる可能性が高い。法量をみるとA+aの3号土坑は小法量が7 cm後半～8 cmに



集中するのに対し、C + c の 7 号土坑は 7 cm 前半に集中する。大法量については資料が少ないため比較しないが、小法量をみる限り明らかに異なる。これらの土器皿の年代は 3 号・7 号土坑とも年代を推定する資料は無いが、出土した古瀬戸の年代をみる限り 15 世紀中頃から後半と考えられる。ここまで形態と法量に絞って分類してきたが、胎土や焼成からの分類はできなかった。c 類に白っぽい製品が多いのが気にかかる。

以上の状況を市川隆之氏の研究と比較してみることにしたい。形態について市川氏は何回か分類を試みているが、はっきりした分類はいまだできあがっていない。ただ、東日本で一般的とされる内湾形態から外反形態への変化は長野県でも十分想定できるとしているが、それが一律ではないと指摘している。本遺跡でも二つの形態が認められるが、それを時間的な差だとすぐに結び付けることはできない。また、法量について市川氏は大きくは縮小傾向にあるとしている。市川氏が標準に近い資料として取り上げている 14 世紀後半から 15 世紀前半の遺物が出土した長野市栗田城跡 14 号土坑、16 世紀前半の遺物が出土した松原遺跡 1 号溝跡と比較してみる。本遺跡 7 号土坑出土の小型品の法量はその中間に位置しており、流れからすると 15 世紀後半になり、遺跡から出土している古瀬戸の年代と矛盾していない。

以上、土器皿について簡単な分類および若干の考察を行ってきた。善光寺平の中世土器皿の出土量も増加しており、その全容が明らかになるのも間近であろう。(原)

[参考文献]

市川隆之 1997 「中世の遺構・遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15 石川条里遺跡第 1 分冊』(財)長野県埋蔵文化財センター

中島庄一 1993 「出土遺物について」『高梨氏館跡』中野市教育委員会

長野市教育委員会 1991 『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
1993 『松原遺跡Ⅲ』

(2) 陶器・磁器(24図66～76)

66～74は瀬戸・美濃系陶器である。66・67は折縁皿で灰釉が施される。68は灰釉が施された縁釉小皿で、糸切り痕を残す。69は灰釉が、70は鉄釉が施された腰折皿で、体部下半をヘラケズリで仕上げている。73は天目茶碗の口縁部である。72は袴腰形香炉で、鉄釉が上半部に施される。これらはいずれも藤沢良祐氏の研究に従えば古瀬戸後期様式で、腰折皿の存在・縁釉小皿が偏平である点などから新しい段階の可能性が高い。年代的には 15 世紀中頃から後半の可能性が強い。74は底部裏面をのぞき鉄釉が施された碗で、近世と思われる。75・76は龍泉窯系青磁蓮弁文碗である。(原)

[参考文献]

藤沢良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 X』

(3) 土製品(24図77～82)

土製品には羽口(77・78)・埴塙(79・80)・土錘(81)・円板状土製品がある。77は断面形態が台形状を呈し、先端は火熱をうけ溶解している。全長 10.3cm、先端部外径 4.5cm・孔径 2.1cm、基部外径 8.8cm・孔径 6.2cm を測る。2 号溝跡から出土し、完形である。78は欠損品ではあるが、円筒形を呈し、外径 4.6cm・孔径 6.2cm を測る。埴塙は丸底の偏平皿形を呈する。内面体部は全面溶解し、口縁部も溶鉄の流し込みにより一部溶解する。79は 3 号溝跡から出土し、口径 10.7cm・器高 3.8cm で完形である。80は 1 号溝跡から出土したが 1/4 程の遺存である。口径 9.0cm・器高 2.6cm の大きさを推測する。土錘は 2 次検出面からの出土で、全長 3.6cm・最大径 1.2cm

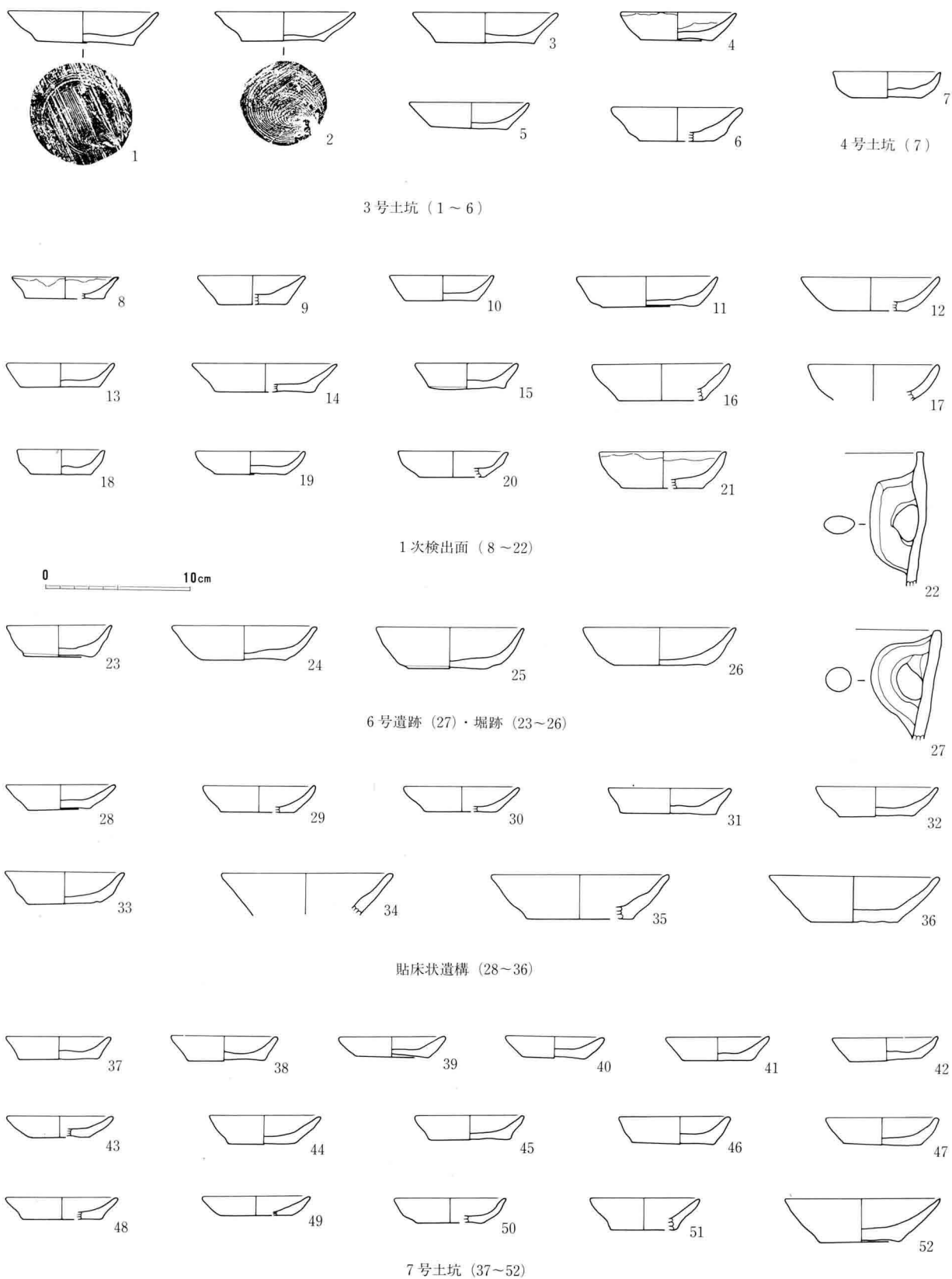


図23 遺構・検出面出土土器実測図 (1:4)

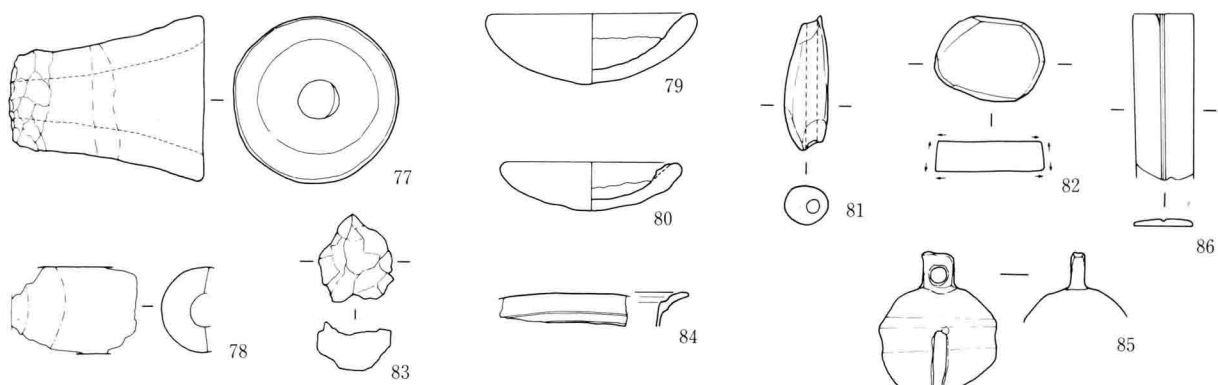
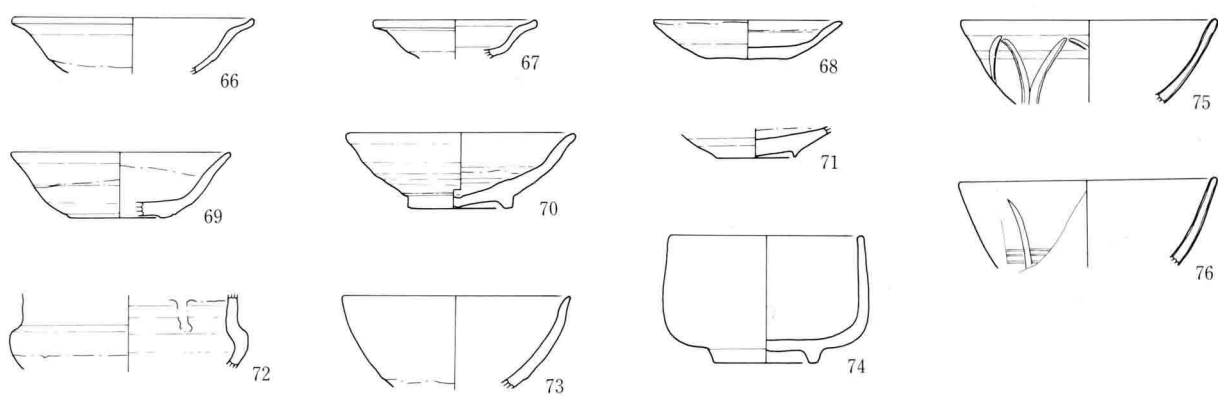
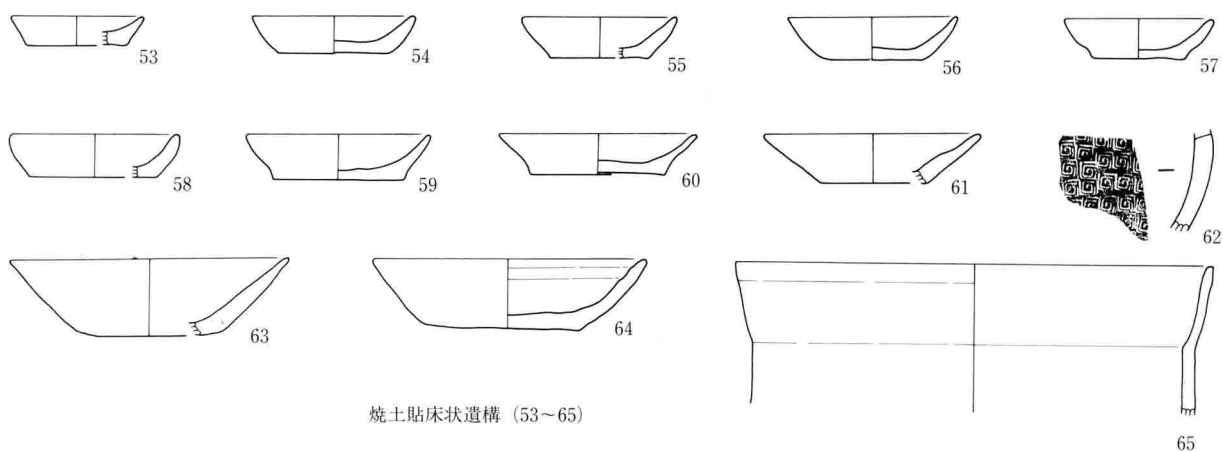


図24 遺構・検出面出土遺物実測図 (1:4、81~86は1:2)

の小型なものである。円板状土製品は土器片を利用したもので全面に研磨がみられる。

(4) 金属製品 (24図83~85、25図1~16)

鉄製品には釘・鍋 (84)・鈴 (85) がある。10棟の建物跡を推定したところであるが、釘等の建築用製品があまりにも少ない点が気になる。鍋はA区検出面から図示した部分のみの出土である。頸部内面は直角に折れ、小さく直立したあと口縁部が平坦近くに外開する。鈴は焼土貼床状遺構を追及中に出土したもので、中に小角礫が入っている。高さ 3.9cm・最大径 3.1cmを測る。83は亀の子形をした鉄滓で、6号溝跡からの出土である。他に青銅滓とみられる溶滓が出土している。

古銭 1 開元通寶 (貼床状遺構)、2 祥符元寶 (焼土貼床状遺構)、3 祥符元寶 (貼床状遺構)、4 祥符元寶 (焼土貼床状遺構)、5 熙寧元寶 (貼床状遺構)、6 皇宗通寶 (3号土坑)、7 皇宗通寶 (焼土貼床状遺構)、8 皇宗通寶 (焼土貼床状遺構)、9 皇宗通寶 (3号土坑)、10 元豐通寶 (貼床状遺構)、11 元豐通寶 (1次検出面)、12 元豐通寶 (焼土貼床状遺構)、13 紹聖元寶 (3号土坑)、14 洪武通寶 (3号土坑)、15 洪武通寶 (1次検出面)、16 不明 (焼土貼床状遺構)、この他焼土貼床状遺構から皇宗通寶、1次検出面から永樂通寶、3号土坑から銭種不明銭が各1枚出土している。

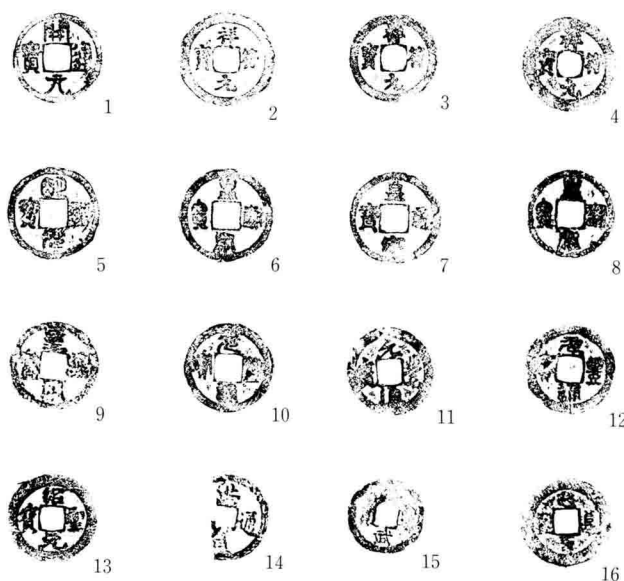


図25 古銭拓影 (1:2)

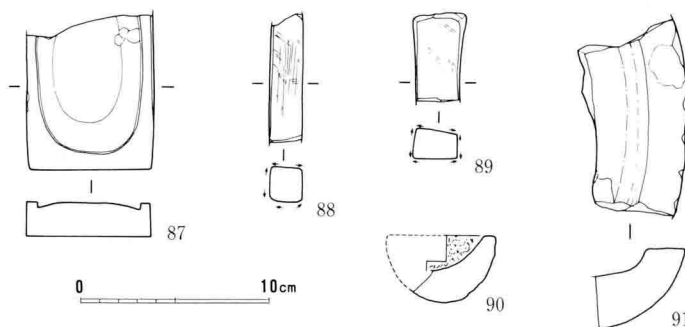


図26 石製品実測図 (1:4)

(5) 鹿角製品 (24図86)

筥状製品の欠損品が3号土坑から1点出土している。断面は凸レンズ状を呈し、凸面の中央部を縦に金属器によりV字形に線刻される。両面は丁寧な研磨で仕上げており装飾品と考えられる。幅 1.6cm・厚 0.4cmである。

(6) 石製品 (26図87~91)

石製品には硯 (87)・砥石 (88・89)・凹石 (90)・茶臼 (91) がある。硯は6号溝跡からの出土で、長方形を呈する定型のものであるが海部を欠く。擦面は外縁にそって長楕円形に削り窪めることにより作り出す。粘板岩製で、幅 6.6cm・高さ 1.8cmの規模である。砥石は共に流紋岩製の手持ち仕上砥石で、縦方向四面共に使用される。88は貼床状遺構、89は焼土貼床状遺構からの出土である。凹石は6号溝跡からの出土で、1/8程の遺存である。半球形を呈し、最大径 5.5cm、高さ 3.5cmを測る。安山岩 (火山弾) 製である。茶臼は焼土貼床状遺構から出土した。安山岩製である。

遺物観察表

図 番 号	番 号	種 別	器 種	法量 (cm)			遺 存	備 考	図 番 号	番 号	種 別	器 種	法量 (cm)			遺 存	備 考
				口径	底径	器高							口径	底径	器高		
23	1	土器	皿	10.4	6.9	2.2	完	3号土坑		40	土器	皿	6.7	4.3	1.5	完	7号土坑
	2	"	"	9.6	5.6	3.0	"	"・灯明皿		41	"	"	7.0	4.7	1.6	1/6	"
	3	"	"	9.7	6.7	1.6	1/3	"		42	"	"	7.0	4.7	1.6	完	"
	4	"	"	7.8	4.7	2.9	完	"・灯明皿	23	43	"	"	7.3	4.0	1.4	1/3	"
	5	"	"	8.1	5.6	1.9	"	"		44	"	"	7.6	4.7	3.0	完	"
	6	"	"	8.8	5.0	2.4	1/3	"		45	"	"	7.4	5.4	1.7	1/4	"
	7	"	"	7.3	4.8	1.8	1/2	4号土坑		46	"	"	7.4	5.5	2.0	完	"
	8	"	"	7.3	5.4	1.5	1/4	1次面・灯明皿		47	"	"	7.6	5.3	2.0	"	"
	9	"	"	7.3	4.6	2.0	1/3	"		48	"	"	7.8	5.5	1.5	1/4	"
	10	"	"	7.0	4.9	1.8	"	"		49	"	"	7.3	4.8	1.3	1/4	"
	11	"	"	9.5	6.3	2.1	完	"		50	"	"	7.5	4.5	1.7	1/6	"
	12	"	"	9.4	5.0	2.3	1/6	"		51	"	"	7.4	4.5	2.2	1/3	"
	13	"	"	7.5	5.4	1.7	1/4	"		52	"	"	10.6	5.5	2.9	完	
	14	"	"	9.9	6.6	2.0	1/3	"	24	53	"	"	6.9	5.1	1.6	1/8	焼土貼床状遺構
	15	"	"	6.8	5.2	1.8	2/3	"		54	"	"	8.5	5.8	2.0	1/3	"
	16	"	"	9.3	5.9	2.5	1/4	"		55	"	"	8.0	5.1	2.2	1/6	"
	17	"	"	9.0			"	"		56	"	"	8.9	5.1	2.3	2/3	"
	18	"	"	6.0	4.2	1.7	完	"		57	"	"	7.9	4.7	2.2	1/2	"
	19	"	"	7.5	4.9	1.6	"	"		58	"	"	8.8	6.7	2.3	1/6	"
	20	"	"	7.4	4.3	1.8	1/6	"		59	"	"	9.6	6.8	2.5	1/4	"
	21	"	"	8.5	5.5	2.5	1/4	"・灯明皿		60	"	"	10.3	7.0	2.2	1/3	"
	22	"	鍋				ママ	"・内耳		61	"	"	11.3	5.6	2.7	1/6	"
	23	"	皿	7.3	4.7	2.2	2/3	堀跡		62	"	火鉢				ママ	"・瓦質
	24	"	"	9.9	5.8	2.3	"	"		63	"	皿	14.7	7.6	4.1	1/4	"
	25	"	"	9.9	5.9	2.9	1/2	"・須恵質		64	"	"	14.4	8.1	3.8	1/2	"
	26	"	"	10.4	6.3	2.6	1/4	"		65	"	鍋	25.4			ママ	"・内耳
	27	"	鍋				ママ	6号溝跡・内耳		66	陶器	皿	11.6	5.3	3.5	1/8	貼床状遺構・折縁
	28	"	皿	7.4	4.1	1.7	完	貼床状遺構		67	"	"	8.5			1/6	"・"
	29	"	"	7.5	5.0	1.8	1/6	"		68	"	"	10.0	5.2	2.0	2/3	2次面・縁釉
	30	"	"	7.9	4.8	1.8	1/3	"		69	"	"	11.6	5.3	3.5	1/3	貼床状遺構・腰折
	31	"	"	8.3	6.5	1.8	2/3	"		70	"	"	12.0	5.5	4.0	1/4	1号溝跡・"
	32	"	"	8.3	5.0	2.1	完	"		71	"	"		4.2		ママ	2次面
	33	"	"	8.1	5.0	2.3	"	"		72	"	香炉				1/3	焼土貼床状遺構・袴腰形
	34	"	"	11.6			1/6	"		73	"	茶碗	12.0			1/4	貼床状遺構・天目
	35	"	"	12.0	7.1	3.1	1/4	"		74	"	"	10.3	5.5	6.8	1/2	1次面・近世?
	36	"	"	11.5	5.9	3.2	2/3	"		75	青磁	碗	13.5			1/6	"・龍泉窯系・蓮弁文
	37	"	"	7.3	5.5	1.6	完	7号土坑		76	"	"	13.6			1/8	"・"・"
	38	"	"	7.2	5.2	2.7	"	"									
	39	"	"	7.0	5.0	1.4	"	"									



1



2



3



4



6

SK 3 (1 ~ 4 · 6)



37



38



39



40



42



43



45



46



47



52

SK 7 (37 ~ 40 · 42 · 43 · 45 · 46 · 47 · 52)



69

貼床状遺構



70

SD 1



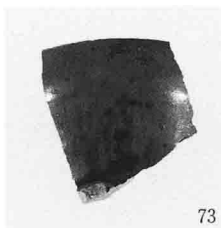
72

焼土貼床状遺構



62

焼土貼床状遺構



73

貼床状遺構



75

検出面



77

SD 2



80

SD 1



85

焼土貼床状遺構



86

SK 3



87

SD 6

IV 結 語

調査地は旧川田村役場の跡地であり、川田保育園に引き継がれている。西隣りには川田小学校や領家皇太神社が建立されている。これらの周囲はすべて圃場整備により水田化している。これらの建物は重要な施設であり、圃場整備前の地形は恐らく地理的環境で考察したとおり微高地であった可能性が高い。千曲川の後背湿地に圍繞され、さらに今回の発掘調査で東側の一部ではあるが堀の痕跡が確認されたことは防禦的にも中世館の存在を優位にしている。しかし、井上氏館跡と断定するに十分な根拠を得たわけではなく、川田小学校建設に際し中世遺物出土の伝聞が無いことから館跡の範囲確定に躊躇を覚える。館跡や規模確定には今後の調査に期待するところであるが、一応前記した建物・敷地に主力の施設があった可能性が高いことを指摘しておく。東限は今回の調査地であることは間違いない。

遺物から館跡の存続は比較的短く15世紀後半に位置づくものと考えられる。この時期の歴史的事象からみると寛正7年(1466)の『諏訪御符札之古書』では宮頭川田がみえ、文明19年(1487)には郷名のみ記載される所となり、中世的小国人武士団の衰退を意味するものとの考察をした。今回の調査結果からはこれに基づく所見が得られたものと考えられる。明応・永正年間(1491~1504)村上氏の支配時代には調査地周辺は主要地から離れ、川田対馬守(天文22年(1553)越後へ敗走)が館をこの地に築いたとすれば、調査地は館の主要地から完全に外れていることになる。ともあれ15世紀後半の調査地は、溝により規制された区画が存在した可能性があり、10棟の建物跡を抽出したごとく多数の柱穴が存在し、焼土を伴う土坑があり、工作跡を想定させる貼床状遺構や焼土貼床状遺構、遺物では輸入・移入陶磁器が認められ、羽口・埴塼等が出土しており活発な生産活動の跡を残している。

岩 崎 遺 跡

－綿内小学校プール・体育館改築地点－

目 次

I	調査の経過	1
1	調査の事務経過	1
2	調査日誌	1
3	調査の体制	3
II	調査地周辺の環境	5
1	地理的環境	5
2	考古学的環境	7
III	プール地点の調査	12
1	試掘調査	12
2	遺構の分布	12
3	遺構と遺物	12
	(1) 掘立柱建物址	12
	(2) 土坑	14
	(3) 溝址	14
IV	体育館地点の調査	18
1	遺構の分布	18
2	遺構と遺物	21
	(1) 住居址	21
	(2) 柱穴群	38
	(3) 井戸址	39
	(4) 土坑	41
	(5) 溝址	50
V	結語	67

挿 図 目 次

図 1	調査地周辺の地形図	5	図 3 6	13号住居址、63号・64号土坑実測図 ..	32
図 2	長野市防災基本図地形分類図	6	図 3 7	13号上(1~11)・下(9~18)住居址 出土土器実測図	33
図 3	綿内地域調査遺跡位置図	7	図 3 8	14号(上)・22号(下)、 住居址 59号土坑実測図	33
図 4	調査地周辺の航空写真	8	図 3 9	14号住居址出土土器実測図	34
図 5	岩崎遺跡保育園地点遺構分布図	9	図 4 0	15号住居址実測図	35
図 6	古町遺跡流入塚下部集石実測図	9	図 4 1	16号住居址実測図	35
図 7	高野遺跡遺構分布図	10	図 4 2	19号住居址出土土器実測図	36
図 8	プール地点遺構分布図	13	図 4 3	18号(右)・19号(左)住居址、 61号・63号・64号土坑実測図	36
図 9	建物址土坑実測図	15	図 4 4	18号住居址実測図	37
図 1 0	1号(左)・3号(右)・4号(右)溝址実測図	16	図 5 0	21号住居址実測図	38
図 1 1	プール地点出土土器実測図	16	図 5 1	20号(1 2)・21号(3)住居址 出土土器実測図	38
図 1 2	1次面遺構分布図	18	図 5 2	20号住居址、17号溝址実測図	38
図 1 3	2次面遺構分布図	20	図 5 3	掘立柱建物址実測図	39
図 1 4	1号住居址実測図	21	図 5 4	井戸址(1号~5号)、 土坑(33号・32号・39号)実測図	40
図 1 5	1号住居址出土土器実測図	22	図 5 5	土坑、検出面出土中世土器・磁器実測図	44
図 1 6	2号住居址、1号・7号・11号土坑実測図	22	図 5 6	2号~10号・13号~19号土坑、 4号溝址実測図	45
図 1 7	3号住居址、3号土坑実測図	22	図 5 7	20号~22号・24号~26号・28号~31号 土坑実測図	46
図 1 8	2号住居址出土土器実測図	23	図 5 8	34号~37号・40号~49号・51号 土坑実測図	47
図 1 9	3号住居址出土土器実測図	23	図 5 9	50号・52~58号・60号・62号・66号~68号 ・76号・77号土坑実測図	48
図 2 0	4号住居址、12号土坑実測図	24	図 6 0	65号・69号~75号・78号~82号 ・84号~87号土坑実測図	49
図 2 1	4号住居址出土土器実測図	24	図 6 1	白磁碗分類図	50
図 2 2	5号住居址実測図	24	図 6 2	土坑出土遺物実測図	50
図 2 3	6号住居址実測図	25	図 6 3	土坑出土遺物実測図	51
図 2 4	11号住居址実測図	26	図 6 4	井戸址、溝址出土土器実測図	56
図 2 5	7号住居址出土土器実測図	27	図 6 5	不明遺構・検出面出土土器実測図	56
図 2 6	7号住居址実測図	27	図 6 6	土・鹿角・金属・石製品実測図	57
図 2 7	8号住居址実測図	27			
図 2 8	8号住居址出土土器実測図	27			
図 2 9	9号住居址、38号土坑実測図	28			
図 3 0	9号住居址出土土器実測図	28			
図 3 1	10号住居址実測図	29			
図 3 2	10号住居址出土土器実測図	29			
図 3 3	12号(上)・17号(下)住居址実測図	30			
図 3 4	17号住居址出土土器実測図	30			
図 3 5	12号住居址出土土器実測図	31			

I 調査の経過

1 調査の事務経過

[プール地点]

平成5年9月 建設・土木工事等にかかわる事業計画の照会に対して、教育委員会総務課より「綿内小学校プール改築」の回答。

平成6年3月3日付 「埋蔵文化財確認調査について（依頼）」受理。

9月13日 工事請負業者北野建設㈱と工事工程等調整保護協議。

9月30日 試掘調査実施。事業着手前に埋蔵文化財の保護措置が必要の旨「埋蔵文化財確認調査の結果について（報告）」提出。

10月11日付 長野市長塚田佐より文化財保護法（法）第57条の3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」受理。12日付 記録保存による発掘調査の措置が適当と思料される旨を記して長野県教育委員会教育長（県教育長）宛進達。

10月19日付 北野建設㈱代表取締役専務瀧田勇夫と重機等「賃貸借契約書」締結。

10月20日～11月8日 発掘調査実施。

10月20日付 法第98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」提出。

11月1日付 県教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」受理。（㈱写真測図研究所代表取締役杉本幸治と遺構測量等「委託契約書」締結。

11月7日付 長野中央警察署長宛「埋蔵文化財の拾得について（届）」、県教育長宛「埋蔵文化財保管証」、総務課長宛「発掘調査終了届（通知）」提出。

11月22日付 県教育長より「埋蔵物の文化財認定について（通知）」受理。

[体育館地点]

平成12年3月10日 総務課・建築課と埋蔵文化財保護協議。

4月18日付 北野建設㈱代表取締役社長北村孝一と重機等「賃貸借単価契約書」締結。

4月20日～6月16日 発掘調査実施。

5月10日付 ㈱写真測図研究所代表取締役杉本幸治と遺構測量等「業務委託契約書」締結。

6月21日付 長野市長塚田佐より法57条の3第1項の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書」受理。23日付 記録保存をはかる必要がある旨を記して進達。

6月23日付 長野中央警察署長宛「埋蔵文化財の発見について（通知）」、県教育長宛「発掘調査終了報告書」、総務課長宛「発掘調査終了通知」提出。

2 調査日誌

[プール地点]

平成6年10月24日 表土除去。調査機器材搬入。遺構検出。

10月26日 遺構検出・柱穴群の調査。

10月28日 SD1～4、SK3・4の調査。

11月1日 調査継続。

11月2日 溝址・土坑調査継続。遺構測量。
 11月4日 調査区東側遺構検出。写真撮影。トレンチ遺構確認。
 11月7日 SD10の調査。写真撮影。調査機器材撤収。
 11月8日 SK4、SD9・10実測。現地における調査完了。

[体育館地点]

平成12年4月20日～26日 表土除去。

4月24日・25日 遺構検出。

4月25日 SB1・柱穴群等調査開始。

4月27日 SB1・3、SK3、SD1の調査。

4月28日 SB3、SK3調査継続。SB2、SK4～9の調査。

5月1日 SB2・4・5、SK11・12、SD2・3の調査。

5月2日 SB6、SK14、SE1の調査。

5月8日 東南部遺構検出。SB2調査継続。SK13、SE2の調査。

5月9日 SB6と周辺柱穴群、SK15の調査。南端部の落込み追及。

5月10日 SB7、SK17～19、SZ2・3の調査。

5月11日 SB7調査継続。SK21、SZ2南側柱穴群の調査。

5月15日 SK22～30の調査。

5月16日 昨日の遺構調査継続。遺構測量。

5月17日 2次面露呈。SK31・32、SE3～5の調査。土器洗浄。

5月18日 2次面露呈。昨日の遺構調査継続。SB8の調査。

5月23日 SB9・10、SK33～37の調査。遺構測量。

5月24日 SK38～47の調査。

5月25日 2次面露呈。遺構検出。SB11の調査。

5月26日 SK48～54の調査。

5月29日 SB12～14・16、SK55～60の調査。

5月30日 昨日の遺構調査継続。SB15、SD5～7の調査。

6月1日 SB12～16写真撮影。SB17、SK61～64の調査。

6月2日 SB18、SK65～68の調査。

6月5日 昨日の遺構調査継続。SD8～11の調査。

6月6日 SB19、SK69～76、SD9・10の調査。

6月7日 SB20、SK77～82、SD11・14の調査。



I-1 平成6年10月26日



I-2 平成12年5月10日



I-3 5月24日



I-4 5月27日

6月12日 SB18～20、SD9・12周辺写真撮影。
 6月15日・16日 遺構測量。現地における調査完了。
 5月31日・6月8日・9日・13日～16日 土器洗浄。



I-5 6月1日

3 調査の体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長	滝澤忠男 (H 6)	久保 健
	教育次長	柄沢 滋 (H 6)	今井克義
	教育次長副任	伝田長男 (H 6)	塚田昌稔
総括管理者	埋蔵文化財センター所長	荒井和雄 (H 6)	磯野久夫
	主幹兼所長補佐	鈴木貞男 (H 6)	
庶務係	所長補佐兼庶務係長	山中武徳 (H 6)	
	庶務係長	北村実寛	
調査係	所長補佐兼調査係長	矢口忠良 (T主任調査員・報告書編集、T遺構写真、T遺物実測)	
	主査	青木和明 (H 6、P予算事務)	
	〃	千野 浩 (T予算事務、遺物写真)	
	〃	飯島哲也 (P試掘調査)	
	主事	風間栄一 (P主任調査員、P遺構測量、P遺構写真、P遺物実測)	
	〃	小林和子	
	専門主事	荒木 宏 (注記)	
	専門員	笠井敦子 (H 6、P調査員・P遺構測量)	
		山田美弥子 (遺構測量、遺構整図)	
		北村広充 (T調査員)	
		中殿章子・西沢真弓・小野由美子・堀内健次・藤田隆之・宮川明美・清水竜太	
特別調査員	長野県教育委員会文化財生涯学習課指導主事	原 明芳 (中世遺物分析)	
調査作業員	[プール]	相沢婦志子・上田 清・上田富子・小林利男・近藤利子・関崎文子・多城恵子・橋爪孝次・深沢要作・村松正子	
	[体育館]	池田賢二・石田美津子・一色茂喜・内山弘子・内山善徳・小林信子・小宮山武男・小山くによ・滝沢美和子・徳嵩勅子・中島昭二郎・橋爪孝次・保坂豊子	
整理調査員	青木善子 (遺構図・遺物図浄書)		

* H 6 (平成6年度)・P (プール)・T (体育館)・標記なしは両調査地点及び平成12年度を表す。

以上の方々の他に、プール地点では小学校長金井みつ子・建設担当の教育委員会総務課学校施設係長丹後恵二・工事請負会社の北野建設(株)現場代理人笠原弘の各氏、体育館地点では校長小平定男・総務課主査久野佐武郎・建築課係長高橋伸治・北野建設(株)現場代理人横田善史の各氏には発掘調査の実施にさいし何かとご支援をいただいた。記して感謝申し上げます。



I - 6 体育館地点調査従事者

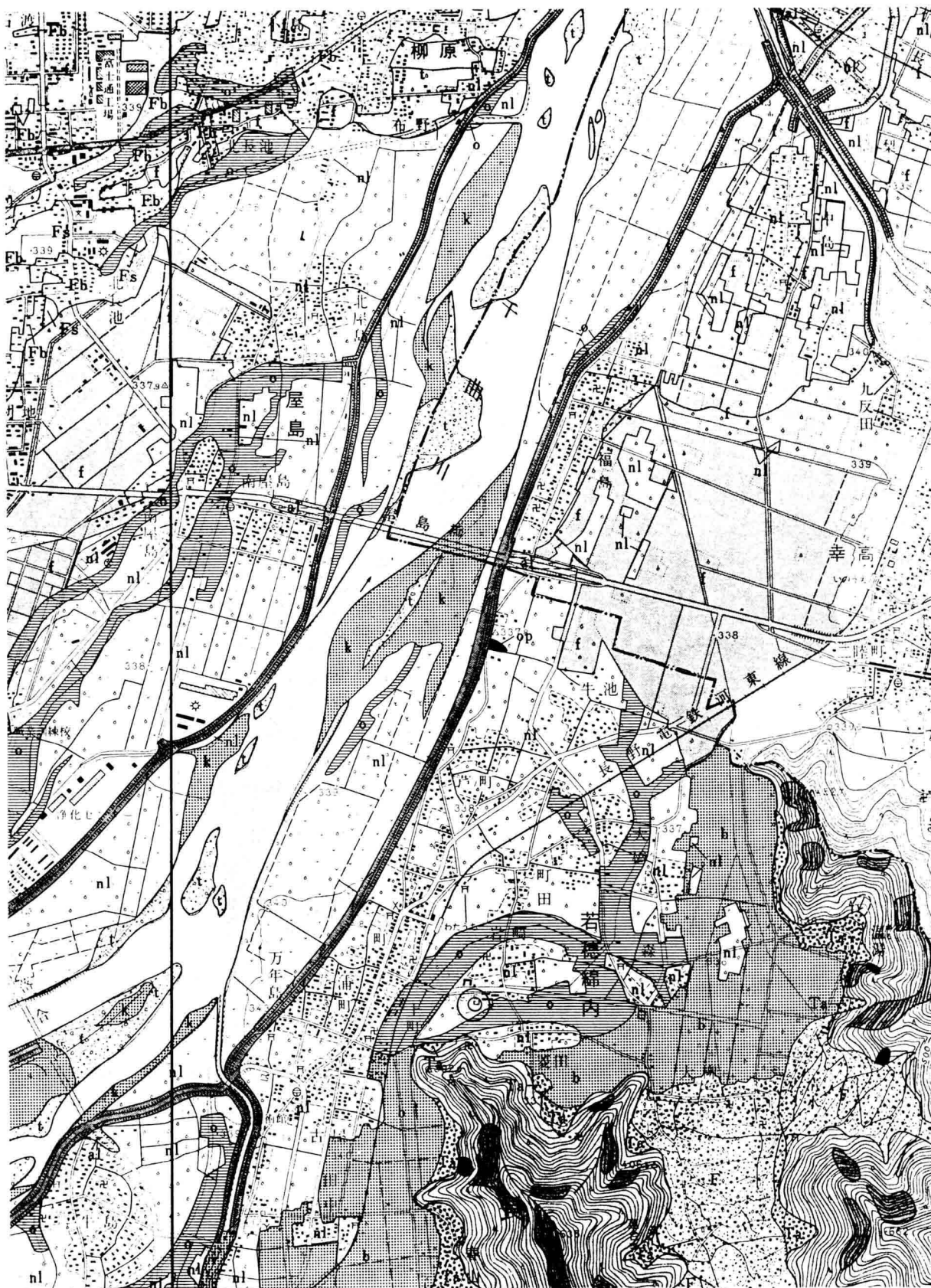
II 調査地周辺の環境

1 地理的環境

千曲川右岸の地形的特色については川田氏館跡の項で記述したとおりであるが、綿内小学校が位置する綿内地域においては、千曲川の影響を強く受け前者より広い沖積面を形成する。太郎山の支脈である天王山が千曲川方向に突出し、山脚を挟るように旧千曲川が流れ込み、帯状の河川敷跡を残す。字名では上馬場沢・下馬場沢、菱田の集落を除く前後の低地がこれにあたる。この旧河川路間に島状に残された微高地が岩崎・菱田地籍であり、それぞれ遺跡の存在が周知されている。この他東側の湾入部も榎田遺跡の存在をみるとおり微高地化した島状地形があった可能性が高い。現状では圃場整備のため水田として地目利用され古い地形が見られないのは残念である。岩崎集落内は標高339mの等高線が走り、旧河川敷との比高差は数10cm以上あったと思われる。ちなみに綿内集落部分は自然堤防としての微高地で、旧河川敷は後背湿地としての地目利用がなされている。



図1 調査地周辺の地形図（1：5,000、Pプール・T体育館）



nl 自然堤防 b 後背湿地 o 旧河道 f 氾濫平野 F 扇状地

図2 長野市防災基本図地形分類図 (1:25,000)

2 考古学的環境

綿内地域の遺跡は少なく11遺跡が周知されているにすぎない。縄文時代の大柳遺跡・仁王堂遺跡が崖錐に立地するほかは山麓を含めて平地に散在し、弥生時代以降の遺跡である。春山の自然堤防上には上信越自動車道建設に伴い調査された春山B遺跡がある。弥生時代住居址40軒及び方形周溝墓18基が確認され、集落廃絶後墓域として機能していたようである。古町・芦町・麦在家・高野・町田・八王子・森・榎田・島・笹木・大橋・南条・牛池の一带は弥生時代以降の遺跡が展開されているものと予想され、綿内遺跡群と呼称している。周知されている地点遺跡に古町・南条・島・榎田の各遺跡がある。上流域の田中に春山B遺跡に接して長池遺跡が、旧河道による中洲状の微高地には岩崎遺跡・菱田遺跡がある。このうち発掘調査の経歴のあるものは春山B遺跡他以下のとおりである。



- 1 岩崎遺跡体育館地点 2 岩崎遺跡プール地点 3 岩崎遺跡保育園地点
4 古町遺跡流入塚 5 高野遺跡 6 榎田遺跡 7 南条遺跡

図3 綿内地域調査遺跡位置図



図4 調査地周辺の字境図（長野市地名研究所作成「長野市字境図」より）



Ⅱ-1 調査地周辺の航空写真（平成2年6月撮影、㈱ジャステック）

〔岩崎遺跡綿内保育園地点〕

平成3年保育園舎改築に伴う発掘調査で平安時代の住居址3軒・土坑6基・土壙墓2基・溝址1条・小穴が確認されている。遺物には墨書土器・緑釉陶器・青銅製帯金具等が出土している。『岩崎遺跡』長野市教育委員会 平成5年

〔古町遺跡流入塚〕

古町遺跡は町・芦町・牛池にかけての千曲川の自然堤防上に展開する弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡と考えられている。昭和54年下水道工事のさい平安時代の土師器・須恵器が採集され、昭和56年には道路工事によって土師器・須恵器・布目瓦片が出土している。流入塚の発掘調査は綿内町区土地区画整理事業に伴うもので、平成4年に実施した。墳丘は直径5.7m・短径4.7m・現地表面から高さ86cm測る小規模なものである。平安時代末から中世初頭の集石遺構を基礎に後世に周辺の石が集められて墳丘化したものとみられる。集石遺構の東斜面に鎌倉時代から室町時代と推定される5基からなる火葬墓群が検出されている。遺物は古代から現代まで各期の土器・陶器片が出土しており、器種には灰釉把手付水注・青磁碗片・珠洲焼播鉢等がある。『古町遺跡流入塚』長野市教育委員会 平成5年

〔榎田遺跡〕

上信越自動車道建設に伴い平成元年から4年度にわたって発掘調査が実施された。弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。45,500㎡程が調査され、住居址1,115軒余が検出された。特に古墳時代では中・後期を主体に893軒の住居址が確認されている。長野盆地の中で突出する遺構数の大遺跡である。これに対し奈良・平安時代住居址は40軒余にすぎなくなる点も注意される。遺物では弥生時代中期

における磨製石斧の生産地と目され石器製作関連資料が大量に出土している。第3号溝址から各種鋤類・鋤・えぶり・田下駄・木槌・竖杵等の農具、かせい・たたり等の紡織具、扉・梯子・梁・杭等の建築材、木製鞍や鎧、各種くり物・曲物類、弓や鞘、腰掛け、鳥形木製品等の多種多様な木製品が注目される。『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 榎田遺跡』長野県教育委員会他 平成11年

〔高野遺跡〕

岩崎遺跡の旧河川路をはさんで北の対岸に位置し、千曲川の自然堤防上の遺跡である。平成8年・9年に発掘

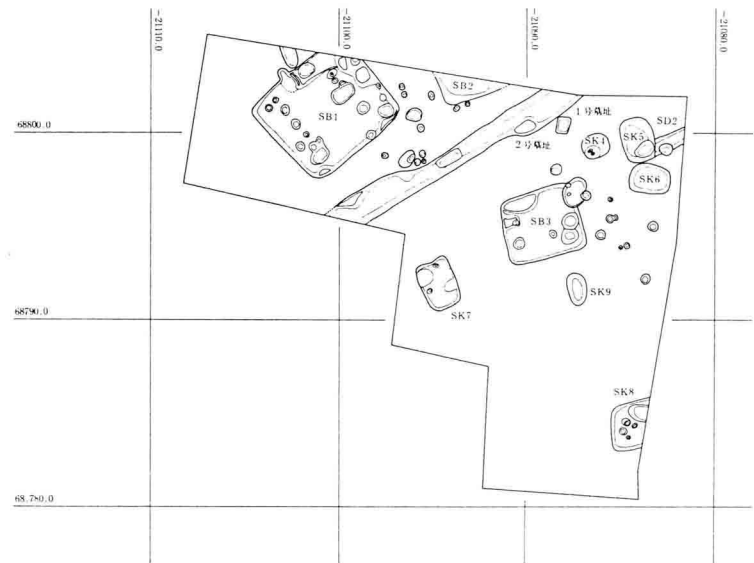


図5 岩崎遺跡保育園地点遺構分布図（1：400）

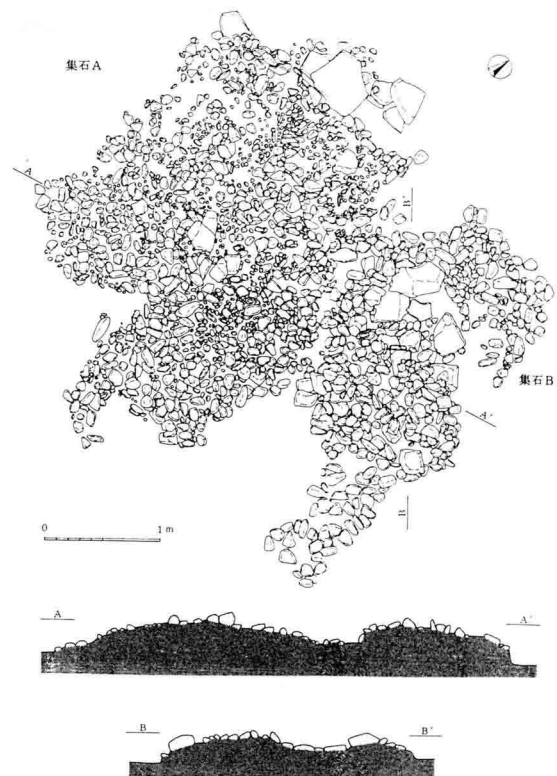


図6 古町遺跡流入塚下部集石実測図

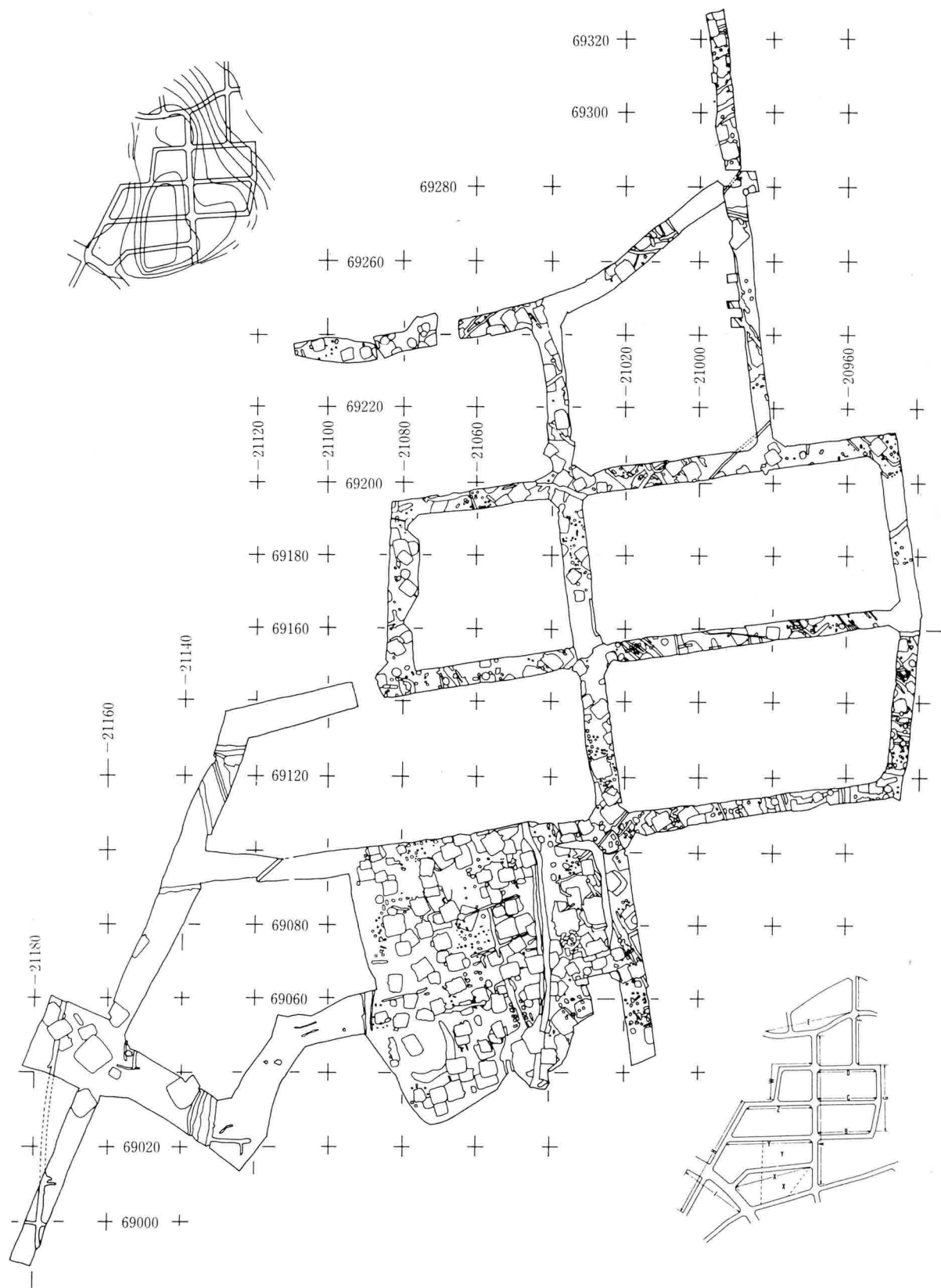


図7 高野遺跡遺構分布図 (1 : 1,600)

調査を実施した。調査の起因は綿内中央土地区画整理事業によるもので、調査面積は12,700㎡に及ぶ。遺跡の始原は弥生時代後期からで、古墳時代中期に断絶があるものの平安時代までの複合集落遺跡である。住居址は総数295軒確認され、内訳は弥生時代後期51軒・古墳時代前期10軒・同後期8軒・奈良時代13軒・平安時代213軒である。この他奈良・平安時代の掘立柱建物址3棟・柱穴群2か所・井戸址3基・土墳墓11基・火葬施設6基・小鍛冶址7基・土坑53基（含弥生7・古墳8）・溝址26条（含弥生5）が確認されている。調査は区画整理事業地内の道路敷を対象（9,100㎡）としたため全面では倍以上の数値になるものと思われる。本遺跡の主体時期が弥生時代後期と平安時代に求められ前述の榎田遺跡の内容と大きな相違がみられる。遺物には土器・陶器類の他に青銅製巡方・羽口・刀子・鎌・鉄鏃・砥石・管玉等がある。『綿内遺跡群高野遺跡』長野市教育委員会 平成11年

〔南条遺跡〕

綿内北トラックターミナル造成事業に伴い平成8年から10年にかけて発掘調査を実施した。遺跡は須坂市方面の氾濫原野を望む自然堤防の先端部に位置する。弥生時代後期の甕1個体及び古墳時代住居址1軒のほかは全て平安時代に比定され、住居址150軒・掘立柱建物址15棟以上・井戸址10基以上が検出されている。住居址は形態や遺物から3～4小期編年される可能性があり、継続性のある集落跡とみられる。井戸址は素掘り・井戸枠を有し丸太くり抜き材を用いたもの・石積み構造の3種ある。一つの井戸址からは大量の木製品が出土しており、井戸廃絶祭祀に伴うものと考えられる。調査報告書の刊行は平成13年度に予定している。

以上のような調査所見を得ている。集落的には各時代・時期により主体集落の変遷をみることができる。弥生時代中期に榎田遺跡に中核集落が形成され、後期には高野遺跡へ主体が移り、古墳時代には榎田遺跡に若穂・須坂地域等の広域を支配地とする権力者の所在を想定される有力な集落が形成される。当該期の特色でもある古墳の築造及び本遺跡に対応する古墳群の所在の問題が残る。遺跡の立地する空間域に大柳古墳群4基・大豆皮古墳群3基が周知されているにすぎず、それも後期に比定されている。尾根一つ越えた須坂市の鮎川流域の古墳群に求めることも可能であるが、むしろ先代からの故地である保科地籍の前方後円墳をはじめとする古墳群に対応させるのが妥当性があるように思える。奈良時代はいまひとつ不明であるが、高野遺跡に所在する可能性がある。平安時代になると高野遺跡や南条遺跡に密集度の高い集落が営まれ、『和名類聚抄』記載の穂科郷または小内郷の中心的集落跡に間違いなかろう。



II-2 南条遺跡平安時代遺構群

III プール地点の調査

1 試掘調査

(1) 調査日 平成6年9月30日

(2) 調査の目的 開発事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接しており、埋蔵文化財の包蔵状況によっては破壊のおよぶ可能性も考えられる。したがって施工に先立ち事業予定地内を試掘し、埋蔵文化財の包蔵状況を調査する。

(3) 調査の方法 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵の可能性がある任意の地点に試掘坑を2か所設定、重機により掘削し、坑内断面の土層観察により、遺物包含層の有無及び深さを確認する。

(4) 調査結果 第1試掘坑（プール東側）にて確認された堆積土層は、基本的に5層に分層される。1層は表土層（-50）で、盛土された土層である。2層は黄褐色砂質土層（-83）で、配水管埋設などで正常な堆積状況を示していない。3層は黄灰褐色シルト層（-108）、4層は暗灰褐色シルト層（-118）で、安定した堆積状況を示している。5層は黄灰褐色粘質土層（-130）で、土器片・炭化物を含む。このため試掘坑を東側に拡張した結果、住居址と考えられる遺構の存在が確認された。第2試掘坑（西側）においては2層が茶褐色土層（-115）となり、少量ではあるが土器片や炭化物等、埋蔵文化財の存在を示す遺物の包蔵が確認されたが全面的に攪乱されており、遺構は確認されなかった。3層の暗灰色粘土層（-150）以下は砂層になり、河川の堆積作用によって形成されたものと考えられる。

以上により、当事業予定地においては、現地表化約118cmにおいて埋蔵文化財の遺構面を確認した。現在のプールの西側においては攪乱によってすでに遺構が破壊されている可能性が高いが、プール北側を中心に埋蔵文化財が包蔵されていると判断される。したがって、事業着手前に埋蔵文化財保護措置が必要と思料される。

2 遺構の分布

調査地全面に何らかの遺構が展開するが、住居址等の居住施設は確認されない。東に不連続の6号～8号溝址、西に同方向に並走する3条の溝址（1号・2号・4号）とこれに直交する2条の溝址（9号・10号）ある。共に延長規模は不明である。2号と6号溝址間に2軒×3軒以上と推定する掘立柱建物址が2棟確認されている。この他柱穴様の小穴が散在するが小屋組配列を見いだすことができない。

3 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物址

1号建物址

[遺構]（9図） 2号溝址の近接し、同方向に構築される。また、4号溝址をまたいでいるが、前後関係は不明である。東西2間・南北2間またはそれ以上の規



III-1 遺構の分布（東より）

模になるものと思われる。東西芯々間4.8m・1間2.4m、南北間2間約4.0m・1間1.9m～2.0mの規模になる。柱穴は直径50～70cmで、内直径40cm前後の柱根穴を残すものが多い。南北軸線はN17°E方向を指す。

[遺物] 土師器坏とみられる小破片が1点出土しているにすぎない。

2号建物址

[遺構] (9図) 6号・7号溝址に近接する。東西2間・南北3間または4間の規模を予想する。東西芯々間4.2m・1間2.0mと2.2m、南北間3間約5.6m・1間1.7m～2.0mの規模になる。柱穴は直径45～60cmで深さ7cm～36cmを測る。南北軸線はN16°E方向を指す。

[遺物] 土師器坏・甕の小破片が2点出土しているにすぎず、時代比定は不可能である。

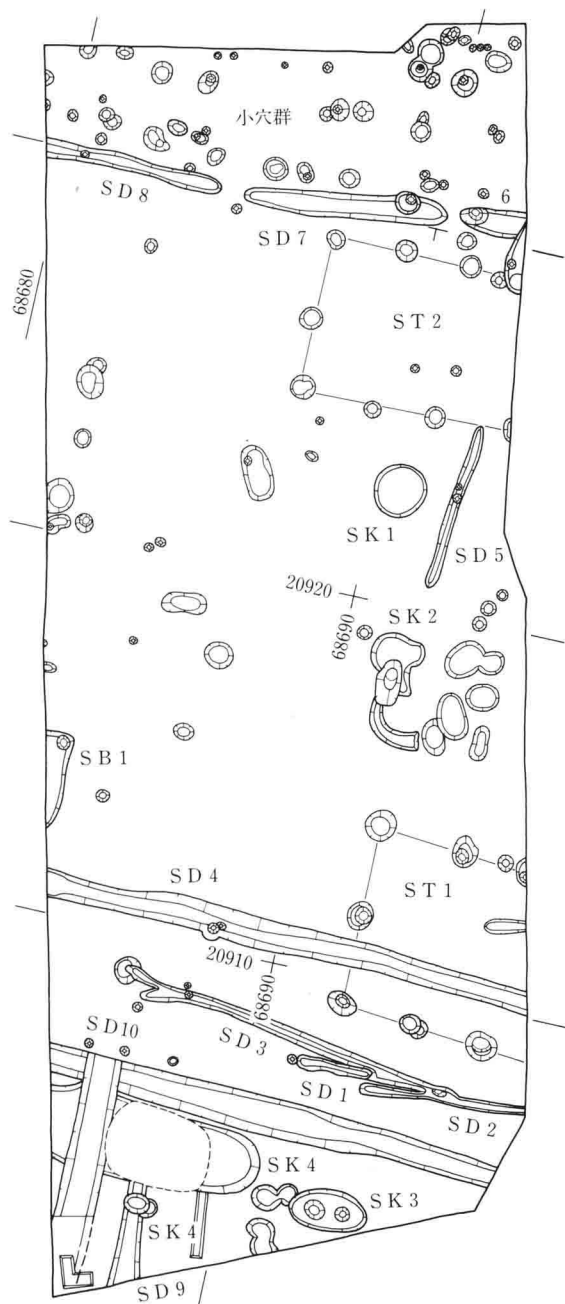


図8 プール地点遺構分布図(1:200)



III-2 1号建物址



III-3 2号建物址



III-4 4号・5号土坑、1号・10号溝址

(2) 土 坑

〔遺構〕

番号	遺構図	形 態	規 模 (m)			長軸方向	備 考	遺 物	図
			長軸	短軸	深さ				
1 号	9	円形	1.38		0.10			(土)	
2 号	9	円形?	1.45	1.10	0.08	南 北	複合土坑	(土) (須)	11
3 号	9	不整楕円形	1.96	1.15	0.15	N12° E	小穴内包	(土) (須)	11
4 号	9	楕円形		2.00	0.19	南 北	南側攪乱	(土) (須)	
5 号	9	楕円形	0.86	0.73	0.67	N 6 ° E	複合土坑・SD9と重複	(土)	

[遺物] (11図) 遺物については土師器坏・碗・甕を（土）、須恵器坏・甕を（須）と表記し、遺物の欄に記載する。復元実測可能な土器片は少なく2号土坑で須恵器坏、3号土坑では出土量が比較的多いものの土師器・須恵器の坏が各1個体あるにすぎない。

(3) 溝 址

〔遺構〕

番号	遺構図	形 態	規 模			長軸方向	備 考	図
			確認長(m)	幅 (m)	深さ(cm)			
1号	10	直線	12.0超	0.6～1.0	20～25	N16°E	SD10と直交・南低	
2号	10	直線	4.3超	0.2～0.4	6～10	N9°E	SD3と接続	
3号	10	直線	8.3	0.2～0.5	5～8	N12°E	SD2と接続	11
4号	10	直線	12.8超	0.6～0.8	25～35	N12°E	SD2と接続・南低	
5号	8	直線	4.5	0.15	10	N80°W		11
6号	8	直線	1.6超	0.6	10～12	N7°E	SD7と不接続	11
7号	8	直線	5.1	0.5～0.6	6～12	N12°E	SD8と不接続	11
8号	8	直線	4.8	0.3～0.5	5～10	N13°E	SD7と不接続	
9号	8	直線	3.0超	0.5～0.7	8～12	N69°W	SD1と直交？	11
10号	8	直線	6.1超	0.9～1.0	25～30	N70°W	SD1と直交	

[遺物] (11図) 8号土坑を除き他の遺構からは土師器・須恵器の出土があるものの、復元実測可能な個体は少ない。

遺物觀察表

図 番 号	番 号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺 存	成 形 ・ 調 整 等	備 考
				口 径	底 径	器 高			
11	1	須恵	坏	14.6	8.1	4.8	1/3	ロクロ・糸切り	SK2
	2	〃	〃	12.8			1/8	〃	SK3
	3	黒色	〃	11.3	5.7	3.2	1/3	ヨコナデ・内黒・ヘラミガキ・ヘラナデ・糸切り	〃
	4	須恵	〃		5.9		ママ	ロクロ・糸切り	SD3
	5	〃	〃	13.2			1/3	〃	SD5
	6	〃	〃	13.1			1/2	〃 ・ 赤褐色	SD6
	7	〃	高台坏				ママ	〃 ・ 回転ヘラケズリ	SD7

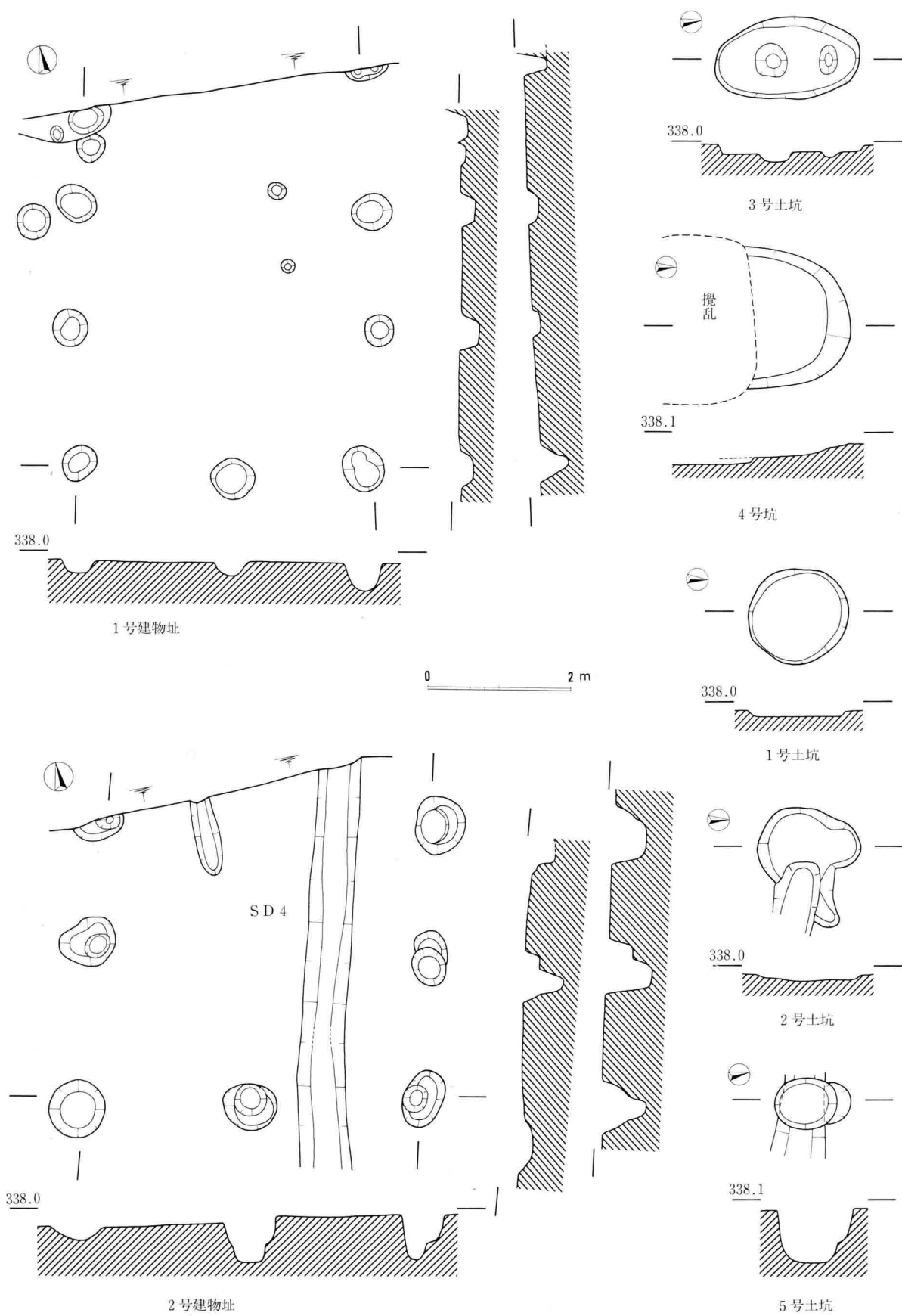


图9 建物址·土坑实测图(1:80)

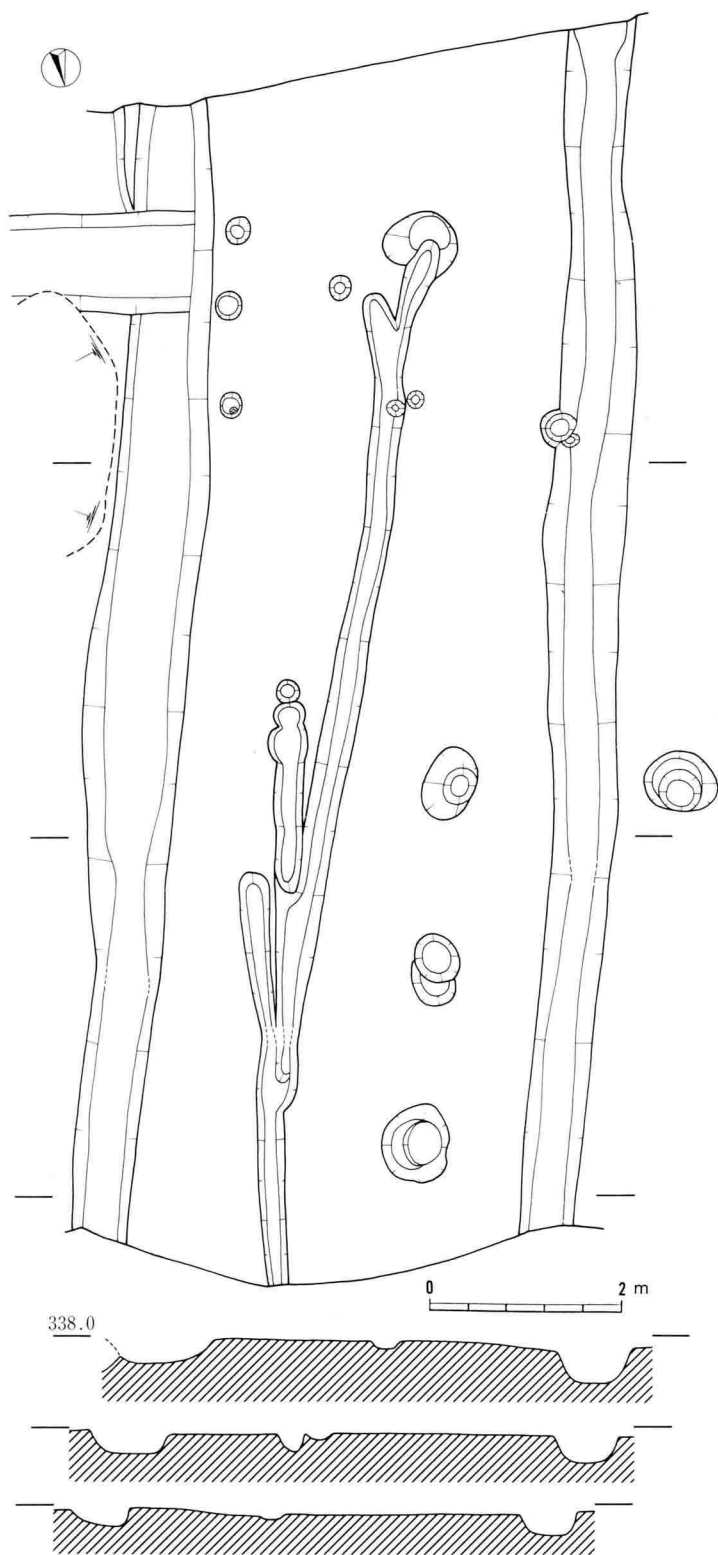
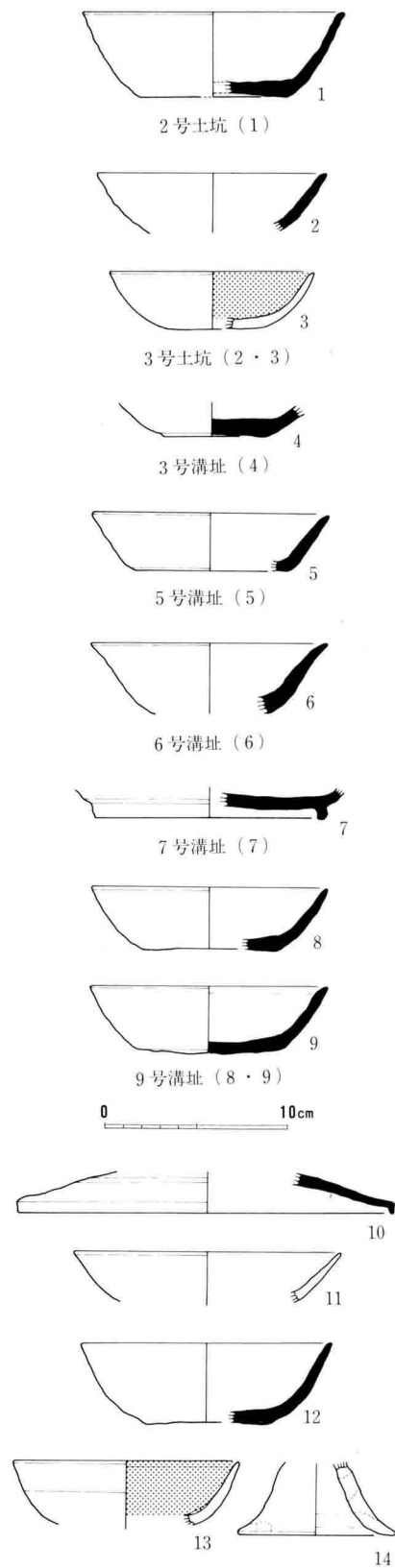


図10 1号(左)・3号(中)・4号(右)溝址実測図(1:80)



検出面(10~14)

図11 プール地点出土土器実測図(1:4)

図 番号	番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等	備考
				口径	底径	器高			
	8	須恵	坏	13.0	7.5	4.4	1/4	ロクロ・回転ヘラケズリ	SD9
	9	〃	〃	13.1	8.3	3.7	1/3	〃 ・ヘラケズリ・ヘラナデ	〃
	10	〃	蓋	20.8			1/8	〃 ・回転ヘラケズリ	検出面
	11	土師	坏	14.7			1/8	ロクロヨコナデ・ナデ	〃
	12	須恵	〃	13.8			1/3	ロクロ・ヘラナデ	〃
	13	黒色	〃	12.4			1/6	ロクロヨコナデ・内黒・ヘラミガキ・石英	〃
	14	土師	高坏		8.8		ママ	ヨコナデ・ナデ	〃



Ⅲ-5 1号・3号・4号溝址



Ⅲ-6 小穴群

IV 体育館地点の調査

1 遺構の分布

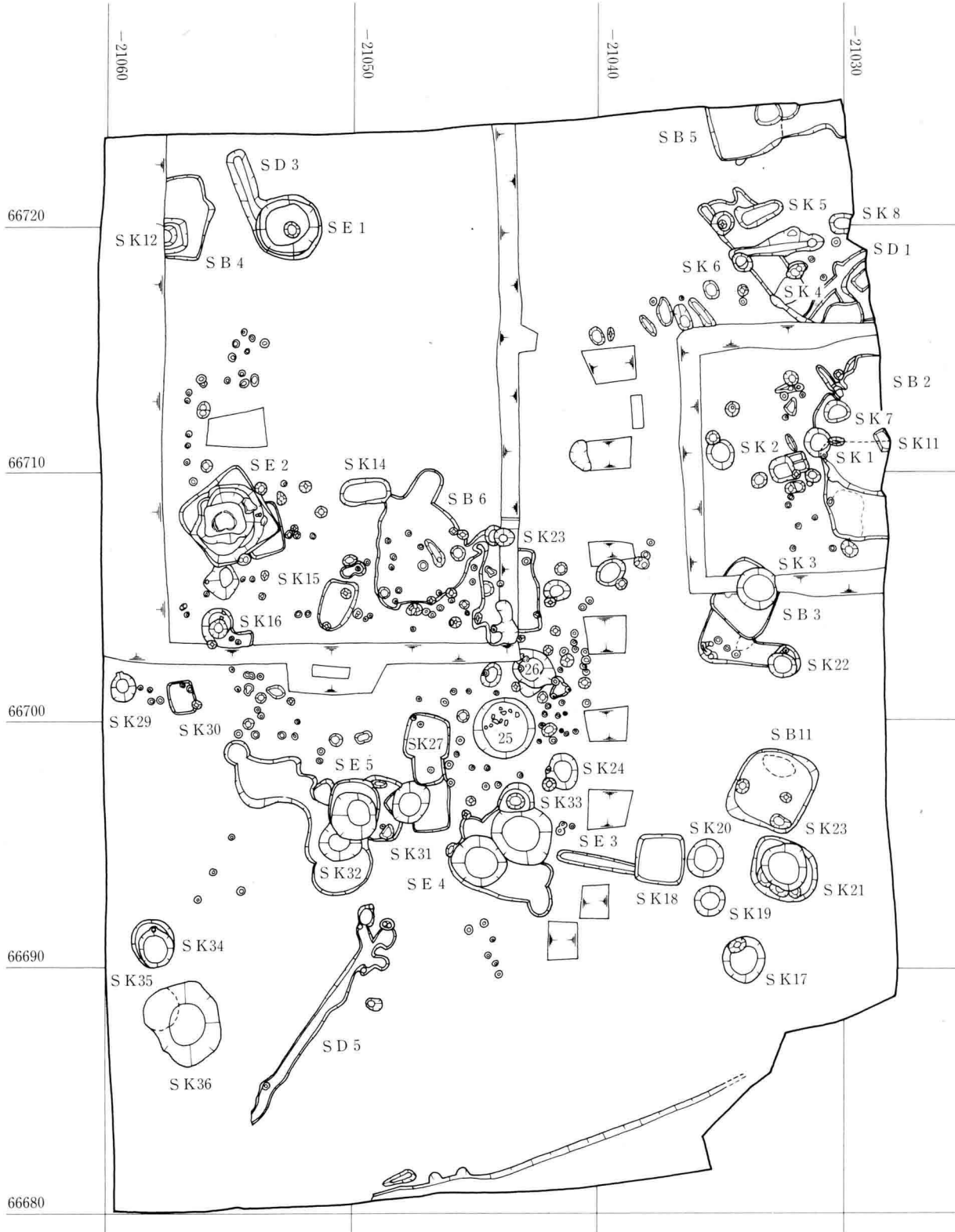
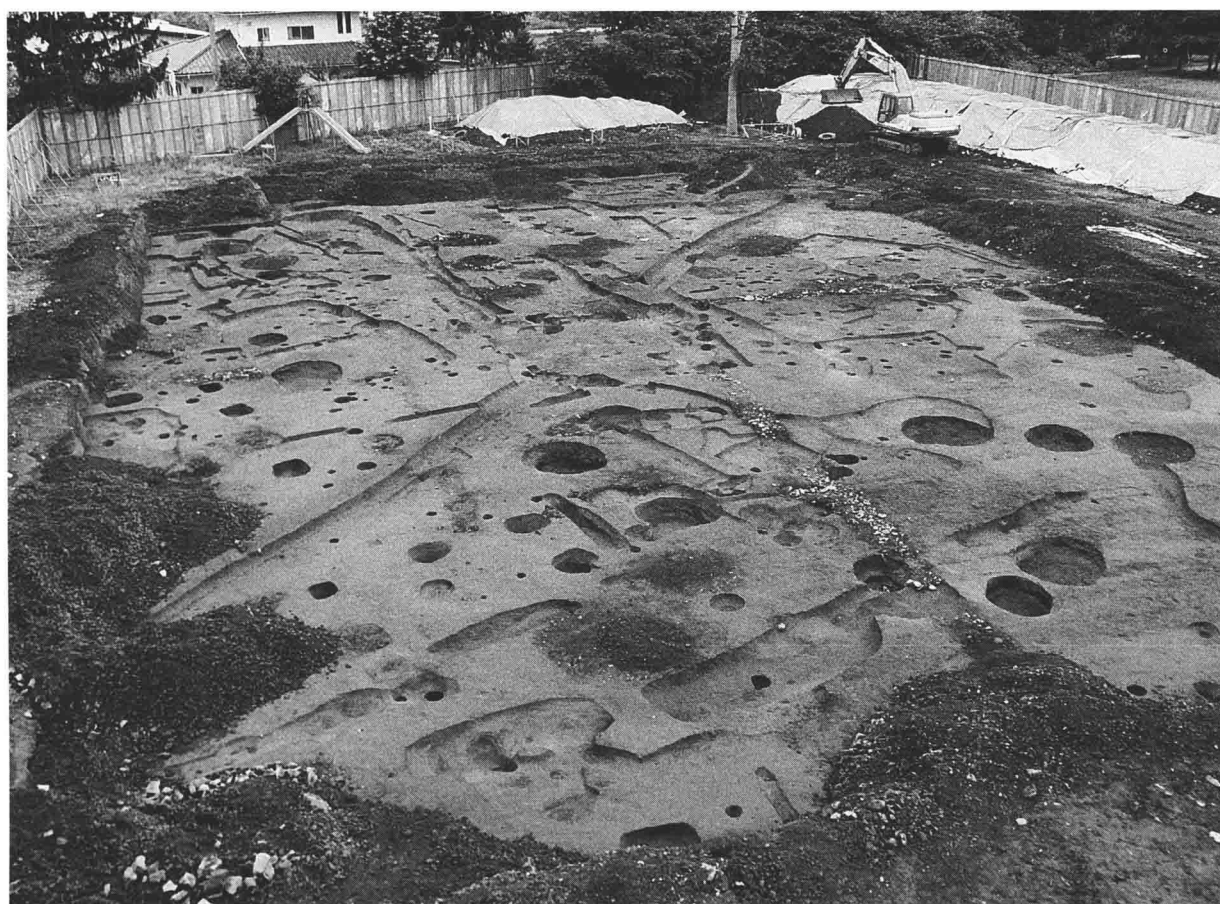


図12 1次面遺構分布図 (約1:250)

遺構面は2面あり、1次面は現地表から約70cmで茶褐色粘質土層になり、2次面はさらに20cm程深く、黄褐色粘質土層である。遺構確認面での地形の傾斜は北（微高地中央）から南へあり、調査地の南端部は傾斜度を増し落込んでいく。1次面では住居址7軒（1号～6号・11号・22号）・井戸址5基・土坑36基・溝址5条・小穴群等を検出している。井戸址や大形土坑は黒色砂質土を覆土とするのに対し、調査地南端の住居址群は2次面の遺構に属し、北東隅付近の住居址等の遺構群は暗褐色砂質土で、2次面の遺構の可能性もある。遺構の展開は調査地中央部に大形土坑・井戸址が集中し、住居址等の居住施設は散在的な在り方を示す。

2次面の遺構は調査地全面に認められる。1次面で不明確であったものが遺構面の色調の違いからより明瞭に形態が識別可能になったものがおおい。検出した遺構は住居址14軒（7号～10号・12号・21号）・番号を付した土坑49基（37号～85号）・溝址14条（6号～19号）及び小穴群等がある。覆土は暗褐色を呈する砂質土である。狭い調査地からの所見であるが、住居址は南側に偏して所在し、重複関係にあるものが多い。土坑は調査地全面に展開する。南西隅付近に中規模の土坑が集中し、その中に列をなすものがあり、掘立柱建物址として取り扱う（SK65・67・68・71・73等）。

古代の遺構とは関係無いが、調査において小学校の建物建設の変遷を物語る攪乱と称する基礎遺構をみることができる。調査地の中央東側に旧校舎と推定する基礎が溝状に掘られ、礫が埋め込まれ基礎材が残存する。現在の南校舎と同方向の東西に長く、校舎半分程北に位置し、芯々約9mの規模である。調査地の北側西半分には前述の校舎跡と同様な基礎構造を残す。昭和34年の伊勢湾台風により倒壊した体育館跡である。この位置より3.5m東に、南に5.5m振った所に今までの体育館が南北の規模を同じくして再建されている。基礎はコンクリートの打ち込みである。



IV-1 2次面遺構の分布（北より）

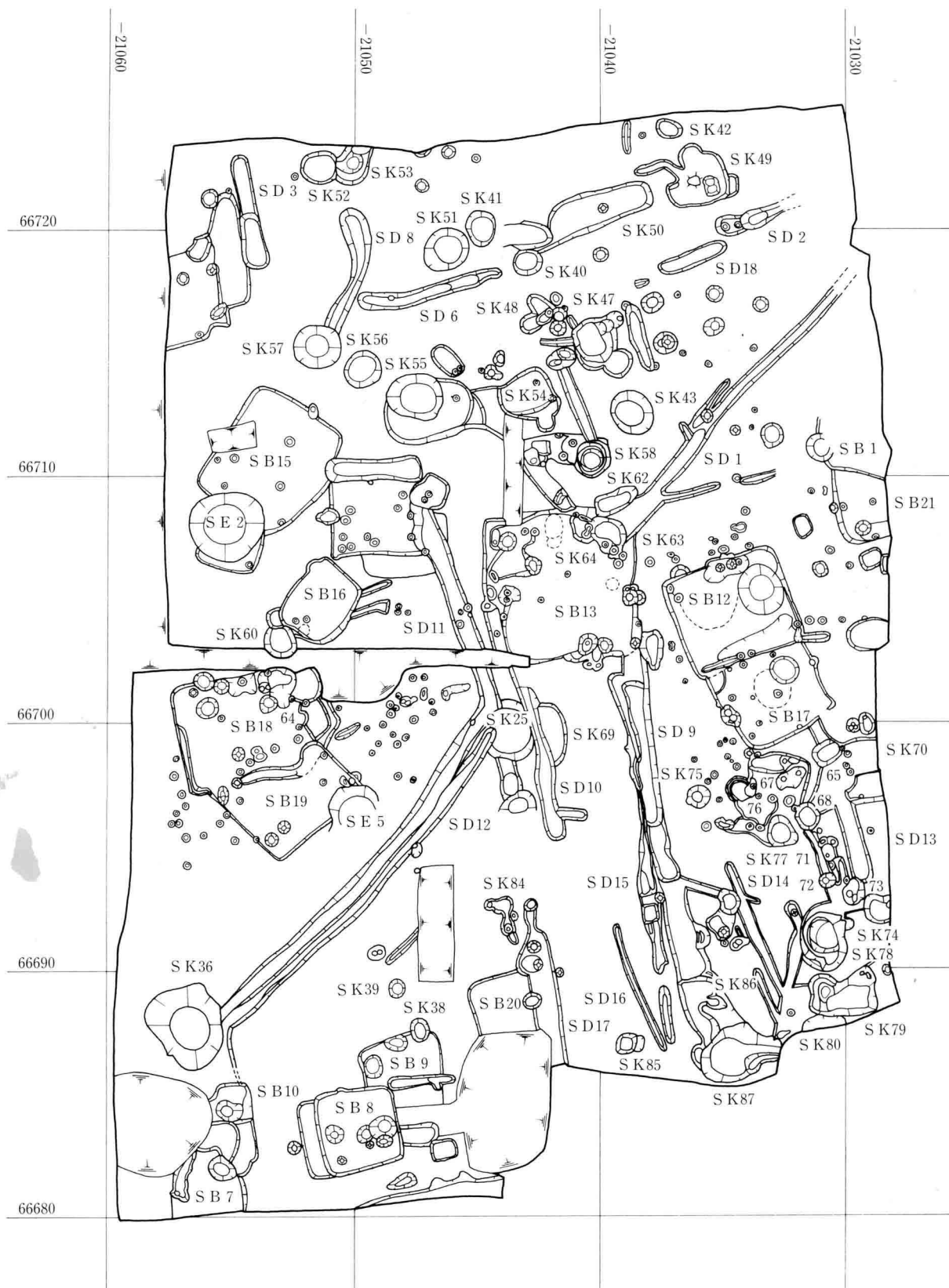


図13 2次面遺構分布図 (約 1 : 250)

2 遺構と遺物

(1) 住居址

1号住居址

[遺構] (14図) 調査地の東端に位置し、2号住居址と重複関係にあるがこれよりも先行する。遺構の東側は調査区外にあり、住居址の西側半分程を露呈した。形態は不整方形を呈するものと思われ、南北軸線がN 7°Wを指し、3.94mの規模になる。検出面からの掘り込みはカマド推定地を除く他は12cmと浅い。床面は暗緑色粘質土の貼床になり、平坦で堅緻である。カマドは南西隅部に構築されていたものと思われ構築石材が残存していたが、火床は認められない。周囲は床面より10cm程鍋底状に落ち込む。

[遺物] (15図) 出土量は少なく、カマド推定地の落込み部からのものが多い。器種には土師器坏(1・2)・内黒坏(3・7)・椀(4・8)・甕(10)、須恵器甕、灰釉陶器皿(9)がある。2は灯明皿で、口縁部には油煙痕を残す。4・7・8は内面がヘラミガキ調整され黒色処理されるのに対し、3には十文字の花弁様暗文が描かれるもののヘラミガキを欠き、5は黒色処理が施されない。10の甕の口縁端部は面取りされ平坦に仕上げる。

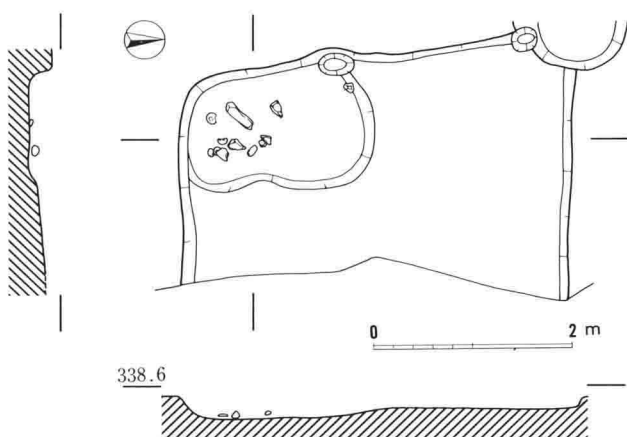


図14 1号住居址実測図(1:80)



IV-2 カマド推定地



IV-3 1号住居址

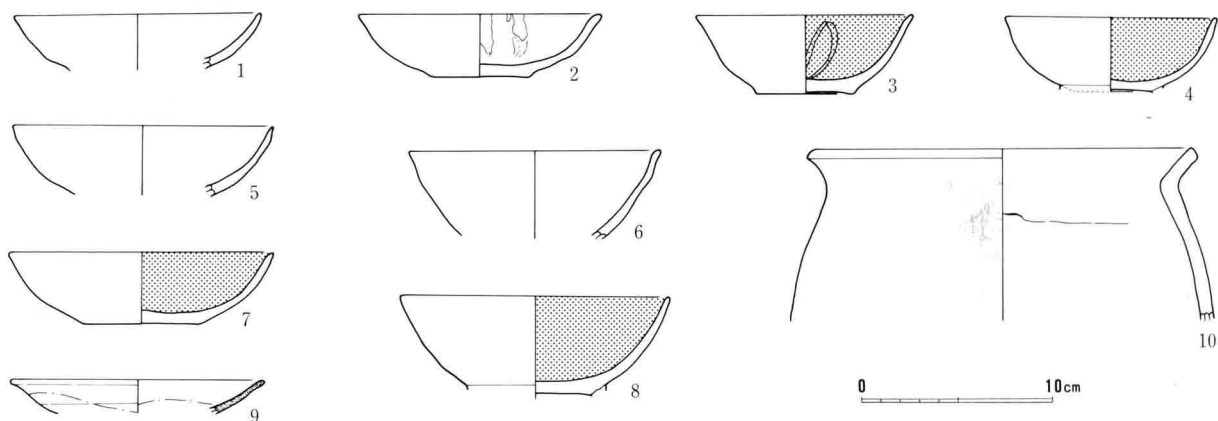


図15 1号住居址出土土器実測図（1：4）

2号住居址

〔遺構〕(16図) 1号住居址の北に重複する。遺構の南東部は調査区外にあり、主軸方向の規模及び形態は不明であるが、調査部から推定すると5.68m前後、隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みは中央付近で23cmを測り、床面は平坦で堅緻であるが南東に幾分傾斜する。主軸方向はN78°Wを指す。カマドは西壁の中央右寄りに構築され、粘土製両袖形のもので、支脚石と直径36cmの火床及び壁外に約1m突出する煙道を残す。

〔遺物〕(18図) 出土量は少ない。器種には土師器坏（1）・内黒坏・甕（3）、須恵器坏（2）、鉄滓、8字形銅製品（66図11）がある。1は底部が丸味を帯びヘラナデで整形される。2の底部外面に×印の線刻が施される。

3号住居址

〔遺構〕(17図) 1号住居址の南西に近接し、3号土坑を内包するが、旧校舎の基礎により破壊を受けている。形態は東壁が長い不整隅丸台形を呈し、長軸2.8m・短軸中央2.5m・掘り込み2～7cmの規模になる。長軸方向はN37°Eを指す。床面は軟弱で、浅い鍋底状になる。カマドの痕跡は確認されない。

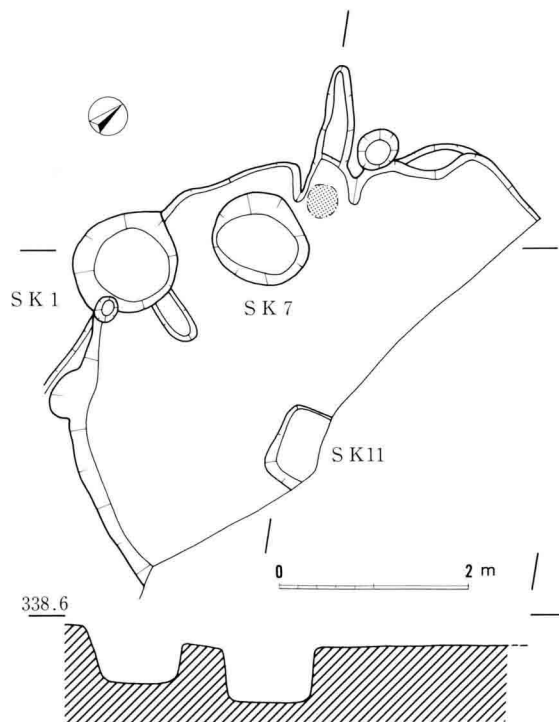


図16 2号住居址、1号・7号・11号土坑実測図（1：80）

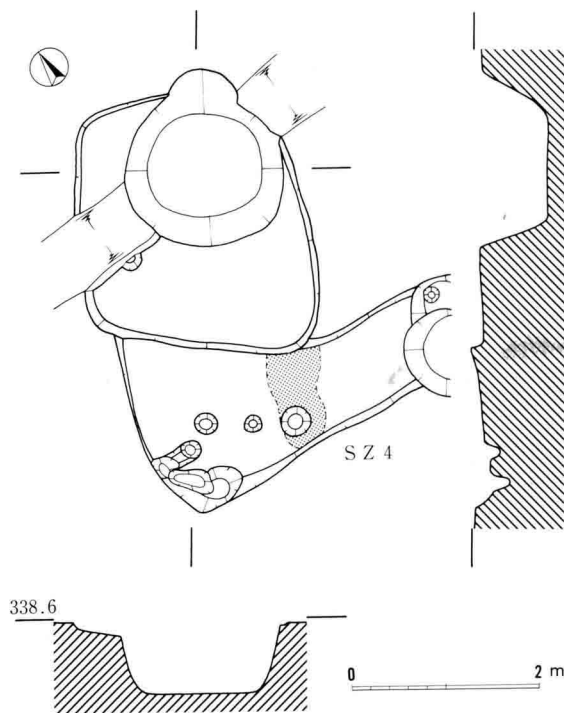


図17 3号住居址、3号土坑実測図（1：80）

[遺物] (19図) 出土量は少ない。器種には土師器坏 (2～4)・内黒坏・甕、須恵器蓋 (1)・坏、灰釉陶器碗 (5) がある。5 の体部にはタテヘラナデ痕、内面には重焼き痕を残す。



IV-4 2号住居址



IV-5 3号住居址、3号土坑

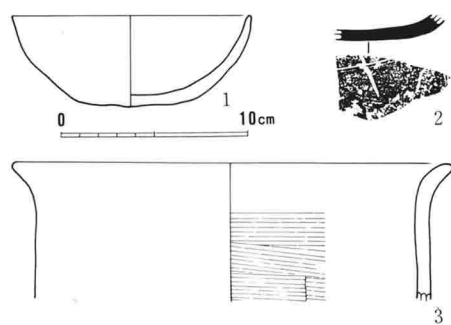


図18 2号住居址出土土器実測図 (1:4)

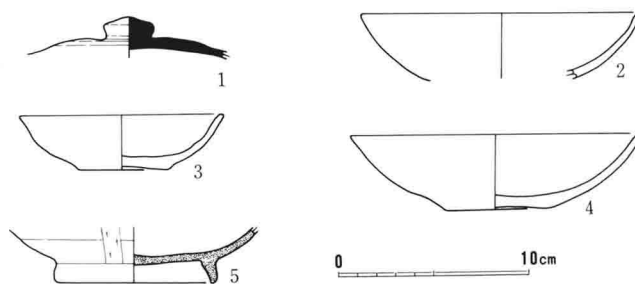


図19 3号住居址出土土器実測図 (1:4)

4号住居址

〔遺構〕(20図) 調査地の北西隅に位置し、遺構の西側は旧々体育館により破壊され、12号土坑を内包する。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、南北3.0m・掘込み6cmの規模である。軸線は南北を指す。床面は平坦で軟弱である。

〔遺物〕(21図) 出土量は少ない。器種には土師器坏(1・2)・碗(3～5)・甕・羽釜、須恵器坏・甕がある。

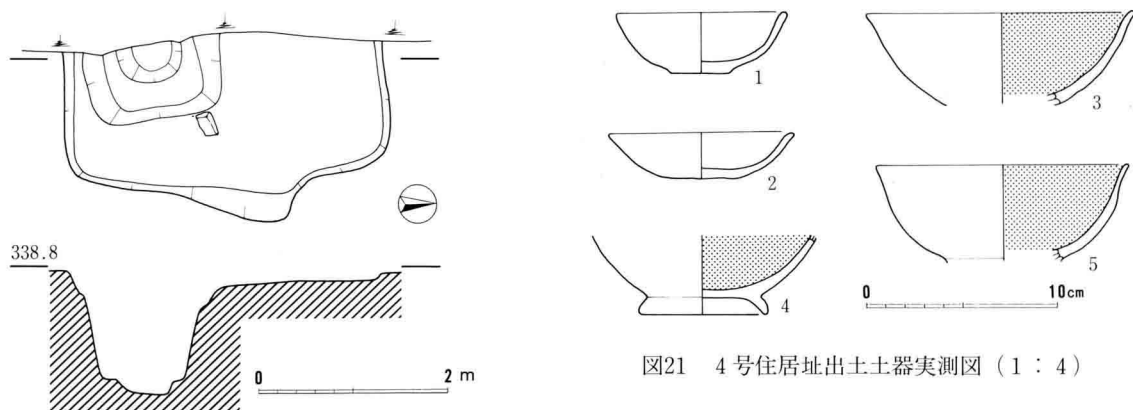


図21 4号住居址出土土器実測図(1:4)

図20 4号住居址、12号土坑実測図(1:80)



IV-6 4号住居址

5号住居址

〔遺構〕(22図) 調査地の北東端に位置し、遺構の北側は調査区外にあり、2号溝址・直径1m程の土坑状遺構と重複する。形態は方形を呈するものと思われ、東西の規模を2.9mと推定する。西壁軸線はN16°W方向になる。掘り込みは22cmを測り、床面は平坦で軟弱である。

〔遺物〕 出土量は少なく、復元実測可能な土器片はない。器種には土師器坏・内黒坏・甕、須恵器坏・甕がある。土師器甕は武蔵型と呼ばれるもので、肩部は左から右に横方向にヘラケズリが施され、体部は縦方向にヘラケズリによって器壁を薄く仕上げる。

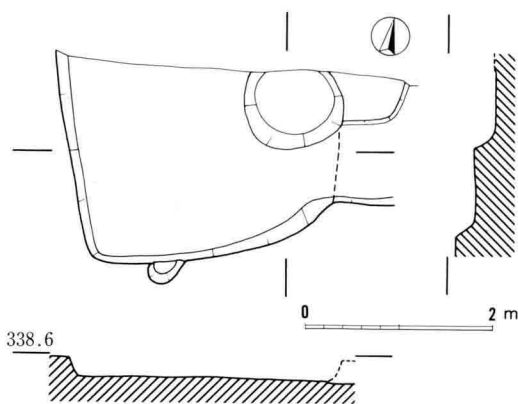


図22 5号住居址実測図(1:80)

6号住居址

[遺構] (23図) 調査地の中央付近に位置し、周辺には小穴群が展開する。形態は不整形で、各壁とも直線にならず、他の居住施設と趣を異にする。床面は鍋底状で、中央付近は貼床状の堅緻な面になり、西壁中央にカマドの痕跡と思われる角礫及び焼土が認められる。いくつかの土坑が重複しているとみられ、それらを除外すると基本形態は隅丸台形を呈する。長軸はほぼ南北方向にあり、4.3mで東西3.7mの規模になる。掘り込みは18cm～23cmである。小穴群は柱穴と考えられるものの別な遺構であろう。遺物にみられるように13世紀の中世居住遺構と推定する。

[遺物] 出土量は少ない。器種には土師器杯・甕、青磁碗、手捏ね土器皿の小破片、鉄釘(66図7)がみられるにすぎない。青磁碗は龍泉窯系蓮弁文碗で13世紀代に比定され、土器皿も同時期の所産とみられる。

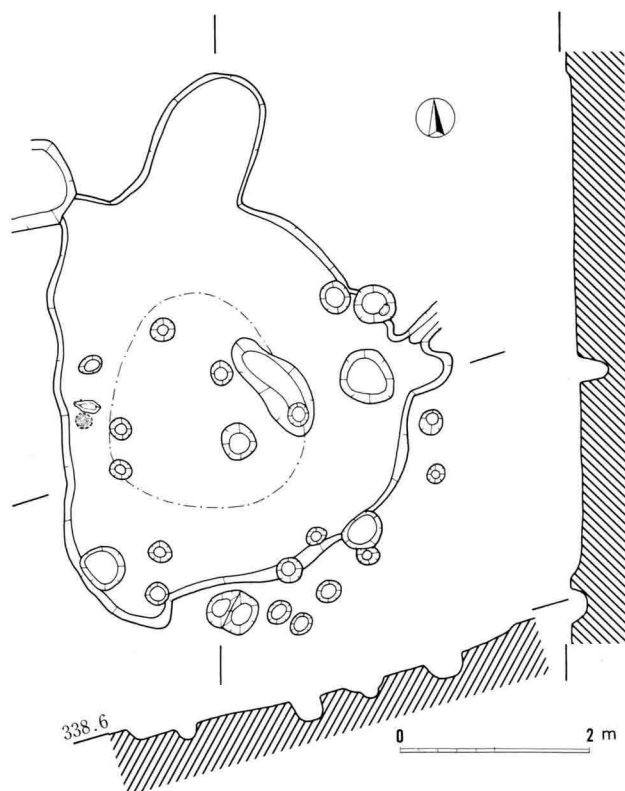


図23 6号住居址実測図(1:80)



IV-7 6号住居址

11号住居址

〔遺構〕(24図) 調査地の南西部に位置し、23号土坑や小穴を内包する。形態は隅丸方形を呈し、南北軸3.25m・東西3.0m・掘り込み14~23cmの規模になる。長軸方向はN21°Eを指す。北壁中央に焼土及び炭化物が認められ、カマドの痕跡と思われる。床面は平坦で南に傾斜し、軟弱である。小穴は柱穴と推定されるが2個のみで小屋組配列にならない。

〔遺物〕 出土量は数点にすぎず、土師器坏・甕、須恵器坏の小破片がみられるにすぎない。土器類の他に鹿角製品(66図5)が出土している。筒状を呈し、上下左右が対象形をなし、鋭利な刃物で平行線文が刻み込まれている。最大径2.8cm・内径1.6cm・長さ5.6cmの大きさで何かの装飾品と考えられる。

22号住居址

〔遺構〕(38図) 14号住居址を追及中に確認された遺構で、床面のみを検出である。形態は長方形を呈し、床面が南北2.9m・東西3.9mの規模になる。床面は貼床され平坦で堅緻である。カマドは14号住居址と重複する北壁に構築された可能性が高い。主軸方向はほぼ南北を指す。

〔遺物〕 遺構に伴う遺物は不明である。

以上の住居址は1次面にあたる。

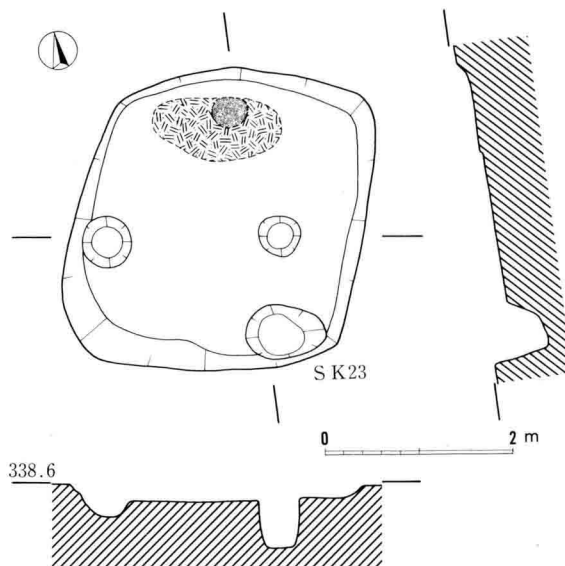
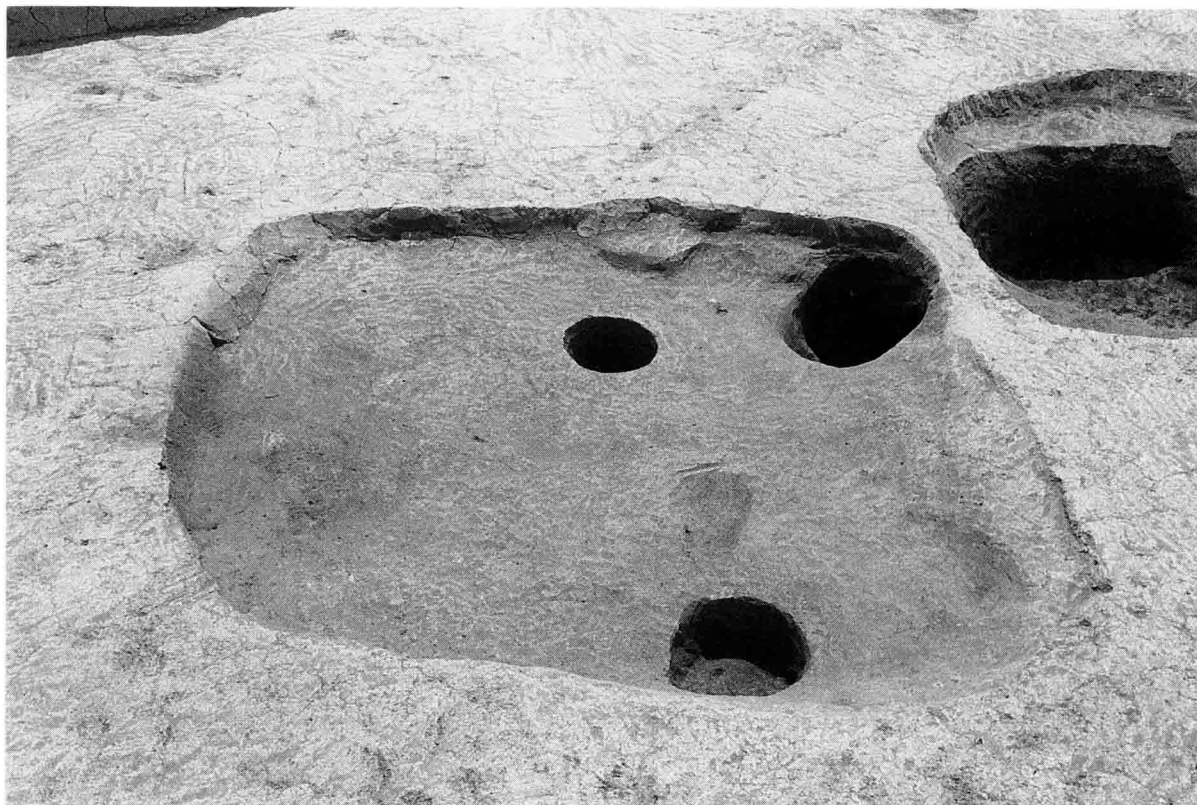


図24 11号住居址実測図(1:80)



IV-8 11号住居址

7号住居址

〔遺構〕(26図) 調査地の南西端に位置し、遺構の南側は調査区外にある。形態は北側で10号住居址と重複しているため定かでないが、隅丸長方形または楕円形を呈するものと思われる。長軸方向は南北を指し、東西の最大幅3.9mを測る。床面は掘り込みが10cm～20cmと東から西に傾斜を有する。南側に貼床が認められる。

〔遺物〕(25図) 出土量は少なく、器種には土師器杯・内黒杯・鉢(2)・甕、須恵器杯(1)がある。鉢の内面はヘラミガキ・黒色処理が施される。

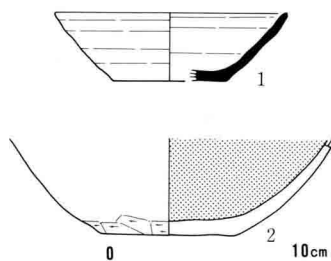


図25 7号住居址出土土器実測図(1:4)

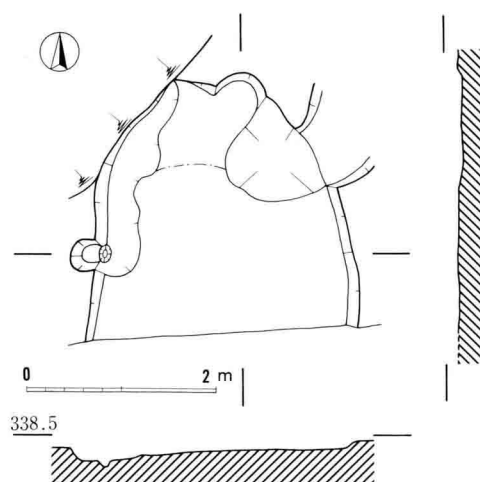


図26 7号住居址実測図(1:80)



IV-9 7号住居址

8号住居址

〔遺構〕(27図) 南西隅部に位置し、9号住居址と重複関係にあり、これよりも新しい。基本形態は方形を呈し、主軸3.14m・東西3.35mの規模であるが、西壁にそって並行に0.7m程張出してベット状遺構を併設する。カマドは北壁中央左寄りに幅34cm・奥行12cmの突出形態で構築され、火床及び支脚石が残存し周辺に炭化物が散在する。掘り込みは16cm前後を測り、床面は

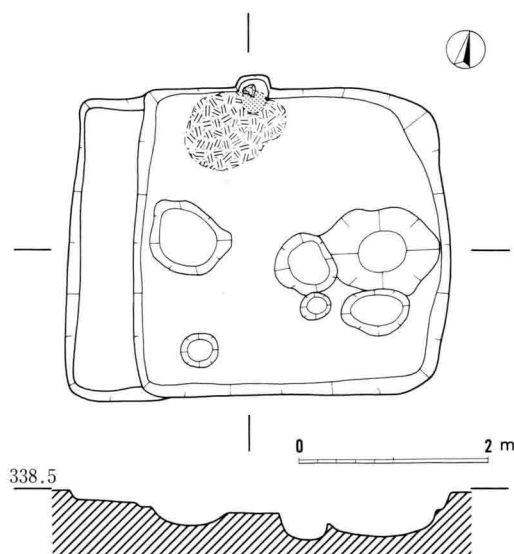


図27 8号住居址実測図(1:80)

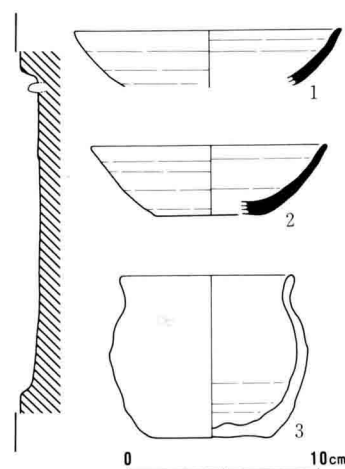


図28 8号住居址出土土器実測図(1:4)

堅緻なものとなる。底面が鍋底状を呈する土坑状の落込みや小穴が認められるが用途不明である。主軸方向はN12°Wである。

[遺物] (28図) 出土量は少ない。器種には土師器坏・甕・小形甕 (3)、須恵器坏 (1・2)・台付坏・浅鉢・甕がある。この他に砂岩製の砥石 (66図18)、ダルマ状土製品 (3) が出土している。

9号住居址

[遺構] (29図) 8号住居址の北東隅部と重複し、南壁付近は小学校廃材埋立てにより破壊され、南北規模は不明である。形態は東壁が西に傾く不整長方形を呈するものと思われる。東西3.8mで、南北はこれより長い規模になる。カマドは北壁に構築されていたものと思われ焼土が認められた。床面は検出面より8cm掘られ、平坦で軟弱である。住居址内にある溝状遺構や土坑状遺構は付属施設かどうか不明である。北壁からの主軸方向はN21°Wである。

[遺物] (30図) 出土量は比較的多い。器種には土師器坏・内黒坏 (1)・甕 (9)、須恵器蓋 (2)・坏 (3～8)・甕、鉄製品がある。鉄製品は錆が著しく品名は不明であるが板状を呈する。4には内外面に十字の火襷痕がある。4には内外面に十字の火襷痕がある。

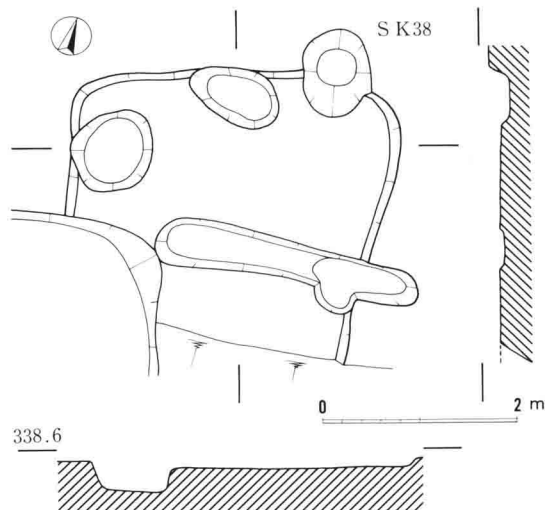


図29 9号住居址、38号土坑実測図 (1:80)

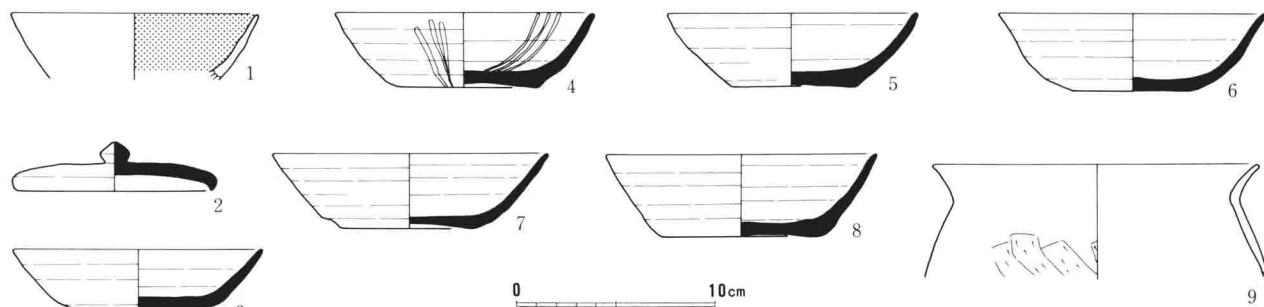


図30 9号住居址出土土器実測図 (1:4)



IV-10 9号住居址

10号住居址

[遺構] (31図) 7号住居址の北壁と重複し、これよりも後出の遺構である。南側は攪乱を受け、北壁東隅が突出し、南壁も不安定で形態が定かでなく、規模・主軸方向ともに不明である。住居址と想定したのは床面の中央付近が高まりをみせ、堅緻な貼床が確認されたことによる。掘り込みは東壁12cm・北壁10cmである。

[遺物] (32図) 出土量は比較的多い。器種には土師器内黒環・甕(3~5)・武蔵型甕、須恵器蓋(6)・坏(1)・高台坏(2)・甕がある。1の底部には糸切り痕を残すのに対し2はヘラケズリが施され高台を付す。土師器甕はロクロヨコナデで整形され、3の体部下半はタテヘラケズリ調整で仕上げる。6は蓋のツمامミ部で体部との接着面に同心円の刻みがみられる。

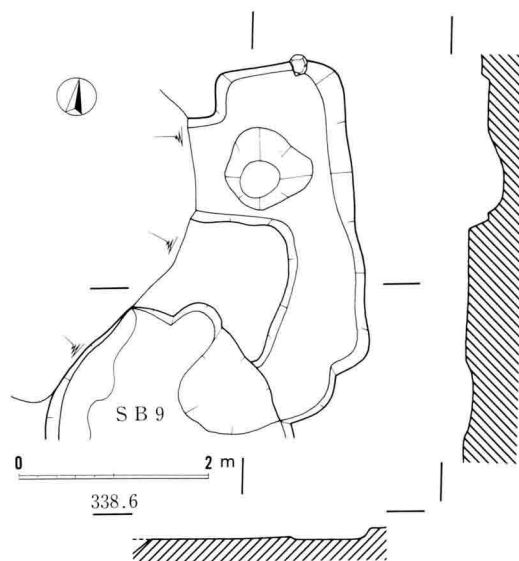


図31 10号住居址実測図(1:80)

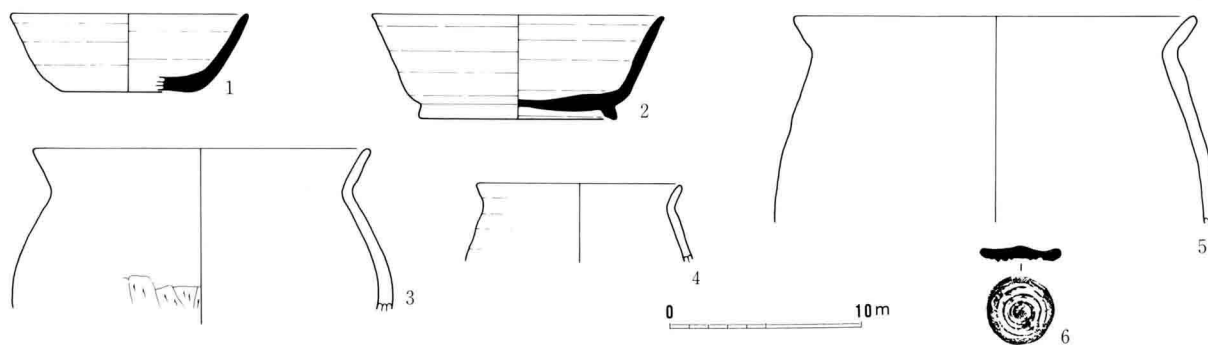


図32 10号住居址出土土器実測図(1:4)



IV-11 12号住居址

12号住居址

[遺構] (33図) 調査地の中央東寄りに位置し、後出の17号住居址・3号土坑と重複する。形態は方形を呈し、南北4.1m・東西4.85mの規模になる。主軸方向はN19°Wである。掘り込みは25cm前後になり、床面が若干の起伏を有し、北半分程に堅緻な部分がみられた。カマドは北壁中央に突出して構築され、火床部に最深30cm程の土坑状小穴が掘られ、内に焼土・炭化物を多く含む黒褐色砂質土が埋まっていた。上面から火床が確認されることから、住居使用中のある時期に湿気抜きのため掘り込まれたものであろう。南壁付近は落込みがみられ、西隅に深さ10cmの周溝状の溝がある。

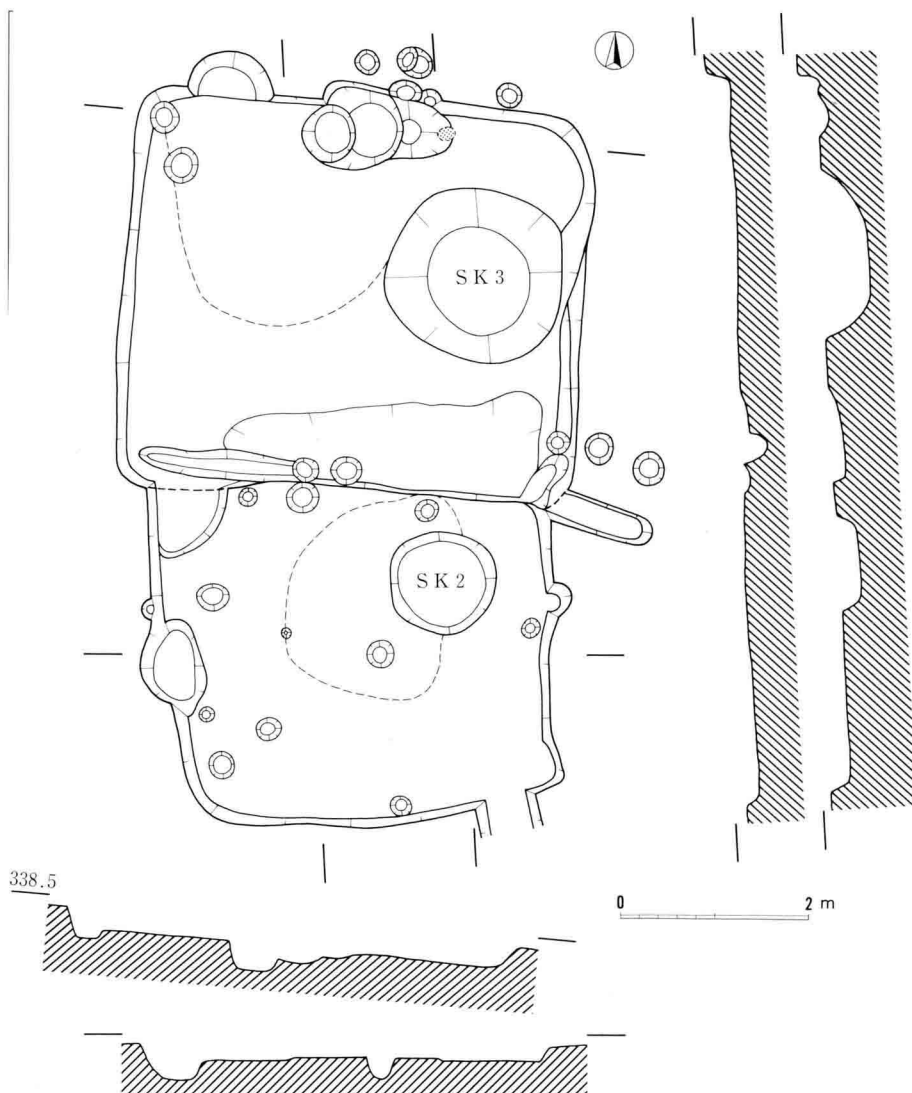


図33 12号(上)・17号(下)住居址実測図(1:80)

[遺物] (35図) 出土量は他の住居址より多い。器種には土師器坏(1・2)・内黒坏(3~6)・甕(16~18)、須恵器蓋・坏(7~15)・甕(19)、鹿角製筥(66図6)鉄鏃・釘がある。内黒坏の3・5の底部付近はヘラケズリが施される。10・12・13には火轆痕があり、8・10・12・13は白灰色ないし灰白色を呈し瓦質で、11は酸化炎焼成である。15には×印の線刻がみられる。

17号住居址

[遺構] (33図) 調査地の中央東に位置し、北壁が12号住居址と重複し、22号土坑を内包する。形態は方形を呈するものと思われ、東西4.2mの規模になる。掘込みは16cmで、床面は平坦で中央付近に貼床が認められ堅緻である。カマドは残存する各壁に認められないことから北壁に構築されていたものと推測する。南北軸はN26°Wの方向になる。

[遺物] (34図) 出土量は少ない。器種には土師器坏・内黒坏・鉢(3)・甕、須恵器蓋(1)・坏(2)・甕、砂岩製砥石(66図17)がある。土師器の甕は大小2形態あり、小形のはロクロにより仕上げられ底面に糸切り痕を残す。

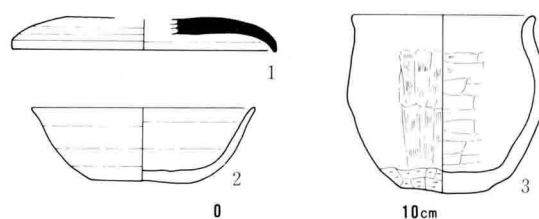


図34 17号住居址出土土器実測図(1:4)